
Scarlet Stardust

夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Scarlet Stardust

【NZコード】

N1759V

【作者名】

夜斗

【あらすじ】

その日、夜空を見上げていたフランドル・スカーレットは白金色の髪をした少女と出会った。

少女の名は、緋彗ヒカリ。

幻想郷を生きる人々の願いを聞き届けるため、果てなきソラから舞い降りてきた星の子。

フランにとつて、初めての友達だった。

願いを聞くため、二人の内緒の夜更かしが始まる。

夜闇を駆け抜け集めた願いは、果たして叶うのか。
そして、あの日フランが流星に祈った願い事とは……？

東方キャラ + オリジナルキャラの物語です。
独自設定や解釈、キャラの言動など原作と異なる場合があります。
そういうものが苦手な方はご遠慮ください。

序章 遙かなるソラの向ひ（前書き）

このお話は「東方 project」を題材とした一次創作です。作者による独自設定や偏見、解釈等が多く含まれております。それらが苦手な方はすぐに「戻る」をクリックしてください。

序章 遙かなるソウルの向こうへ

「ヒカリ大丈夫？ 怖かつたら無理して行くことないのよ？」

不安げな表情を見せる母親を前に、ヒカリと呼ばれた白金色の髪の少女はニッとも笑つてから答えた。

「大丈夫だよ、お母さん。私はもう立派にお仕事出来るもん」「でも……」

心配する母親の肩に少女の父親がそっと手を置いた。

「心配し過ぎだよ君は。彼女が自分でこいつ壇つているんだ、信じて送り届けてあげようじゃないか」「だけど、願いを聞く仕事は大変なのよ？ 命の危険だつて」「だーかーら！ 心配ないって」

少女はポシェットから小さなカードを取り出し両親に白塵するように見せつけた。

「私にはこのお守りがあるもん。危なくなつたら、これでドカーン！ つてやつちやうんだから」「でもヒカリ、まだ力をコントロールできないでしょ？ 前みたいに怪我でもしたら……」「やれやれ。これじゃ何時までたつてもヒカリが出発できないじゃないか」

父親は小さくため息を一つついてから少女の頭をポンと撫でた。

「ヒカリ、君の担当する幻想郷という場所は、名の通り幻想的で美しい平和な場所だと聞いている。だから危険はないと思う。人の願いを聞くというのはとても大変な仕事だが、一人前の星の子なら、出来るね？」

「もつちろん！」

「ん。それでこそ私たちの子供だ」

少女はトトトと駆け足で歩き、部屋の出口の前に立ち止まつた。振り返つて、もう一度両親に微笑みかける。

「いろんな人の、たっくさんの願いを聞いて、お母さんとお父さんに報告するよ。だから、待つてね」

「ああ。任せたよ」

「気をつけるのよ。もし知らない人に声を掛けられたら、問答無用で攻撃なさい。正当防衛なんだから」

「……君もけつこう物騒なコトを言つんだね」

父親の苦笑いを見て、少女はもう一度笑つた。そう。

私はもう一人前の星の子だ。

大好きなお母さんとお父さんのために、これから自分の使命を見事に果たしてみせるのだ。

「じゃあ、行つてきます！」

少女の目の前に広がる光り輝く星の海。
かくしてヒカリは、自分の担当する『幻想郷』へ向かつたため、流れ星に乗り込んだのだった。

序章 遙かなるソウルの向こう側（後書き）

いよいよ本日から東方二次創作シリーズ新作『Scarlet S tardust』が始まりますッ！

序章だけってのはちょっと物足りないため、9時半辺りに第1話を公開します。

それでは後ほどッ。

第一話 深紅の流星

初夏を抜けて、そろそろ夏本番を迎えるとしていたある夜のこと。
名の通り紅色に染まる紅魔館のテラスでは小さな茶会が催されていた。

「静かな月夜の下で紅茶を飲むのも、悪くないわね」

紅魔館の主であるレミリア・スカーレットはカップに口をつけると、
血色に染まる瞳をつっすらと細めた。
すぐ傍では典型的なメイド服に身を包んだ少女がゆっくりと頭を下
げる。

「お嬢様、お茶のお代わりは」

メイド服の少女は給仕用のポッドを手にそっと歩み寄る。

「ええ、 いただくわ
「咲夜、 私にも頂戴
「はい。 かしこまりました」

レミリアの正面には、仮面で顔を上げた一人の少女がいた。
片手でカップを傾げメイドの給仕を受けると再び視線を本に戻す。
視線を本に落としたまま少女は言った。

「それにしてもレミィ。これは一体どう風の吹き回し? 急に
夜空を見ながらお茶会したいだなんて
「いいじゃない、たまには。夜風に当たりながらの紅茶もいいでし
ょう?」

「咲夜の紅茶なら何時飲もうが、何処で飲もうが美味しいと思つけど」

「お褒め頂き光栄です。パチュリー様」

咲夜が頭を下げるとき、パチュリーと呼ばれた少女はどういたしまして、と軽く返事してからページを捲つた。

やけに古臭い表紙の分厚い本で、何ページあるのかは少し考えたくない。

レミリアが微笑う。

少女というにはやけに艶っぽい、妖しい魅力さえ感じり得るような笑みだった。

「シチュエーション 風情」というのも大事よ、パチエ。そこに咲夜の紅茶が合わさり至高のハーモニーを生み出すの」

「だからって、なにもこんな真夏にやることないでしょ?」アリ ……

そろそろ図書室に戻つてもいいかしら?」

「え……?」

途端、妖艶に笑んでいた表情が一変。

頬をふくーっと膨らませて、テーブルをぽかぽか叩きながら駄々をこねるように言った。

「えへ、やだやだ。パチエも一緒にお茶しようよ~。私と咲夜だけじゃつまんな~いの~」

その仕草は幼子同然。

今まで見せていた妖艶さは何処へやら。

「れ、レミリアお嬢様……」

「……はあ。もう少しじだけ付き合ひてあげるわよ、もう。あと咲夜、

ほらティッシュ」

「す、すみません」

静かに^{たしな}奢めるように咲夜が言つていたが、鼻血全開で奢められては説得力など無いに等しい。

受け取つたティッシュをくずかごへ投げると、咳払いをして氣を取り直した。

「あてツ」

一瞬、くずかごから声がしたような気がするが氣のせいである。鼻血メイドに奢められたレミィ、いや、レミリアはパチュリーが席に着き直したのを見ると、純真無垢な子供が見せるような可愛らしい笑顔になつた。

「ふふふ。それでいいのよ。そ、れ、で。……あら」

ふと、視界の端に金髪の少女が映つた。

咲夜もパチュリーも、もちろん唯一の肉親であるレミリアもその少女を知つている。

「お姉様、今日はお月さまが綺麗だね」

少女はレミリアに向かつてそう言つた。

姉によく似た妖しい雰囲気を持つ少女。名を、フランドール・スカーレット。

紅魔館を生きる吸血鬼の一人であり、そして、レミリア・スカーレットの実妹。

普段は館の自室で静かに過ごしているはずのフランが、突然テラスに現れてぼんやりと夜空を見上げていた。

「フランお嬢様、起きていらっしゃるのですか？」

咲夜の口ぶりからすると、どうやら先刻までは寝ていたらしい。よく見ればうすら涙の跡がある。

「うん、ついにやつた。ねえ、私もお茶会に混ざっていい？」
「いいわよ。咲夜、椅子を用意してちょうだい」「は。かしこまりました」

と、次の瞬間、咲夜はフランの前に椅子を設置してスッパリ引いた。ありがとうと一言添えてからちゃんと座ると、早速カップと紅茶が用意されていた。

「お姉様、今日は夜なのにビーフして外でお茶会してるの？」
「私の気まぐれよ。でも、気持ちがいいでしょ？」
「うん」

フランは屈託なく答えると、姉同様カップに軽く口をつける。

それから、しばらく無言の茶会となつた。

話題が無いから、という事ではない。

夏の夜を彩る虫の音や、流れる風の音を楽しむためだ。

フランだけは、カップを手にしたままずっと夜空を見上げていたが。

「……そうだ。お嬢様、流れ星のお話はご存知ですか？」

そんなフランの様子を見てか、ふと、咲夜が夜空を指差しながらこんなことを言った。

何なに？ と興味津津なフラン。

対して姉は微かに眉を動かしただけで、パチュリーに至つては本を凝視したままだ。

「流れ星のお話つて？」

「流れ星が空を瞬またたく瞬間に願い事を言つと、その願いが叶うそつうそりますよ」

「願い事が叶うそつの？ どんなお願い事でもかな？」

夜空の星に負けないぐら^いいに瞳を輝かせるフラン。

そんな微笑ましい表情に咲夜は頷き小さく笑みを浮かべた。

「でも、流れ星は本当にあつ！ といつ間に消えてしまふんですよ。その一瞬に、フランお嬢様は願い事を唱えることが出来ますか？」

「出来るよー、ザッタイ！」

自信満々にフランが叫ぶと、一蹴りで紅魔館の天辺てっぺんに飛び乗つた。そのままジックと星空を眺め始める。

「咲夜にしてはすいぶんとロマンチックなお話じやない。もし貴女あなただったら何を願うのかしら？」

「そうですね、お嬢様たちの無病息災をお祈りしましようか」

「……吸血鬼は不死身よ。それに、無病息災って神社で祈願するものじゃない」

「あら、そうでしたか？」

「あ！ 流れ星！」

夜空を切り裂く一筋の光。

しかし光は今のフランの言葉さえも追い越してまた夜闇の中へと消えてしまった。

「え、あ、う、うんと、私の願いは」

「フラン、もうとっくに消えちゃったわよ」

「え、ええ～！ もう消えちゃったの？」

「フランお嬢様、危ないですのでそろそろ下りてきてください」

「あ、また流れ星！」

すると、再び流れ星を見つけてフランは視線を真上に戻した。今度こそは願い事を言つてやる、と心に強く念じながら星を見据えてグッと構えた。

「あれ……？ ねえ、咲夜あ！」

「はい、何でしようか？」

「真っ赤な流れ星ってあるの？」

「……はい？」

テラスにいたレミリアと咲夜が同時に顔を見合せた。

屋根の上ではフランが夜空を指差している。

「赤い流れ星……？」

「フラン！ そんな流れ星ないわ。だから早く下りなさいー」

「でも、お姉様、アレ！」

フランが指差す方向を見て、二人は驚き目を見開いた。

空を輝く星よりやや大きめな光が見えた。

普通の星なら金や銀、白といった色のはずなのに、何故かそれは燃え盛る烈火のように赤かった。

そして光は空を切り裂くように過ぎるのではなく、まっすぐ紅魔館の方へと向かっている。

星が近づくにつれて地鳴りのような音が聞こえ始め空気がざわつく。

「な、何よアレ……！」

「お嬢様、アレはまっすぐ紅魔館に向かっています！」

「隕石……とでも言つのー？ パチエ、ちよつとー！」

「何よ。今いいところなのだけど」

「そんな本より！ ほら、アレを見なさい！」

促されるまま首を上げ、パチュリーは一人とまつたく同じ表情になつた。

「な、何よアレはー？ 新手の魔法？ それとも……」

「ど、どうしましようかお嬢様！ー？」

「……え、咲夜は何もしなくていいわ」

「お嬢様？」

レミリアはフランが今立っている屋根の上に飛びぶと左手に力を込め深紅の槍を作り出す。

それを見たフランが瞳を輝かせ、一いつと愉しそうに笑みを浮かべた。

「お姉様、フランもやるー！」

同じく右手に力を込め、フランが湾曲した剣を作り出す。

先端が矢尻のように尖っている独特な形状をした剣を構えると、二人は目の前の巨大な隕石を睨み据えた。

「私に合わせなさい、フラン」

「ん。わかった！」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「禁忌『レーヴァテイン』」

二人の術スペルカード

符が同時に輝き、紅と黒の閃光が隕石を貫く。

直撃した隕石は一瞬で崩壊し、一切の被害無く事なきを得た……と、レミリアが安堵の息をこぼした瞬間、

「……なツ！？」

黒煙が晴れた向こうに見えたのは、傷一つついていない隕石だつた。だが、幸いにも一人の攻撃で進路がずれたらしく、隕石は紅魔館の真横の湖に凄まじい爆音と共に墜落した。

湖の飛沫が飛ぶが、その時既に咲夜が傘をさして一人の間に立つていた。

「お怪我はありませんか一人とも？」

「ええ。無事よ」

「大丈夫」

「……私はびしょ濡れよまつたく」

テラスに残つていたパチュリーは湖の水を直撃して全身びしょ濡れになつっていた。

慌てて咲夜がテラスに戻りタオルを手渡す。

「……何なのアレ。私のグングニルも、フランのレーヴァティンもものともしないなんて」

「ねえ、お姉様」

思案している最中だつたが、レミリアは妹の言葉に振り向いた。

天真爛漫な瞳が、まるで新しいおもちゃを手に入れた子供のように光り輝いている。

どうやら、フランはあの隕石に興味があるらしい。

「あれって、流れ星だよね。直接触つたら願い事叶うのかな？」
「はあ？ そんなハズないでしょ？ あれが流れ星だったら……
て、ちょっと待ちなさいフランー！」

姉の言葉も聞かず、フランは七色の翼を羽ばたかせ湖へと向かった。

・ · ·

「ふ……っと」

湖はさほど距離が無いのでフランはあつといつ間に到着した。
隕石の衝突のせいか、湖にはほとんど水が無くなっていた。
所々で魚がビッヂンビッヂン跳ねているが、ほとんど無視してフランは隕石の方へと向かう。

「うわ……あ」

フランの何倍もある大きさの隕石が、蒸氣を上げながら地面に抉り込んでいた。
月明かりに照らされた隕石は一部が溶岩のように真っ赤になっている。

フランはもう一度レーザーテインを取り出し、先端で隕石を注意深く突つつきながらぐるっと一周した。
特に、これといった変化はなかった。

「おっ起きな流れ星だなあ。でも、今お願い事したらきっとうよね。
んつとい、んつとい……私の願いはね」

一生懸命考えて思いついた願い事を言おうとした時、不意に隕石の

方から「ン」、「ン」と二つの音が聞こえてフランは言葉を止めた。

「ふえッ？ な、何……」

音は不思議なことに、隕石の内側から響いていた。くぐもった音がドンドンだと、ゴンゴン、とか、まるで誰かが内側から呴いているようだった。

……中に誰かがいるのだろうか？

「 も、もしも～し……？」

隕石の表面を、もう一度レーザーテインで突ついてみると、すると隕石の表面に亀裂が走りガラガラと崩れ落ちた。その奥には、ぽっかりとした空洞が広がっていた。フランが恐る恐る中を覗きこむと金色の瞳と皿が合つた。

「ひやッ！」

そして、空洞の中から一人の少女がぬつと顔を出した。ぽんやりとした動作で右に左にと首を動かすと、やがてフランを向いて動きが止まった。

「…………」
「…………」
「…………」

謎の沈黙の後、フランが声をかけよつとした瞬間、少女はぐつたりと前のめりに倒れ込んでしまった。

「えー、え？ ああの、ビ、ビツみて……一、い、いひこの時どうしたらいいの？ えと、えつとも……」

「フランお嬢様！」「無事ですか？」

「あ、咲夜の声だ！　おーい、咲夜ー！」

咲夜の声を聞き、安堵の息を漏らすと、フランは倒れ込んだ少女の下へ走った。

見たこともないような真っ白いローブに小さなポショット。
そして一際目に付いたのが、絹糸のように美しくなめらかな白金色
の髪だった。

「ねえ、あの、大丈夫……？」
「…………」「、」「、」「？」

少女が顔を上げる。

十代前半のようなやや幼い顔立ちだが、思わずドキッとするほどに可憐な容姿だった。

「　」「、」は紅魔館のそばの湖だよ。あの、あなたは……誰？」「…………わ、私は……ヒカリ、緋彗ひすいヒカリ……う」
「ヒカリちゃん？　ヒカリちゃんつていつの？　ねえ、ヒカリちゃん？」

名前を告げて力尽きたのか、白金色の髪の少女はそのままパタリと氣を失ってしまった。

第一話 深紅の流星（後書き）

レ「ちよつといいかしら?」

夜「何かな」

レ「“スカーレット”って言つたら普通は私よね。それなのにどうしてフランが主人公っぽいのよ」

夜「フフフ……」

レ「な、何よその気味の悪い笑みは」

夜「一体いつから、自分が主人公だと錯覚していた?」

レ「……ぶつ殺す」

夜「残念、それは本体だ（ピチュー）ン

……いや、どうにもこの台詞が頭に残っちゃつてちょっと使ってみたかったんです。

さてさて新作「scarlet stardust」が始まりましたツ。

上の茶番の通り、主人公はフランです。

それと、新しいオリキャラは女の子。こっちの方が落ち着きますね。

一日一話で、またこれからよろしくお願ひします。

感想ご意見など、どうぞ下さる。

第一話 田覚める少女

「……ううん」

窓からこぼれる眩しい日差しを受け、少女はゆっくりと体を起こした。

そして全く見覚えのない部屋を巡回して首を傾げた。

「……あれ? いじるだね?」

そもそもどうして私はここに?.

少女はベッドの上できょと正座してから今までの経緯を思い出す

うとしてみた。

「えと……最初に、お母さんとお父さんに挨拶してから、流れ星に乗つて……」

人生で初めての航海だったが何とか星の海を渡り、やがて目標の幻想郷の空へとたどり着いた。

だが、ここで一つ問題が発生した。

「せっかく最初の願い事が聞こえたのに、急に流れ星のコントロールが出来なくて墜落しちゃつたんだって。どうにか不時着しようとしたら、田の前から紅いビームみたいのが飛んできて……」

……田の前からビーム?

つまり、私は撃墜された?

・ · ·

「いやいや！ お父さんが言つてたじゃん！ 幻想郷は美しくって幻想的で、平和なところだつて！ 撃墜されるわけないじゃんアハハハ！」

ハ、ハハ……と、その笑い声の勢いが段々と小さくなつていぐ。墜落か撃墜かはともかくとして、それなりどうして私はここにいるのだろう？

もう一度周囲を見回してみる。

子供部屋なのだろうか、積み木などといったおもちゃの類や、小さなクローゼット。

壁紙は桃色に赤みを増したような女の子らしい色。

「田が覚めましたか」

「は、はい！？」

突然真横で声がして声が裏返ってしまった。

いつの間に現れたのか、少女の傍には銀色の髪の少女が座っていた。フリルのついたその服装を見て、どこかで見覚えあるようなど見つめてから思い出した。

メイドだ。

お金持ちのお嬢様とかお坊ちやまを給仕したりするお手伝いさんの恰好をしている。

ということは今いるここは誰かのお屋敷なのだろうか。

……それとも、ただのコスプレイヤーなのだろうか。

「……私の服に何か？」

「へ？ あ、ううん。何でもないです」

「あら、田が覚めたみたいね」

すると、今度はピンク色のローブ姿の少女が現れ少女をその血色の瞳でちらと見た。

少女より下か同い年ぐらいの背恰好。

その表情は、少女というには少し大人びているような気もした。

「あ、あの……えと、こには？」

「こにはレニアお嬢様のお屋敷である、紅魔館でござります」

すかさずメイドが答える。

しかしその名に全く聞き覚えのない少女は首を傾げた。

「え、こつかん……？ それって幻想郷なの？」

少女の言葉に、メイドと血色の瞳の少女が顔を合わせる。

この子は何を言っているのだろう。

そんな言葉がすぐにでも出てきそうな怪訝そうな表情をしていた。

「ええ、幻想郷ですけど……？」

「ホント？ ホントに幻想郷？ はあー、よかつたあ……」

ホツと胸をなでおろす少女。

メイドと血色の瞳の少女はさつぱり事情がわからない。

「あ、起きたんだヒカリちゃん！」

突然名前を呼ばれて振り向くと、今度は金髪の少女と目が合つた。血色の瞳の少女と似ているが、それよりどこか幼い顔立ち。二人は姉妹なのだろうか。雰囲気とか、どこか似ているような気がする。

……しかし、気になつたのは少女の言葉だ。

「どうして私の名前を？」

すると金髪の少女は不思議そうな顔をして答えた。

「私が見つけた時に自分で教えてくれたんだよ？ 覚えてない？」
「そ、そういう……」

ぼやける視界の先に、少女と同じ金の髪を見たような気がする。
もしかして、最初の願い事はこの少女のものなのだろうか。

「あ、私のお名前教えてないね。私はフランデール・スカーレット。
フランって呼んでね」

フランがここやかに名乗ると、次いでメイド服の少女が小さく会釈した。

「紅魔館のメイド長を務めさせております、十六夜咲夜と申します。
そしてこちらが主である」

「レミリア・スカーレット。レミリアで結構よ」

「えと、レミリアに、咲夜に、それとフラン……」

指を折りながら慎重に頭に刻み込む。

記憶力が大事な仕事だ。

人の名前ぐらいはちゃんと覚えること。

「うん、覚えた。じゃあ私も自己紹介しないとね。私は紺慧ヒカリ
って言います。ここにはお仕事で来ました」
「お仕事？」

フランが横で首を傾げる。他の一人も同様だった。
レミリアがヒカリに訊ねる。

「貴女の仕事って何なのかしら?」

「はい。私の仕事は“願いを聞くこと”なんですね」

「願いを聞く……？ それはどういう」

「やっぱり！ ヒカリちゃんは流れ星の妖精なんだね？」

「流れ星の、妖精……？」

レミリアの言葉を遮り、フランが目をキラキラさせながらヒカリの姿を見つめた。

純白のローブに白金色の髪、肩からかけた小さなポシェット。
まあ……パツと見妖精に見えなくもない。

「だつて、流れ星からヒカリちゃん出でてきたんだよ？ 私ゼッタイ
そうだつて信じてたもん」

「私は妖精じゃないですよ。私は星の子だよ」

「星の子……。新種の妖怪でしょうか？」

「いえ、私は星の子です」

「神とかそういう類の可能性もあるわよ」

「か、神？ そんな大袈裟なものじゃなくて、えと、本当にただの
星の子なんだけど……」

星の子、といつてコアンスが伝わらないのがもどかしい。
レミリアが再びヒカリに訊ねた。

「ねえ、貴女が願いを聞いたらどうなるのかしら?」

「願い事を聞いたら帰るんです。集めた願いは私のお父さんとお母
さんが叶えてくれるんですよ」

「ヒカリさんのご両親ですか……？ 願いを叶えられるなんて、

「一体何者なんでしょうか」

「……パチュリーに訊いてみましょうか。何か知ってるかも。じゃあ、失礼するわ」

レミリアはそう言って部屋を出て行ってしまった。

咲夜は水をお持ちしますね、と言つて一瞬消えるとヒカリの傍に水の入ったコップを置いた。

特に無反応のヒカリを見て、咲夜は言った。

「…………あれ？ 驚かないんですか？」

「何が？」

「いえ、あの……今、一瞬でお水をお持ちしたんですよ？」

「時間を止めて、その間に持つてきたんでしょう？ それぐらいなら

私は見えますよ

「み、見えますって……？」

ヒカリの目に嘘をついている様子はまるで見受けられなかった。本当に、見ていたのだろうか。

「…………コホン。それでは、私も失礼します。何かあればお呼びください」

では、と告げてから再び咲夜の姿がかき消える。

今度も、ヒカリは特にこれといった反応は見せなかつた。

「ねえねえ、今の本当？」

「え？ 何が？」

「咲夜の姿を見るつて、本当なの？」

「ううん、一瞬だけなんだけどね。部屋を出て、お水を置いてくれた一瞬だけなら」

「す、」「い！ ヒカリちゃんって何か能力ちからを持つてるの？」

興味津津といつた様子でフランが訊いてくる。
ヒカリは大きくうなずいて微笑んだ。

「うん。まだ上手くコントロールできないんだけどね。フランも何か能力持ってるの？」

「弾幕」ついに……

すると、ヒカリは口の端を上げて一ヶコリと笑った。

うん、いいよ。私でなければお相手しよう。

そして机の上のポシェットから数枚の術符を取り出してみせた。

「私、けっこう強いからね」

「わわッ！ ちょっと待ってよフラン！」

笑顔のフランに腕を掴まれ、ヒカリは部屋を飛び出した。

第一話 田代の少女（後書き）

小「あの、いいんですか？ フランお嬢様と弾幕『』こだなんて…」

夜「大丈夫だ、問題ない」

小「はあ……そうですか？」

夜「こあさん、恐らく明日出番があるから台本をチェックしておくんだよ」

小「が、頑張りますッ！」

夜「したらな！」

小「……？」

分かる人だけ分かってくれればそれでいい…
何か、茶番付きのあとがきって良いな！

第三話 図書室ではお詫かに

フランに連れられてたどり着いたのは紅魔館の中にある図書室だつた。

扉を開けるなり漂つぼうりつぽい匂いに、ヒカリは思わず顔を覆つた。

「う……すじこ匂いだな。古い本とか、カビとかの匂いが混じつたような何とも……」

「こじすじこく広いんだよ！ 見てよホラ！」

指差す方向に目を向ける。

当たり前だが本棚がずらりと並んでいる。

だが、不思議なことに本棚の終わりが見えない。

本来なら壁とか窓とかありそうなはずなのに、この図書室にはそんなもの全く見当たらなかった。

ただ延々と、まるで合わせ鏡の世界のように本棚がずっと続いている。

「……す、すじこ」

「あれ？ フランお嬢様、こんなところで何をしていらっしゃるんですか？」

すると、本棚の奥から少女がひょいと姿を現した。両手には大量の本が積み重なっている。

「あ、小悪魔だ。何してるの？」

「図書館の蔵書点検ですよ。常に本が増えたり減ったりでパチュリ一様だけでは管理しきれないとおもいます。……あら、そちらの方は？」

「ヒカリちゃんだよ。昨日私が助けたの」「ど、どつもです」

ヒカリが軽く会釈をすると、小悪魔と呼ばれた少女も軽く頭を下げた。

赤茶の髪に執事風の黒いスーツ。

そして背中には、黒い小さな羽根がぴこぴこ揺れていた。

「それで、お二人は図書館に何かご用ですか？」

「うん。ここに弾幕」」しに来たの…」

「だ、弾幕」」ですか？でもあの、ここは図書室ですのでそう

いつたことは

「じゃあやるよー！」

「お、お嬢様あ！」

涙目の中魔を無視してフランが飛ぶ。

ヒカリと距離を取つて向かいあうと、さっそく術符を取り出し起動させれる。

「決闘開始！ 禁弾『スター・ボウブレイク』」

フランを中心に、赤、青、黄、形や様々な大きさの光弾が浮かび上がり、ヒカリに向かつて直進する。

ヒカリはスゥツと息を吸うと、姿勢を低く構え床を蹴った。

「きやあああああああ！？ お、お嬢様！？」

「……ッ！？ なになに！？」

弾幕が直撃するのと同時に、小魔とフランの間を凄まじい暴風が横切った。

小悪魔は天井に激突、フランはどうにか踏ん張つて体勢を維持する。やがて風が止み、弾幕が生みだした黒煙が晴れていく。そこに、ヒカリの姿はなかつた。

「……あれ？ ね、ねえ、ヒカリちゃん？」

「何？」

「ふえ？ ひやあああー！？」

予期せぬ方向からの返事にはフラン飛び上がって振り向いた。ヒカリは顔中ほこりだらけでにっこりと笑つて立つていた。

「わ、私の弾幕でここまで吹っ飛んじゃつた？ 大丈夫？」

「弾幕？ 私は当たつてないよ～？」

「……ええ？ 嘘はダメだよヒカリちゃん？」

「ふふふ。ホントに当たつてないよ～。アッハハ」

あつけらかんと笑つその姿を見て、フランは少しムツとなつて再び距離を取り直した。

次は、もっと強い弾幕でやつつけてやる。

両手に力を込め、その手に湾曲したやや特殊な先端を持つ剣を作り出す。

「禁忌『レーヴァテイン』」

一瞬で間合いを詰め、零距離で剣を振りかざす。直撃は必至、これで私の勝ちだ。

「はあああああああああッ！！」

床が抉れ爆音が響き、紅魔館の図書室に巨大な風穴を空けた。

そんな壯絶な光景に小悪魔は放心したよう口をパクパクさせていた。

「あ、あわわわ……！ わ、私殺される！ パチュリー様どこるか、咲夜さんにも、レミリアお嬢様にも……」「はつはつはー、これで私の勝ちだね！」

トントン。

「ん？」

肩を叩かれ回れ右。

「ざ～んねん、当たつてないよ～？」

「な、なんでえええ！？」

フランが初めて驚きで叫んだ瞬間、かもしれない。ヒカリはさつきとほとんど変わらない恰好で、つまりほとんど無傷でフランの背後に立っていた。

驚き戸惑うフラン。

ヒカリはニシと自信満々な笑みを浮かべた。

「これで終わり？」

「ち、違うよー！ まだとつておきがあるもんー！」

三度距離を取つて飛ぶと、別の術符を取り出し発動。フランは不敵な笑みを浮かべ両手を構える。

「禁忌』『フォーオブカインズ』」

突如フランの姿が四人に増えた。

当然、両手に集まつた光弾も四つに増えた。

これで単純に弾幕量が四倍となつた。

今までの攻撃よりも遙かに破壊力が増す。

そんなフランの姿を、ヒカリは金色の瞳で注意深く観察していた。

「……すごい速さで動いてる、ってわけじゃないんだ。幻想郷の人
つてすごいな」

「恐くなつた？ でも、攻撃するからね！」

「ふふん、どんとこいだ！」

「当たれええええッ！！」

「いやああああああッ！？」

四人のフランが一斉に光弾を掃射する。

暴風雨に勝るとも劣らないような弾幕に、小悪魔は悲鳴をあげながら逃げ出した。

図書館が、フランの弾幕を浴びて半壊する。

本は吹き飛び、壁や床は穴だらけ。

そんなことはお構いなしにフランは弾幕を撃ち続けた。

図書館全体が黒煙に包まれたころ、フランはやつと弾幕の手を止めた。

「ふう……。これならゼッタイ当たつてるよ。だから私の勝ち！」

黒煙が晴れて、図書館の無残な光景が広がる。
まるで大災害のあとのようなだ。

瓦礫の中から小悪魔がブツハア！ とか言いながら顔を出した。

「あ、小悪魔。ヒカリちゃんどこかな？」

「……ふ、ふえ？ ヒカリさんですか？ こんな有様じゃあ流石に

死んでしまったのでは……」

「でも、さつきの攻撃を無傷で避けてたからもしかしたら……」

不意に、背後に気配を感じてフランが振り返り、そして目を見開いた。

瓦礫の山のつぶんに、白金色の髪の少女が立っていた。先刻と変わらず、ほとんど、いや、まったくの無傷だった。

「な、んな……ッ！」

「えっへへ。いやあ、危うく死んじゃうとこだつたよ。フランって強いね」

「そんな、嘘だよ！？ 私の攻撃全部避けたの！？」

「星の子ですから。速さには自信があるよ」

さて、ヒカリが続ける。

手には白い術符が握りしめられていた。

「今度はこっちの番、行くよ！」

右手を構え術符を発動させる。

全身を金色のオーラが包み、その手に小さな光球が生み出される。

「瞬符『光陰矢の如し』」

術符の名の通り、光球はまっすぐな矢を作りヒカリの手でふわりと浮かんだ。

それをグッと握りしめ、ヒカリはフラン目がけて全力で投げた。

「そ、そんな攻撃簡単に避けて」

光の矢はフランの台詞を遮り脇腹をかすめて紅魔館の壁に突き刺さつた。

「……え」

あまりの速さに目が、いや、思考が追いつかないほどだった。
その一瞬に起こった出来事が理解できない。

今、何が起こった？

ヒカリが矢を構えて、その瞬間には壁に光の矢が突き刺さつていて

……

混乱するフランを見て、ヒカリは得意気な表情になつて言った。

「すごいでしょう？ 私の術符。スピードだけなら自信があるよ
「す、スピードだけって……」

速過ぎる。

あまりにも速過ぎる攻撃だ。

それはまるで、目の前を光が瞬くのと同じくらい。

瞬きをしたら見失ってしまう流星とほぼ同じ、いや、それ以上だ。

「……ひ、ヒカリちゃんの能力って、何？」

ヒカリはにつこり微笑んだまま答えた。

「私の能力は『刹那を瞬く程度の能力』。この能力を使うと、瞬きするほんの一瞬ですら駆け抜けられるぐらい速く動けるの。私の一歩は、一光年なんだ」

「い、一光年……？」

聞き慣れない言葉にフランは首を傾げる。

それは何、と訪ねようとした瞬間、ヒカリとフランの間に積もっていた瓦礫の山から紫色の何かがボコッと飛びだした。

「ち、違つわよ……」

「わッ」

「きやあ！？ な、何これ？ そ、それに違つて、何が？」

紫色の次は白い何かが飛び出す。

どうやら誰かの手、らしい。

よく見れば紫色の何かは髪のようだ。

白い腕が伸び、何かが這い出でくる。

ゼエハアしながらその何かは、フランとヒカリとを交互に見てから言った。

「……ゼエ、ゼエ。げっぽ、ケホッ。光年は、速度の単位、じゃな

くて、距離の単位よ。それと……」

「そ、それと？」

スウッと大きく息を吸い込む。

これから盛大に叫ぶつもりなのだろう。

「図書室では、静かになさああああああああああああああああいッツー！
！」
「はう」

それだけ叫ぶと、紫色の何かはぱたりと倒れてしまった。

第三話 図書室ではお世かご（後書き）

お気に入り登録、評価ポイント等、ありがとうございます。
と言っても、書き始めたばかりだからアクセス数が少ない；
まあ、いいか……

PS

最近、エンドオブエタニティEOEにめちゃくちゃハマってあります。

下野力ッ口いよ、下野！

第四話 星降るバカ

「そりいえば貴女星の子だつて聞いたけど、星の子って何なの？」

荒れ放題の図書館の最奥で、パチュリー・ノーレッジは相変わらず小難しそうな本に視線を落としながらヒカリに訊ねた。

「ほ、星の子は星の子ですよ。いろんな人の願い事を聞くのがお仕事なんです」

「そうじゃなくて。種族の話。私は魔法使い、レミコアやフランは吸血鬼といった具合よ。貴女は何なのかしら？」

……ちなみに、今現在一人は正座している。

「え？ フランって吸血鬼だつたの？」

「そうだよ～」

「へえ……吸血鬼って血を吸うアレだよね？ フランも血を吸つたりするの？」

「ん～、時々」

「そ、そりなんだ……」

やや顔を引きつらせるヒカリの表情を見て、フランはいやいやと両手を振つて言つた。

「ヒカリちゃんからは吸わないよ。それに、飲みたい気分じゃないから大丈夫」

「そ、そつか。ちょっと安心したかな」

「……で、種族の話よ。どの本にもそれらしい記述はないの。私としては少し興味深いわね」

カップの「一ヒー」を口につけながらパチュリーが言つ。

この「一ヒー」は小悪魔が淹れてくれたもので、現在小悪魔は崩壊した図書室の修復作業を一人でやつていて。

ヒカリは時々背中に突き刺さるような視線を感じていたが、他の二名は気づいていないのか無視してゐるのか無反応だった。

「種族……。ううん、そんなこと考えたこともないんですけど」「妖怪のかしら？ それとも妖精、或いは精霊、亡靈や幽靈の類とは思えないわね。けれど、かなり強力な能力を持つている。……謎だらけね」

「だから、ヒカリちゃんは流れ星の妖精なの。それでいいの！」
「流れ星の精霊って……。そういうば、貴女どうしてここに？ 願いを叶えるつてどうこうお仕事なのかしり？」

パチュリーの質問に、ヒカリは待つてましたと言わんばかりに胸を張り答えた。

「願いを聞くつていうのは、私たちが流れ星に乗つて、地上から届いた願い事を聞くことですよ」
「流れ星に乗る……？ それつてどうこう意味かしら」

途中、ヒカリも「一ヒー」に口をつけ息を整える。

……まだ苦い。

角砂糖あと五個追加しないと。

「……貴女、ブラックで飲めないの」

「地上から流れ星として見えるものは私たちの船なんですよ。流れ星には願いを感じするセンサーが付いていて、それを集計して家に帰るのが主な仕事です」

「じゃあ、私たちが普段見ていく流れ星は、貴方たち星の子の船だつてこと?」

「はー、やうですよ」

角砂糖だけじゃ足りない。
ミルクも入れないと。

「……甘過ぎない、それ」
「私、苦いの苦手なんです」

これでもまだ足りないぐらいだ。
甘過ぎてもはやと「コーヒーと呼べなくなつたカップの中身を一気に
飲み干してソーサーに戻す。
パチュリーが初めて顔を上げる。
薄紫色の瞳はぼんやりと眠たげだった。

「それで貴女、これからどうするの? 確か貴女の乗つてきた流れ
星、紅魔館の横の湖に墜落しているんじやなかつたかしら」
「あ……そ、そういうばそうだった。どうしようつ……」

ヒカリの表情が曇る。

このままでは仕事が出来るかどうかわからない。
もし、出来なかつたらどうしようつ。
せつかく一人前の星の子になつて、お母さんとお父さんの役に立てるんだと張り切つて出でていつたところに、このままじや……
すると、フランがヒカリの顔を覗きこんできた。

「ねえ、ヒカリちゃん。よかつたら湖に行つてみない? 私も一緒
に行つてあげるから」

「え……」

顔を上げると、ついついすら滲んだ視界の向こうでフランが微笑んでいた。

「私も興味があるから一緒に来つてあげるわ。支度が出来たら玄関で待つていなさい」

それだけ言つとパチュリーは本をぱたりと閉じ、ふわふわと飛びながら図書室を出ていった。

「じゃあ、夜になつたら行こつか。それまで、何して遊ぶ？」

「夜に……ああ、フランは吸血鬼だから、夜にしか出歩けないんだ」

「そんなことはないんだけど、夜の方が動きやすいし楽しいの」

「ふうん……？」

幻想郷の吸血鬼といつのは強いものらしい。

ヒカリは両手を『じじ』じこすつてから、フランと一緒に図書室を後にした。

「あのう……、これ、ホントに私一人で……？」

小悪魔の言葉は誰の耳にも届いていなかつた。

・・・

太陽が西に沈み、幻想郷の空に漆黒の夜空が広がる。
適当に準備を済ませ玄関に向かつと、そこにはやつぱり本に視線を落として浮かぶパチュリーの姿があつた。

「本、好きなんですか？」

「ええ、大好きよ。自分の知らない知識を得るといつことひととも素晴らしいことなの」

「フランもよく咲夜に読んでもらってるよ」

「じゃ、そろそろ行きましょうか」

ふわりと風に乗るようにパチュリーが飛ぶ。

次いでフランが飛び、そしてヒカリが最後になる。

「けつこう派手に墜落したのね。湖の端が抉れてるわ」

湖の水は元に戻つてはいたが、地面は抉られたままだ。
その跡を辿つて行くと、やがてヒカリの乗ってきた流れ星が見えてきた。

「私が最初にここに来て、ヒカリちゃんを見つけたんだよ」

崩れた地面と流れ星の間を指差しながらフランが言つ。
だがフランの言葉はほとんど届いておらず、半ば放心状態でヒカリは流れ星の前に立ち去つていた。

「あ、ああ……」

表面を触りながらぐるりと一周。

その後ヒカリはハツとなり流れ星にぽつかり空いた穴の中に顔を突つ込ませた。

「……よかつた。まだ完全に使えなくなつたわけじゃないみたい」

内部は思いの外損傷がなく、一部の機能はしっかりと生きていた。

願いを感じするセンサーモジュール、船体の生命維持装置。しかし、何故か食料庫だけは空っぽになっていたが。

「……？ 何だろ、コレ」

食料庫の奥の壁に、何やらペンで書きなぐつたような文字が書かれていた。

もちろん、ヒカリのものではない。

そもそもヒカリは漢字も英語も、その他の言語も多少は書ける。それなのに、その文字は……

「……あ、た、の？ サ、ル……？ 何だらづ」のラクガキは

辛うじて読めたその文字は、まるでミミズが全速力でダンスをしたよつな滅茶苦茶な文字だった。

……いや、これでは文字に失礼かもしねれない。

「まあいいか。後は動けるかどうかチェックすれば大丈夫……」

コンソールに手を伸ばし起動させる。

船体が微かに振動し、パネルに光が灯つていく。

「これで、動けば……あれ？」

と、そこで何故か振動が停止し、パネルの光も無くなってしまった。別のコンソールを動かし再び試すが、それっきり動かない。何度も、何度も試したが……

「な、何で？ 何で？ エンジンの故障？ それとも、燃料切れ？ え？ え……」

「ちゅうとー！ アタイの秘密基地に向してんのやーー！」

不意に外から声が響いてヒカリはその手を止めた。

秘密基地？ あたい？

フランの声でもないしパチュリーの声でもない。

ヒカリが流れ星から顔を出すと、フランとパチュリーの前に不思議な女の子が腕を組みながら浮遊していた。

青いショートカットに空色の瞳。

何やら怒っているらしく、眉を歪ませ両手をぶんぶん振り回して抗議しているようだ。

そして背中には、細い宝石のような翼が忙しそうに羽ばたいている。

「だからチルノー、これはヒカリちゃんの流れ星で、チルノの秘密基地じゃないよ」

「だつて名前書いてなかつたもん。自分の物ならちゃんと名前書いておくべきでしょー」

「だからって勝手に入るのはよくないわよ

「いいの！ アタイは最強だからいいのー！ 今度みんなを呼んでここで弾幕^{（）}こする約束もしたの！ だからもうアタイの物だよーーー！」

「む、むう……」

「チルノらしい単純な思考ねえ……。私とフランで懲らしめましょーか？」

「ま、待つて！」

パチュリーが本から七色の術符を取り出し構えたところで、ヒカリがチルノの前に躍り出た。

「おお？ 誰だお前？」

「私はヒカリ。あの流れ星は私の物なの。だから、私が相手をする

！」

「流れ星？あの秘密基地の名前？カツコイイ名前だな！」

チルノは嬉々として頷き、ヒカリを見据え指を差した。

「いいよ！最強のアタイが相手したげる！まずは『
弾幕勝負』……」

すると、指差した指が三つ立てられた。

「三本しょーぶ！今日のアタイはしんしてきだから、あんたにチ
ヤンスをあげよう！」

「三本勝負……？じゃあ、最初は何で勝負するの？」

チルノが不敵に笑う。

初対面のヒカリが見ても、全然似合っていない。

そんなことは露知らず、チルノは声高らかに宣言した。

「さいしょは、かけっこで勝負だ！」

ヒカリの顔が一瞬ボカンとして、それからチルノとは対照的にニーッ
コリと、輝かんばかりの笑みを浮かべた。

第四話 星降るバカ（後書き）

何となく、今日はあとがきが浮かばないので特に無しです。

感想、ご意見、お待ちしておりますよ～

第五話 リツドナイト・バトル

「おじっちにー、そんしー……つと」

体を曲げたり捻ったりしながらチルノは準備運動をしていた。場所は少し変わって開けた草原。

ヒカリも真似をしながら準備体操をするが、正直意味がない。

「チルノ、ヒカリちゃんのこと何にも知らないもんね……」

「そんなに早く動けるの？ 少し信じられないんだけど」

「まあ、見てくださいな」

チルノのストレッチが終わり、くるっと振り返るとヒカリはビシッと指を差された。

「ふつふつふ。幻想郷最強のあたいに勝てると思わないことね！」

「わー、さいきょうつかー、こりやあかてないなー、びしそーー」

完璧なまでの棒読みっぷり。

しかし相手はチルノバガである。

余裕たっぷりに笑うと、地面に小枝で線を引く。

それから、正面に見える大きな木を指差してから言った。

「こー」がスタートで、向こうの木がゴール！ 飛ぶのも特別に許しあげるよ

「他にルールはないの？」

「ない！ 勝つた方があの秘密基地を手に入れるのだ」

気合い十分のチルノはクラウチングスタートの姿勢を取って構える。

「おお、本格的な、とヒカリは心の中で呟いた。
……決して馬鹿にしているわけではない。

「…………」

「…………何よ、その田は」

「よーいドン、って言つて」

「仕方ないわね……いい？ よーい……」

チルノがグッと脚を曲げ姿勢をさりげなく低くする。
ヒカリも、一応形だけ構えを取つた。

「ゾンー。」

パチュリーの合図と同時にチルノは駆け出し、滑空するようにしながら飛び出した。

ヒカリはその後ろ姿を追いかける形でゆっくりと走り出した。

「ハツハツハ！ 勝つたぞアタイ！ 強いぞアタイ！ めょーじん！ むてき！ サイキョーだ！」

「…………いいの？ バカだけどアイツ結構なスピードよ？ 追いつける？」

「ん、じゃあそろそろ行つてきまーす」

姿勢を低く構え右足に力を込めて、本気で地面を蹴る。

ドオンッと爆風にも似た轟音が響くと同時に凄まじい風が巻き起こり、パチュリーの帽子が遙か彼方にぶつ飛んでいく。

「な……何!? 何が起こったの?」

「つう、やつぱり速過ぎて田が追いつかない……」

気がつくと、チルノの指差していた木の横に白金色の少女が両手を振りながら立っていた。

チルノはまだ半分も進んでいない。

それでも全速力で飛んで「ゴールし、勝ち誇った笑みを上げようと顔を上げたら、目の前には既にヒカリがにっこりと微笑んでいた。

「あ……アレ？」

「えへへ。私の勝ちだね」

ブイ、と右手で✓サインを作つて見せる。

チルノはぐきゅきゅと歯ぎしりしてから叫んだ。

「い、インチキだ！ はんそく！ そんな速く動けるなんておかしいじゃん！」

「え？ そんなことないよ、私は一生懸命走ったもん」「ぐ、ぐぐぐ……！」

さて、と得意気な表情のヒカリはチルノに訊ねた。

「一本目は私の勝ちだね。次は何で勝負するのかな？」
「二、今度は……」

チルノが考えている間にフランとパチュリーも木の近くへ会流する。長いこと唸り声をあげながら、チルノが提案した「一本目の勝負は、

「だ、弾幕ごっこだ！ 」うなつたらアタイの最強の弾幕見せてあげるよ！」

「やつぱり弾幕ごっこでくるか」

「……本当はそれ以外に考えてないだけなんじやいの？」

「う、うるさいやうるさい！ アタイは最強だからいいの！ アタイ

がルールなの！」

チルノが分かりやすく動搖する。図星らしい。

「アタイの弾幕は最強なんだぞ！ 当たつたらゼッタイピピューンつてなるんだぞ！ 恐くなつたら降参してもいいんだぞ！」

「どんな弾幕かは分からぬけど、あの流れ星を取り戻すために受け立つよ」

「ふつふつふ、後悔してももう遅いんだからね！ とおツ！」

華麗に飛んでヒカリの真上を取ると、さっそく青い術符をポケットから取り出し起動させる。

どんな攻撃が来るのか、ヒカリはその場でジッと構え術符を見据えた。

「氷符『アイシクルマシンガン』！」

ババババババッ！

チルノの両手から凄まじい量の氷柱つらぎがまるで機関銃マシンガンのように降り注ぐ。

……ちなみに、この効果音はチルノが口でやっている。

「氷が飛んでくるのか。当たつたら痛そうだなあ

「……絶対当たらないつて言つてるじゃないあの子」

ヒカリの額に氷柱が突き刺さりそうになる瞬間、突如その姿が霞み消える。

チルノはそんなことにもちろん気づかず、そのまま氷柱の弾丸を掃射する。

氷が弾けて白煙が舞い上がるのを確認すると、その手を止めた。

「勝った！ アタイの勝ちだ！」

「ねえ～、チルノ～」

「何、フラン？」

ちょいちょいと指でチルノの後ろを指差す。

肩に虫でも付いたのだろうか、とチルノが振り返るとゲゲッ！ と呻いてから後ずさつた。

「いやあ、機関銃マシンガンは強敵だつたな」

「な、何で！？ 何で当たつてないの！？」

「これで終わり？」

ニツコリと笑顔で挑発。

もちろん、チルノは顔を真っ赤にして答えた。

「ま、まだまだ！ アタイの最強の術符を見せてあげるよー。」

ヒカリと距離を取つて再び術符を取り出す。

次はどんな攻撃がくるのだろうか。ちょっと楽しみだった。

「凍符『パーフェクトフリーーズ』！」

ゴーッ！ バババババババッ！

今度は猛烈な吹雪が襲いかかり、ヒカリの視界が白に奪われていく。
……相変わらず自分で効果音入れてる。

「わ……、これはちょっと厳しいかも」

先刻の弾丸と違つて、チルノの前方から放射状に広がる攻撃。少しめんどくさいけど、回り込むしかない。

再び姿勢を低く構え地面を蹴る。

轟音が響きヒカリの姿が震むと、チルノの真後ろを捉えた。

「いやあ、もう氷漬けになっちゃったかな？ やっぱアタイつたら最強ね！」

「じゃあ、最強を倒したらどうなるのかな？」

「ふえ？」

間抜けな声をあげて振り向くチルノ目がけて、ヒカリは片手を躍らし光の矢を掲む。

『瞬符』光陰矢の如し』

それも、一本ではなく片手に一本ずつ。

両手でそれらを投げると、光を帯びた矢はチルノの羽を貫き木に張り付けるようにして突き刺さつた。

「あ……あれ？」

それはまるで昆虫採集で捕まつた虫のように、少々哀れな姿のチルノが出来あがつた。

身動きが取れず、チルノは両手両足をバタバタさせてもがいている。

「うわーん！ 何これ、動けないよー！」

「へえ……。見事なものね」

「ヒカリちゃん強~い！」

「えへへ。ありがと、フラン。さてと」

「う、うう……」

半泣きのチルノがヒカリを見つめる。
しかし何故かヒカリは矢を抜いてチルノを解放した。

「私の勝ちでいい？」

「……う、うん」

ほとんど声は聞えなかつたが、首だけはしつかりと縦に振つた。
それからスッと右手を差し出しチルノに向ける。

「なに？」

「最強の弾幕『う』、面白かつたよ。また今度やろうね」

「……ま、まあ、いいけど！ 今度はアタイが勝つもんね！」

差し出された手を退けると、チルノは一目散に飛びだした。
……そして、ヒカリの方を振り向いてあっかんべー！ と呟んでから夜の森の中へと消えていった。

「……これで流れ星の無事は確保できたわね」

「うん。それで、あの……一つお願いが」

人差し指をちょんちょん合わせながら光が眩く。

何なに？ ヒフランは顔を覗きこむが、パチュリーは何となく予想がついていたので顔をしかめた。

「……これを運べとか言つんでしょう？」

「お、お手数おかげします……」

「いいよー。私が運んであげるー」

すると、フランは穴の空いた流れ星をひょいと持ち上げて一ヶ口と微笑んだ。

思わぬ怪力に、ヒカリは思わず目を見開いた。

「吸血鬼って、すごいなあ……」

「じゃあ、戻りましょうか。そろそろ眠くてしかたないわ」

パチュリーが軽く欠伸をしながら言つた。

気がつくと、遠くの空が微かに白みはじめていた。

第五話 ハッシュナイト・バトル（後書き）

美「そういうえば、チルノは初出演ですよね？」

夜「書きたい書きたいとか言っておきながら、ほとんど書いてなかつたからね。紅魔館から話を広げるときにちょうどよかつたんだよ」

美「つてことは、今作は紅魔郷からキャラを？」

夜「別にそんなことはないよ。ただ、ヒカリに関係しそうなキャラは出るけど」

美「ヒカリさんに関係するキャラ……ですか？」

夜「ま、そこはお楽しみみて口上で」

美「はい。……といふでの、私の出番は」

夜「したらなー」

美「……」

言われてみれば、今のといふ紅魔郷の範囲でしかキャラが出ていない。

ああ、久々の弾幕ごっこシーンは楽しいな！

早くアソシと戦わせたいぜ……

第六話 メイドと一緒に

次の日、というか、チルノと戦つてから数時間後。ヒカリは日の出の少し後に自然と目が覚めた。

自室にと宛がわれた部屋を出て、途中妖精メイドに道を訊ねながら食堂へと向かつた。

「おはよう「」やれこます、ヒカリさん」

「お、おはよう「」やれこます」

ヒカリの姿を見つけるなり、メイド長の咲夜はすかさず「」コーヒーを淹れてくれた。

目の前の角砂糖とミルクをポイポイ突っ込んでから一口つける。うむ、朝の一杯は美味しい。

「そういえば、昨日は大丈夫でしたか？ 湖の方へ行つたと聞いたのですけど」

「うん。大丈夫でした。流れ星も、ちょっと修理できれば使えるようになる思います」

「そうですか。それはよかったです」

穏やかに微笑む咲夜。

銀の髪が朝日に煌めいてとても綺麗だった。

「今、朝食を「」用意いたしますね」

「すみません。昨日いっぱい動いたからお腹空い……ハツ」

図書室のことをするつかり忘れていた。

わなわなと体を震わせながら振り向くと、既に咲夜がテーブルに朝

食を並べていた。

「ふふ。図書室の件でしたらお戻しなさい。わいすでござんな
終わつてこまですか
す、すみません……」

流れ星、宿、朝食。

もはや一宿一飯を通り過ぎて色々とお世話になつぱなしだ。

「……あの、私出ていった方がいい……でしょうか?」

咲夜は一度きょとんとして、それからクスクスと優しく微笑を浮かべた。

「ふふふ。そんなこと気にしているんですか? でしたら心配無用ですよ。お嬢様も、貴女をしばらくおいてあげてもいいと言つてこましたよ」

「レミリアが……?」

「それに、すっかり気に入られたみたいですし」

「……?」

咲夜の最後の言葉に首を傾げる。

すると食堂の扉が開き、寝ぼけ眼のフランがフラフラと歩ってきた。

「咲夜、おはよ……」

「はー。おはよひ! やれこます。珍しいですね、フランお嬢様が早起きするなんて」

「今日は、なんとなく……はわあ……おはよ、ヒカリりゅうん
「うん。おはよ」

寝起きのフランの金髪は四方八方にぶつ飛んでて大変なことになつてる。

あの部屋、鏡台があつたような気がしたのだが。

続いてレミリアが寝間着姿のまま現れ、次いで小悪魔、最後にパチユリーが現れ紅魔館の朝が始まる。

ヒカリが座つてちょうど席が埋まる。

どうやらこれで全員らしい。

ヒカリは気兼ねなくトーストにジャムとマーマレードをこれでもかと塗りたくつてからかじった。

「そういえばヒカリ、貴女これからどうするの?」

ハムステーキにフォークを刺しながらレミリアが訊ねた。

「と、とりあえず自分のお仕事をやるつもりです」

「仕事……、願いを聞く、だつけ? 何だかちょうどいい時期に堕ちて来れたわねえ」

「……? ちょうどいい?」

レミリアのドレスにソースが零れ、一瞬でシミが消える。

その一瞬、咲夜がすごい勢いでシミをふき取るのが視えた。

「ま、それは里に行けばわかるんじゃないかしら」「里……」

そういうえば幻想郷に着いたものの、ヒカリはこここの地理がさっぱりわからない。

咲夜に地図が無いか訊ねたが、不思議なことに幻想郷を描いた地図はないのだという。

「自分の目で見るのが一番じゃないかしい。論より証拠、耳聞は一見に如かず、とか言うでしょ」

パチュリーがプロツコワーをつまみながら口を挟んだ。

「そうね。……咲夜、今日買い出しに行く用よね」

「はい」

「ヒカリも一緒に連れて行つてあげなさい。荷物でも運ばせれば多少は役に立つでしょうし」

「い、いいんですか?」

咲夜は微笑みながら頷く。

ヒカリは小さくガツツポーズした。

「いいなあ。フランもお出掛けしたいな」

「フランはダメ。外で何かあつたら大変でしょ?」

「平気だよ。だから私も一緒に」

「ええ。今度機会があれば、ね」

「……」

姉の冷たい言葉にフランは唇を尖らせフォークをテーブルに突き刺した。

木製の洒落たテーブルが一瞬で軋み、ギシイ! と派手な音を立てて半壊した。

「……何よ、その目は」

「お姉様のケチ。やつと部屋から出れたのに、今度は館に閉じ込め

るの」

「違うわよ。これは貴女のためにもあるの」

「そればっか! 意味わかんない!」

フランが椅子を蹴つて宙に飛ぶと、すかさずレー・ヴァテインを構え
姉を見据える。

血色の目に妹^{フラン}を映しながら、レミリアは薄く笑みを浮かべた。
一触即発の空気が漂い、パチュリーは本を閉じ、咲夜は至つて冷静
にテーブルを瞬時に直した。

「あの、あの……！」

突然勃発しそうになるケンカを前にヒカリがおろおろと慌てふため
く。

「いいんですよ。いつものことですから」
「そうよ。ケンカなんて日常茶飯事なんだから
「でも……」

一人の狂氣じみた表情を見てヒカリは悲しそうに顔を歪めた。
ヒカリは知っている。

あの日、フランが流れ星に願つたことを。
フランの願い事は、姉と……

「ヒカリさん、準備が出来たら私のところに来てください。すぐに
出発しますので」

「あ、はい……わかりました」

二人の魔力が高まり合つて部屋に青い稲光のような火花が散る。
妖精メイドに避難を促され、ヒカリは渋々部屋へと戻った。

「私に勝てると思ってるの？」

「お姉様が負けるまでやる」

「子供ね……」

その手に深紅の槍が握られる。

紅魔館の食堂は一転して戦場へと化し、一人の殺氣が包み込んだ。

フランの絶叫を背にしながら、ヒカリは自室へと戻った。

「咲夜さんに準備が出来たら、つて言われたけど……」

正直、準備するほどのことは何もなかつた。

トパンツだけ。

綾扇 髪を整えておく」といかできなかつた
らつこいの間一二三度二三度二二云開ハ持つ一

現れた。

「あの、時間を止めてくる必要あるんですか?」

で追えるんですね。いつたいビッグやつで

「星の子は動体視力とかがすごい良いんです。でないと流れ星に乗つて頬一事を聞くなんてお仕事できませんから」

「そ、そうですか……」

単純に動体視力が高いというだけで、時間を止めて作り上げた咲夜

だけの世界を目で追えるわけがない。

それだけならば強い妖怪でも出来るだろつ。

他にまだ、何かしらあるはずだ。

彼女の能力ちからだろうか。

すると、しばし無言で思案していた咲夜の顔を見上げるヒカリの目と合つた。

「失礼しました。それでは、里へ向かいましょうか」

「はい。あの、やっぱり出かける時も時間、止めるんですか？」

ヒカリの言葉に、咲夜はくすりと笑つて答えた。

「買い物するときなどは、ちゃんと流れる時間を感じていきたいので能力ちからは使いませんよ。ご安心を」

「そ、そつか。そうだよね」

紅魔館の門を過ぎたところで、ふと横に気配を感じて振り向いた。

「…………」

こつくりこつくりと首を揺らしながら、赤い髪の少女が壁に寄りかかって寝息を立てていた。

門番もんばん……なのだろうか。

ヒカリが咲夜の方を振り向くと、やれやれといった様子でため息をついていた。

「あの……この人は」

「一応、紅魔館の門の番人です。……一応」

「起こさなくていいんですか？」

「……いえ。今はお買い物を優先させましょう。それに、ヒカリさ

んの件もありますので」

「『』、ご迷惑おかけします」

「いいんですよ。では、行きましょうか」

居眠りする門番を残したまま、一人は紅魔館を後にした。
途中、ヒカリは妙に背筋が寒かったのだが何故だろうか
……

第六話 メイドと一緒に（後書き）

美「ちよつといい時つてなんですか？」

夜「そもそも、このお話を書くきっかけとなつた出来事とはなんでしょう」

美「きつかけ……あ

夜「そういう口上」

美「ところで、私の朝はんは」

夜「あ。明日はバイトで更新が遅れます」

美「私の朝はん……」

アクセス数が少しずつ上がってきた感じ。
読んでくれている方々、ありがとうございます。

第七話 初めての人里

紅魔館から南に向かつて歩くこと十分程度。森を抜けた先でヒカリは視線の先に集落を見つけた。

「あれが、人里なんですか？」

大小様々な木造の建物が建ち並んでいて、その間をたくさんの人に行き交っている。

思いの外賑わっている様子を見てヒカリは目を輝かせた。

「ここが、幻想郷に唯一存在する人里です。ここ以外では他の人間を見る事はありません」

「他の人間……？」

「あ、幻想郷のことあまり知らないんでしたね。では、歩きながら説明しましょうか」

なだらかな坂道を下りながら咲夜が説明した。

「ここ幻想郷には様々な種族の者が生活しています。例えばこの人里に生きる人間。妖怪、物の怪といった異形の者。山を管理、統制する天狗や、自然界の精霊。紅魔館でメイドをしている妖精や、パチュリー様のような魔法使い。レミリアお嬢様とフランお嬢様は吸血鬼などと言つた具合です」

「すごいなあ……。そんなにたくさんの種族の人人がいるんだ……」

「どうやら願い事を聞くのは一筋縄ではいかないようだ。

けど、それは逆に考えればいろんな願い事が聞けるということで、それはそれで楽しみだった。

「他にも例外があつたりしますが、それはまた別の機会に」

「色々ありがと。咲夜さん」

「いえ。また何か訊きたいことなどあれば『自由』に」

「じゃあ、一ついいですか？」

「どうぞ、と促されヒカリは言った。

「あの、どうしてフランは外に出でやいけないんですか？」

ヒカリの言葉に、咲夜は一瞬だけ足を止め、その端正な顔を少し歪めた。

悲しそう、といつより、少し寂しそうだった。

「それは……フランお嬢様の能力お嬢様が原因なんです」

「フランの能力って？」

「フランお嬢様の能力は『ありとあらゆるもの破壊する程度の能
力』。これは、文字通り相手を破壊する能力。一度この能力が使わ
れれば、目の前に存在する全ての物を破壊してしまつです」

「そ、そんなすごい能力なんだ……」

そんな弾幕を受けて、よく図書室は崩壊寸前で収まつたな。

……と/or いうか。

「やっぱり、それって弾幕にも影響しますか？」

「もちろん。直撃したらまず命はありませんよ」

そんな強い能力を持つていたから、あんなに自信満々で勝負を持ち
かけてきたのか。
もし、自分の能力がなかつたら今頃どうなつっていたか……

考えただけで体がブルッと震える。

「ですので、お嬢様が外に出るのは危険なんです。うつかり誰かを破壊して帰つてきたら大変ですもの」

「そ、そうですね……」

確かにそれはそれで大変だが、本当にそれだけなのだろうか。ヒカリは今しがた見せた咲夜の表情が気になっていた。それだけなら、どうしてあんな顔をしたのだろう。

他に何か理由があるのだろうか。

何となく追求してみたかったが、気づけば目的地の商店街に辿り着いていた。

「さて、お買い物を済ませましょうか」

「はい、荷物持ちます！」

「はい。お願ひしますね」

一通り買い物を終えた二人は、咲夜の提案により茶屋で休憩することになった。ヒカリはお金のことを心配したが「『』馳走しますよ」という咲夜の好意に甘えることにした。

「私は、あんみつをいただきましょうか」

「みたらし団子、蜜十割増しで」

「十割増しー？」

間もなくしてみたらし団子とあんみつが届く。

リクエスト通り、団子を包む蜜は皿から溢れるべらり、といふか溢れていた。

普通のあんみつと並ぶと、違和感がとんでもないことになっている。

「……あの、流石に甘過ぎませんか、それ

「私甘いモノ大好きなもんで！」

口中蜜だらけのヒカリが答える。

咲夜はポケットからハンカチを取り出してヒカリの口を拭ってやつた。

恥ずかしそうに頬を染めるそのヒカリの仕草は、ちょっと可愛かつた。

……お嬢様ほどではないが、と心の中で付け加えた。

「おー！ 人さん、ちょいと『メン』よ」

すると、二人の後ろから茶屋の女将が何かを抱えながら店の奥から現れた。

それは緑色の細長い物体で、ヒカリにひとつては馴染みのあるものだつた。

「あ、それは」

「もうすぐ七夕だからね。ちょいと早いけど子供たちが早く出してつてくれるわへて」

女将はよつよつしょと、店の軒先に青々とした葉竹^{はだけ}を飾りはじめた。

「もう少ししたら七夕なんです。だからお嬢様はちょいとこい時期だと仰っていたんですねよ」

「七夕……」

葉竹を飾る女将の後ろ姿を見つめながらヒカリがぼんやりと呟く。七夕。

ここ幻想郷では一年に一度、七月七日に行われる一種の神事だと咲夜は言った。

短冊に願いを書きこみ葉竹に吊るすと、その願い事が叶うのだと言われている。

「あなたのお仕事と似ているでしょう?」

「似てるっていうか、これは……」

懐かしい。

七夕の風習を、神事として行っている場所などそうは残っていない。現代を生きる人は、せいぜい葉竹を飾るだけで後は無料に適当に騒ぐだけだ。

少なくとも、ヒカリの見ていた世界では。

「……どうかしましたか?」

「つづりん。何でもない。ちょっと運命感じちゃつただけですから」

「運命?」

蜜だらけの皿を卓に戻し、ヒカリは一度ウンと背伸びした。
初仕事、やる気が出てきた気がする。

「お勘定、ここに置きますね」

咲夜が団子とあんみつの代金を支払うと、ヒカリと咲夜は大量に買
い込んだ荷物を抱えながら帰路へと着いた。

途中、ヒカリが訊ねた。

「私、決めました。今日の夜から仕事を始めます」

「今日の夜、ですか？ それはまたずいぶん急なお話ですね」

「だって、もうすぐ七夕が始まっちゃいますから。七夕の日までには帰れるようにしておきたいし」

「と言つ……」

咲夜が指折り数える。

今日は七の月の一 日で、七夕まではあと六日と二つと二つだ。

「帰つたら準備しないとな~」

「そりいえば、願いを聞く仕事といつのばどひつ風にするのですか？」

興味を抱いた咲夜が訊ねる。

するとヒカリは片手で荷物を抱えながらポショットを探り、黒くくすんだ小さな宝石のようなものを取り出して咲夜に見せた。

「……これは？」

「輝望石(きぼうせき)って言つます。私たち星の子は、流れ星のセンサーで願いを調べてこの石に集めるんです。願いが集まれば集まるほどこの輝望石は輝きを増します。……今は、一人だけしか聞いてないから全然光つてないんだけど」

「願いが集まると光るんですか？」

「はい。願いでいっぱいになるとすりごく綺麗に輝くんです。でも、ちょっと使うのが難しいんですね」

輝望石をポショットにしまってからヒカリが続ける。

「ただ、この輝望石はどんな人の願いでも吸収してしまう特性があ

つて、時々うつかり悪い願いも吸収しちゃう時があるんです。もしも悪い願いが吸収されると、輝望石が汚れてその効力を失ってしまふことがあるんです」

「悪い願い……ですか

「だから私たち星の子はセンサーを使って願いを選別し、なるべく公平に良い願いだけを聞くことにしてます。でも、ごく稀に悪い願いを叶えてしまふこともあるんですけどね……」

誰かを殺したい。誰かを陥れたい。

「そんなこと、わざわざ星に願わなくともいいのに。

ヒカリは少しだけ顔をうつむかせたが、すぐに首を振った。

「……大変そうですね」

「そんなことない……と、思います。実を言つと、私今回が初仕事なんですね」

「でも、ずいぶんとお詳しいですね」

「お母さんとかお父さんによく話を聞いたし、よくソラを見てたから。みんな、すつしょく綺麗でカッコよかったです」

「ヒカリさんも、そうなれるよう頑張らないといけませんね」

「うん。今日からさつそく頑張るよ。……あれ?」

目の前の紅魔館から白煙が上がっているのを見つけて、ヒカリと咲夜は同時に目を見開いた。

あの場所……図書室のあつた場所だ。

「紅魔館から煙……!? ヒカリさん、急ぎましょー!」

一分一秒が惜しい。

能力を使ってでも急ぐべきだと力を込めた瞬間、ヒカリに手を掴まれた。

「ヒカリさん？」

「そつちより、私の方が速い」

「何を……いッ！－」

一瞬、息が止まつたかと思うと凄まじい圧力に胸が押しつぶされそうになる。

ジェットコースターなどの比ではない。

巨人の手で全力で投げられたら、こんな圧力が全身を襲うのではないかというかというほどの圧迫感。

あまりの衝撃に、着地した咲夜は激しく咳き込みその場でうずくまつてしまつた。

「か……は！？　げ、ほッ、つ、い、今……は！？」

「ご、ゴメンなさい！　咲夜さんが普通の人間だとは思わなくて…」

「い、いえ……それは、構いませんが」

今の衝撃を受けて平然と立つてゐるヒカリの姿を見て、咲夜は驚いた。

咲夜が時を止める、その一瞬よりも早く紅魔館に辿り着いてしまつた。

そんなこと、普通なら到底信じられない。

けれどもしかし、咲夜はそれをその身でもって痛感した。

人だとか妖怪だとか、そんなこと無にしててもヒカリはとてもないチカラを持つてゐる。

星の子。

まさか本当に星が生み出したとでもいうのだろうか。

しかし、それでもなければこのチカラは信じれるものではなかつた。

「咲夜さん、急いでよ

「あ……は、はい！」

思わず呆けてしまっていた。

今はそんなことよりも、お嬢様たちの安否が心配だ。
何とか咲夜が呼吸を整え立ち上がると、二人は一気に館内に向かつて走りだした。

第七話 初めての人里（後書き）

美「七夕でしたか」

夜「その通り」

フ「さーさーのは、ばーらばーッ！」

美「お嬢様、歌詞が違いますよ」

フ「そうだっけ？」

1時間遅れの更新となってしまった；

それにも、”個性”って難しいなあ……

第八話 火事場ドロボウは魔法使い

「お嬢様、大丈夫ですか！？」

玄関を駆け抜け煙の方へと疾駆する咲夜とヒカリ。

そこで目にしたものは見事なまでにぽつかり空いた巨大な風穴だつた。

その傍らでパチュリーが顔を真っ赤にさせながらヒステリックを起こしている。

「もう！ 魔理沙つたらまた無断で本を持って行って！ しかもめんどくさいからつて図書室にこんな大穴空けて逃げて！ また直さなきやいけないじゃない！」

「……パチュリー様、もしかしなくてもまた私ですか」

「当然」

「…………ぐすん」

「まりさ？ 魔理沙つて誰ですか咲夜さん」

ヒカリの問いの答えはパチュリーの方から返ってきた。

「私と同じ魔法使いよ。……勉強熱心なのはいいんだけど、物を借りる時のマナーがなつてないの」

「なつてないというか、あの頭の中に存在していますかね……？」

「一度解剖してみようかしら？ キノコとか出でくるかもしけないわね」

「……あの、頭からキノコとかすつじく恐いんですけど」

どんな化け物だ。

パチュリーと同じ魔法使いで、頭からキノコが出てくる魔理沙つて

人は。

もしかして侵略者^{ハイリヤン}の類だろうか。
だとしたら紅魔館の危機である。

「あの、その魔理沙つて人が来てたのって何時ぐらいですか？」

「ついさっきよ。……そうか。貴女なら追いつけるよね」

「はい。速さには自信がありますから」

「ちょうどいいじゃない。私も一緒に行くから魔理沙のところまで飛ばしてちょうどいいよ」

「いや、あの、パチュリー様。それは止めておいた方が……って、パチュリー様！」

咲夜の制止も聞かずにはパチュリーはヒカリの手をぎゅっと掴んでいた。

「わっかりました。じゃあ、本気出すんでしつかりつかまっていてくださいよ」

「ひ、ヒカリさん、パチュリー様は魔法使いですけどお体がくうッ！？」

時既に遅く、爆音と暴風とを残してヒカリの姿は影も形もなくなっていた。

「……あれ？ 咲夜、今ヒカリちゃんになかった？」

気がつくと、フランが図書室の入り口から顔を覗かせていた。

「あ……はい。ですが、今しがたパチュリー様と一緒に外へ……」

「ふうん……」

フランは何か他に言いたげな表情をしていたが、やがて図書室に空いた大穴の向こうをしばらくじいと見つめていた。

「あの、パチュリーさん。とにかくえべ……」

「…………う、うあ…………うあ」

「ぎにゃああああーー!?」

行き先を訊ねようと振り向いたら、顔面蒼白のパチュリーがヒカリの肩からだらりと体を揺らしていた。

あまりの恐怖にヒカリは思わずベシッ！ とか音を立ててパチュリーを地面に叩き落としてしまった。

今にも死にそうな顔でヒュー・ヒューと力無い呼吸をしている。

「あの、あの！ だ、だだだ大丈夫ですか！？」

「だ、大丈夫に……見えるの、かしら？」

「いえ。これっぽっちも」

「せ、せっかく、今日は、ケホ、喘息の調子も良かつたのに……貴女のせいで一瞬、三途の川が見えた、わ」

「ううん、この能力に耐える人じゃないと使えないなこの移動手段」

パチュリーの背中をさすりながらヒカリが呟いた。

「…………はう。ありがとうございます。少し落ち着いたわ」

「こ、今度は気をつけますから！」

「い、いえ結構。今度は自力で飛ぶから」

「すみません……」

ヒカリが周囲を見回す。

特に何も考えず飛んでしまつたが、ここは何処だらうか。
右を向いても左を向いてもうつそつと木々が生い茂つていて見通しが悪い。

「ここは魔法の森。名の通り、少し変わった森なの。……ほら、見てみなさい」

パチュリーが指差す方向には、人の背丈ほどはあるつかといつ巨大でカラフルなキノコがうねうねじめいでいた。
それはそのうち華麗なブレイクダンスでも披露してくれそうなほど、激しく小刻みに動いていて、正直グロい。

「こ」の森にはあいつた特殊なキノコが自生している。その胞子には幻覚作用とか危険な物質が含まれているから、直接吸わないよう気をつけなさいよ」

「は、はい……」

誰が好んであんなお化けキノコに近づくもんか。

「でも、そのキノコには危険な物質と共に豊富な魔力が蓄えられていたりするの。だから、魔法使いにとっては良い材料なんだけどね。魔理沙はこういうキノコを使って独自の魔法を研究していたりするの」

「こんなキノコが……研究材料」

同じ魔法使いのパチュリーが言つのなら本当なのだろう。

しかし、こんな気持ちの悪い物で研究なんかして楽しいのだろうか。

パチュリーがふわりと飛んで奥へ進み始めたのでヒカリも後を追う。森の奥に進むにつれて怪しげなキノコがさらに増えていく。

もしも、いきなり手足が生えて襲いかかってきたらどうしようか。そんなことを考えてながら進んでいると、いつしか森を抜けて開けた場所に出た。

ぱっかりと空いたその中に、青い屋根が特徴的な一件の家が建っている。

どうやら何かのお店らしい、古ぼけた看板には『霧雨魔法店』と不謹な字で書いてあった。

「…………いいですか？」

「やうよ。ここに魔理沙がいるはず。さつそく入りましょ」つか

パチュリーが何の遠慮も無しに店の戸を開け放つ。
不法侵入で怒られるんじやないかとヒカリは心配でしうがない。
店の中は、一言で言えば滅茶苦茶だった。

棚の本は雪崩のように崩れ、壁には所々に穴だつたりヒビだつたり。
そしてこの部屋のあととあらゆる場所に本が散らばっていた。
それはもう、本当に足の踏み場がないほどにびっしりと。

「あの…………本当にここにその、魔理沙って人が住んでるんですか？」

お菓子の食べカスとかひどい有様だ。
「キブリとか…………考えたくもない。

「多分、全然片づけ出来ない性格なのよ。自分で片づけしてるの見たことないし、こいつはどうこう頭してるんだか」

ふわりふわり、本の上を通りながらパチュリーが「ん?」と動きを止めて一つの本に手を伸ばした。

それはだいぶ痛んだ表紙の本でかなりぶ厚い。パツパと表紙のほこりを取つて一度頷く。

「……これよこれ。全く、借りたければ一言私に言えぱいいの、元、どうしてそれが出来ないのかしら」

一応確認のため、とパチュリーが本の表紙を開けた途端、まばゆい閃光が部屋中を包みこみヒカリたちの視界を真っ白に変えてしまった。

「きや！」
「わわわ！ な、何にも見えない……！」
「取り返しにに来たのは本人か。念のためにと眼を張つておいて正解だつたぜ」「

視界が元に戻り、ヒカリは声の主を求めて辺りに視線を動かす。

「あ、パチュリーさん！」
「魔理沙……！」

部屋の上空に、白と黒のロープ姿の少女が簾に乗つて浮かんでいた。長い金の髪が簾の動きに合わせてゆらゆらと動く。

「魔理沙！ いつも言つていいでしちう？ 本を借りたいのなら貸してあげるつて！ なのにどうしていつもいつも勝手に持ち出すのよ！」
「別にいいだろ。気が向いや返すつて。アタシが死ぬまでのほんの短い時間だ。ケチケチすんなつて」「
「またそんな屁理屈を！」「
「屁理屈も立派な理屈」

「もう！ あつたまきた！」

喘息の調子が良いパチュリーが颯爽と飛び本のすき間から術符を取り出す。

そして彼女の周囲に不可思議な紋様と文字が浮かび上がり、ある種の魔方陣のような陣^{ファーレルド}が形成される。

「月符『サイレントセレナ』」

パチュリーの右手から鋭い閃光が奔り^{はし}、魔理沙目がけて直進していく。

と、魔理沙の目の前で閃光が弾け、彼女を包みこむように四方八方から包み込むようにして襲いかかつた。

「なッ！？ こんな応用もアリかよ！？」

「大人しく捕まりなさい！」

「はいそうですかつて、いくかよ！？」

閃光のすき間を縫うように箒を操り、魔理沙はするりと弾幕を掻い潜つた。

そのまま箒を逆手に構え、不敵に笑つた。

「に、逃げられた！？」

「先に仕掛けたのはそっちだからな。吹つ飛べ！ 豪星『ブレイジングスター』！」

「ツ！」

箒の先端に光が集まる、それは極太のレーザーとなつて一気にパ

チュリーに迫る。

術符を使い終えたばかりのパチュリーはほとんど無防備で、成す術

なく巨大な閃光の前に立ち去ることしか出来なかつた。

「」んのッー」

直撃を覚悟し田をつぶつた瞬間、ヒカリがパチュリーの前に躍り出てそのレーザーを蹴り上げた。

「は、はあッ！？」

「な、何が起じつて……ー？」

魔理沙もパチュリーも、呆けたようにヒカリを見つめていた。

「弾幕勝負の最中だつたけど、無粋だつた？」

「い、いえ……助かつた、わ」

「おいおいおい！ なんだ今の一？ 弾幕を蹴つた？ アタシのブレイジングスターを？ お前、何者だ」

「あつひつ……。い、今のめっちゃ熱かつたな……あ」

「ほん。

「わ、私は星の子！ 緋彗ヒカリ！ 」の勝負、私がパチュリーさんに変わつてお相手するよー！」

ビシツと指差しポーズを取る。

小さいころから（今も小さいが）ヒカリは正義のヒーローが大好きだ。

困つてゐる人の目の前に颯爽と現れ、悪を懲らしめる。

今まさに、気分は正義のヒーロー。

テンションは最高潮。

胸が高鳴り過ぎて手汗がヤヴァアイ。

「ハツ。いいぜ。何処の誰だか知らねえが相手してやる。」
「狭いからな。外に出なッ！」

「望むところ！」

「ま、待ちなさいよ！」

すごい勢いで窓を破つて外へ出る一人を、パチュリーは呼吸を荒げながら追いかけた。

第八話 火事場ドロボウは魔法使い（後書き）

美「きみだけの〜、ファインダア〜につ〜つる〜」
夜「俺の好きなボカラ曲を歌つたとしても出番はないぞ（じばらく
は）」

美「……解せぬ」

ふと思つたけど、自分の書いているオリキャラが全員集まつたらどうなるんだろう？
別に俺だけの話じゃなくて、例えば複数作品をアップしてる作者さんにも言えるんだろうけど。

俺のところは、少なくとも千花は肩身が狭そうw

第九話『パワー』VS『スピード』

「へへッ。こんだけ広けりや十分かね」

魔法店を出でしばらく飛んだ先、魔理沙とヒカリは森の中心部で対峙していた。

笄の上で術符を握る魔理沙。

対してヒカリは以前と同様に姿勢を低く構えている。まずは、相手の弾幕を見切らなくては。

さつきの攻撃は、直進的で恐らく回避は容易いがその威力は計り知れないだろう。

まだ足がヒリヒリしてる。

「ルールは知ってるんだよな？　いきなりで悪いが、遠慮なくやらせてもらひッぜ」

握っていた術符を投げ、発動させる。

小さな光弾が弾けると、先ほどの攻撃同様一直線にヒカリに突っ込んでくる。

猪突猛進な攻撃は見切るのが簡単で助かる。

ヒカリは光弾を、可能な限り引き付けてから地面を蹴つて光速で回避した。

「……ツ？」

たつた今爆発した場所のすぐ横に、ヒカリが無傷で立っていた。別に強力な攻撃をしたわけではないし、今の弾幕ぐらい避けてくれないと流石に相手にならない。

ただ、魔理沙はほんの一瞬だけ、光弾が着弾する瞬間にヒカリの姿

が震むように消えたように見えた。

何かの能力だろうか。

「これぐらー、どうしてことないよ!」

「何言つてやがる。今のはほんの小手調べ。アタシの弾幕はあんなに貧弱じやないっての」

微かな違和感を抱えたまま、魔理沙が次の術符を装填する。
次は、もう少し範囲を広げてみるか。

白い術符に光が奔ると、それは魔理沙の手の中で弾けた。

「恋符『ノンディレクショナルレーザー』」

今度は威力が劣るかわりに広範囲をカバーできるレーザー攻撃。
恐らくこれも容易く避けられるだろつ。
だが、ヒカリはレーザーが迫つてくるといふのに依然として動く素振りを見せない。

それどころか、微かに困惑がうかがえたような気がした。

「は、範囲攻撃か……。しかもチルノのと違つて今度はレーザーだし……」

それでも、どうにかすき間を探しながら光線を回避、それから地面を蹴る。

そしてヒカリは魔理沙の斜め後ろ辺りに着地。

魔理沙は一瞬驚いたように目を見開いて、それから言った。

「……これも避けるか。速さ^{スピード}には自信があるみたいだな」

「まあね。もう弾幕は終わり? 次は私の番かな」

「いいや。まだだね」

……試してみるか。

魔理沙は一度地面に着地してから箒をくるりと持ち替えた。一度見られた技だが、囮としてならちょうどいいかもしない。右手だけで構えた箒の先端に集束していく魔力。同時に、こつそり左手をロープのポケットに忍ばせる。

「彗星『ブレイジングスター』」

聞き覚えのある術名にヒカリはこつそり口の端を上げた。あの術符は凄まじい威力だがあまり範囲はカバーできない術。これなら射線から少し身を引いて飛べば背後を取れる。

「彗星『ブレイジングスター』」

高威力の閃光が地面を抉りながら直進してくる。
思つた通り、横の範囲は広くない。

地面を蹴つて光線のすぐ傍を走り抜けながら魔理沙の背後でブレキ。

「……フツ」
「え……ツ？」

顔を上げると、魔理沙と目が合つた。
しかしそれは通常ならありえないことだ。
ヒカリの速度は瞬間にとはいえ光速をも越える。
それは人間、いや、生き物が反応できる速度ではない。
それなのに、魔理沙は笑つていた。

「恋符『マスタースパーク』

魔理沙の左手が輝き、虹色の閃光がヒカリを包み込む。魔力の奔流に吹き飛ばされ体を激しく叩き付けられた。

「あ……ツ、くうツ……！」

「ヒカリ！」

「騙して悪いが、こつちが本命だ」^{マスペ}

閃光を浴びてボロボロの体をどうにか起こし、ヒカリは魔理沙を見つめた。

「田で追つた……わけじゃないよね。どうして私の位置が分かったの？」

「確かにとんでもねえ速度みてえだが……じつやらソレ、まっすぐ

にしか移動できねえみてえだな」

「……どうしてそう思ったの？」

すると魔理沙はトントンと指で自分の足を示してみせた。

「お前、地面を蹴つてその能力使うだろ。最初から飛んで戦わな
いつても変だと思つてたんだがよ、試しに囮を使ってみたらこう
なつたってわけだ」

「……そこの、ヒカリ？」

ヒカリは微かに頷いた。

「……正解。そしてそれが私の能力の弱点。この能力、実はほとんど直線的にしか動けないの。ちょっと悔しいな。フランやチルノは全然気づかなかつたのに」

「伊達に異変解決に首を突つ込んでないんだよ。それに、フランは

ともかくチルノと比べられるのは心外だな」

さて、と仕切り直して魔理沙は籌を構え直した。

先端をヒカリに向けつつ再び術符と小さな炉右手に握る。

「これはもう勝負あつたる。このままファイニッシュと洒落込もうか
「そつは、いくもんか」

傷付いた体でヒカリが立ち上がり、ポシェットから銀色の術符を取り出す。

ヒカリの持っている術符の中で、いちばん速い術符。

「速いだけじゃアタシの弾幕は破れないぜ？ 弾幕はパワーがあつてこそそのモノつてのがアタシの信条だ。どんなに速からうが威力が薄けりや 意味がない」

「相手よりずっと早く動いて何もせずに仕留めることだってできる。力だけの一本槍の攻撃なんて当たらなければ意味がないよ」

「……さしづめ、お前とアタシは正反対なタイプってわけか」

「そうかもね」

「ツと白い歯を見せ魔理沙は余裕の笑み。

それは勝利を確信した顔だった。

「次で終いだ。手加減も何も無しで来いよツ！ 恋符『マスター

』

「刹符『プラチナラピッドファイア』」

魔理沙渾身の術符が発動し、八卦炉から森を半壊させるのではと思わせるような光線が、

バチ……インツ！

「スペアニアアアアアアアアアアクツ！…」

・・・

……出なかつた。

ヒカリは右手を構えているだけで何の変化もないし、魔法の森も至つて平和である。

叫んだ後の妙な沈黙に、魔理沙の顔がみるみるうちに赤くなつていく。

「ど、どうにつけだ！？ 何でアタシの術スペルが……あツ」

そして、魔理沙は自分の右手にあつた物が無くなつてゐることに気がついた。

今この手には、魔力を込めた自慢のマジックアイテムがしつかりと握られていたはずなのに、その姿が忽然と消えていた。

「お探しのモノは……アレかな」

ヒカリが悪戯っぽく笑いながら、魔理沙の遙か後方を指差す。

そこには小さな八角形をした、魔理沙の大切なアイテムが無造作に転がっていた。

ただただ呆然とそれを見つめて、魔理沙は油の切れた機械みたいなぎこちない動作で振り向いた。

「……う、嘘だろ？」

「いろいろ言いたい」とはあるけど……とうえず

右手を銃に見立てて構え直し、指先に光弾を集め。

「私に勝つには、速さが足りない」

「あ、ああツま、待て待て待て！ そんな速さの弾幕なんて避けれるわけが」

「

そんな魔理沙の言葉が耳に届くよりも先に、ヒカリの放った光弾の一斉掃射は容赦なく魔理沙を貫いていった。

光弾が止み、力を使い果たしたヒカリはその場にぺたりと座り込んでしまった。

「……ふう。疲れた。能力込みの術符は骨が折れるよ」

「ち、ちょっとやり過ぎな気がしなくもないけど……。とりあえず本は返してもらうわよ、魔理沙」

ぐつたりと倒れこむ魔理沙にパチュリーは言った。

魔理沙はほとんど穴あきチーズみたいな状態でぐうの音も出ない。

微かに体がピクピク動いているため、一応は生きてるようだ。

「それにしても、本当に強いわね。チルノの時も思つたけど、貴女大したものだわ」

パチュリーに褒められた途端、ヒカリは全身を真っ赤にさせてもじもじしながら心底恥ずかしそうに、だけど嬉しそうに言った。

「え、えへへ……。そ、そそそれほどでもないって。か、帰らう、パチュリーさん」

「先に行つていいいわよ。私は貴女の速さには追いつけそうにないし、それに貴女は能力を使えばあつという間でしょ」

「わ、わかりました。じゃあ、紅魔館で待つてま

ドゴォッ！！

その姿が霞んだかと思えば、ヒカリは何故か目の前の木に全身がめり込んでいた。

漫画の登場人物が人型の穴で墜落するそれと同じように、くつきり人型の穴が出来上がっている。

「……ヒカリ？」

「う、らいひょうぶ、です！　アハハ…………きゅう」

フラッフラでとても大丈夫には見えないが、ヒカリは案の定その場にひっくり返ってしまった。

本当に田をぐるぐる回しながら氣絶する少女を、パチュリーは初めて田にした。

「……こんなのは、漫画だけのコトかと思つたわ

一度大きなため息をついてから、パチュリーはヒカリを肩で抱いで魔法の森を後にした。

第九話『パワー』VS『スピード』（後書き）

美「あのー、質問です」

夜「何かね」

美「もし、ヒカリさんの能力のイメージがしづらって人がいたら何と説明するんですか？」

夜「そうだな……例えるなら『BLEACH』の『瞬歩』が一番分かりやすいと思うけど」

美「なるほど」

夜「ちなみに、能力の元ネタはとあるゲームの主人公機の機能『ゼロシフト』だつたりする」

フ「はいだらー」

夜「フランドール・スカーレット！　きさま！　知っているな！」

元ネタ知ってる人は俺と握手！

ヤツの服を脱がしていたら俺とマヅダチだッ！w

第十話 妹様の家出

「……ふあ？ 私、どうなつて……アレ？」

目が覚めると、ヒカリは自室のベットで寝かされていた。私はつしさつき魔理沙と戦つていって……それから？ 何故かそこから先の記憶が出てこない。

「気がついた？」

振り返るとパチュリーが扉から顔を出していた。

「あ、パチュリーさん」

「まったく。せっかくカツつかよく戦つてたのに、最後がアレじゃ締まらないわよ」

「最後……あ」

思い出した。

パチュリーに褒められてご機嫌になつてよそ見しながら能力を使つたせいで木と正面衝突してしまつたんだ。

思い出したら恥ずかしくて全身がカーツになつてきた。
本当に顔から火が出そうだ。

「で、貴女は大丈夫なの？ 服だつてボロボロで……？」

パチュリーがヒカリの服を指差しかけて止まる。

魔理沙の術符を直撃したはずのヒカリのロープは、まるで新品同様に直つていたのだ。

ついたまま焦げていたり穴が空いていたりしていたのだが、ど

「」にも見当たらない。

「ど、どうかしましたか？」

「……いえ。何でもないわ。それよりも夕食の時間なの。準備が出来たら食堂へ来てつてさ」

「あ、はい。わかりました」

何か言いたげな横顔を見送つてから、ヒカリは髪の乱れだけ直して部屋を出た。

食堂ではすでに料理が並べられていた。

大きな鍋には細くて白い麺、そして手元にはめんつゆらしき物の入った椀。

「……え、えっと」

そうめんだった。

咲夜もレミリアもパチュリーもフランも、何も言わず平然と白い麺をつるつるすすつている。

別に夏なのだから別に問題はない。

ない……のだが、この何とも言えないわだかまりは何だらうか。

「どらしたのヒカリ。早くしないと無くなっちゃうわよ？」

フォークでそうめんを食べるノーリアが言つ。

そうめんにフォークつてどうなんだ。

「ああ……はい。じゃあ、いただきます」

割り箸を割つて麺をすする。

味も至つて普通のそうめんだった。

「そういえば、咲夜から聞いたわよ。貴女、今日から仕事を始める
そうね」

レミリアに言われヒカリは頷く。

「はい。でも、この後流れ星に行つて準備しないといけませんけど」「でも、何も夜行く必要はないんじゃないでしょうか？」幻想郷の夜は危ないわよ？」

「たぶん大丈夫だと思います。それに、星を見るのは普通夜でしょう？だからこの方がいいんです」

「そう。まあ、頑張りなさいな」

それだけ言ってレミリアは食事に戻る。
ふと、フランと視線が合つた。

「どうしたの？」

「う、ううん。何でもない」

「……？」

その後、ヒカリは簡単に支度を済ませてから流れ星へと向かつた。
前にフランに運んでもらつていて、今は紅魔館の犬小屋の傍に置いてある。

「……犬小屋？ 紅魔館に犬なんていたっけ？」

「……吸血鬼姉妹の飼う犬って、どんな犬だろうか。ちょっと気になつたが、想像するのは止めておく。
流れ星の中に入つて電源を入れる。
ボウツとパネルに光が灯り内部を照らし出す。

今回用があるのはセンサーだけだ。他の機能に用はない。

「どうだけ、じつちだったかな……ん？」

パネルの奥に手を突っ込んだり、背中に視線を感じてその手を止めて振り返った。

「フラン？」

流れ星の穴からフランがヒカリの方を見つめて立っていた。フランは二口一口しながらヒカリの元へとやってきた。

「えへへ」

「どうしたの？」

するとフランは、人差し指をちゃんとさせながら上皿づかいになつて言った。

「あの、ヒカリちゃん今日からお仕事行くんだよね」

「うん。 そうだけど？」

「わ、私も一緒に行つちゃダメかな……？」

「一緒に……？」

「私も、外の世界見たいの。お姉様には外を出るなつて言われてるけど……でも！」

顔を上げたフランと目が合ひ。

決意と、迷いが混じつたその目は微かに揺れていた。

「め、迷惑かけないよつにするから、一緒に連れて行つてー！」

「うん。 いいよ」

「ぜ、絶対邪魔しない。約束す……え？」

ヒカリは一ヶ口と笑って、フランの金の髪を撫でた。

「いいよ。一緒に行くつか」

「ホント…? ホントにいいのヒカリちゃん…」

フランの表情に笑顔が戻る。

見たこともない世界を見たい、そんなフランの気持ちはヒカリもよくわかった。

「じゃあ、皆が寝てから行くつか。見つかったら怒られちゃうもんね」

「うん！ じゃあ、また後でね！」

笑顔に戻ったフランは元気いっぱいになつて紅魔館の方へと戻つていった。

その後ろ姿を見ていたら、何だか自分に似ているような気がしてちよつと面白かった。

「私も、世界を見たいからこのお仕事に志願したんだよね……懐かしいな」

流れ星を出て空を見上げる。

満天の星空に、一際輝く星々の大河。

天の川に手を伸ばしながら、ヒカリは呟く。

「……頑張るからね、私。お母さんとお父さんの娘だもん。絶対やり遂げてみせる。だから、見守つてよ」

それからもう一度流れ星に戻つて作業を再開する。
やがて夜も更け時計が十一時を指した。……

「それじゃ、行こつか

「うん！ どうじよ、ドキドキしてきた！ ねえねえ、最初はどこ
に行くの？」

「ちょっと待つてね……ん、最初はあっちかな

「わーい！ 早く行こうよ！」

「フラン、シーツ」

「あ……えへへ」

なるべく物音を立てないように紅魔館の門を抜け、二人は深夜の幻想
郷へと旅立つた。

「.....」

そんな一人の姿を、メイド長はこっそりと見送っていた。

第十話 妹様の家出（後書き）

レ「私、ちゃんとお箸使えるわよ」

夜「えッ」

レ「えッ」

「えッ」

今回少なめですが、次回からお仕事スタートです。
最初に会つのは誰なんだろ……？

……わりとあつさつ外出れたな；

第十一話 妖精の願い

「ええ……最初はここなの？ 昨日も来たんだけどお

フランがつまらなそうに顔をしかめた。

二人が最初に向かったのは紅魔館から出てすぐのヒカリの流れ星が墜落した湖だつた。

「でも、じつに反応があるんだけどな」

ヒカリは先ほどつけた腕時計のような形をした機械を示した。湖の方へ機械を向けると、機械の中心パネルが赤く点滅する。どうやらここで、誰かが何か願いを祈っているらしい。

夜の湖はほとんど静まり返つていて、時折虫の音か風の音が聞こえてくるだけで、人や何かの気配といったものも感じない。

「チルノじゃないの？ 最強の妖精になるとか、そんな感じの」「距離が遠いから、まだわからないけど……あ

センサーの示す方向に、緑色の髪の少女が夜空を見上げていた。輝望石が微かに震える。

どうやらセンサーの反応は彼女だつたようだ。

「あれは……妖精？」

「チルノとよく一緒にいる子だ。何してるんだ？」

フランはトン、と地面を蹴つて少女のすぐ目の前へと飛んだ。

「わ！ だ、誰……？」

当然驚く少女。

ヒカリも慌ててフランの後を追いかけた。

「もう。フランつたら、いきなり田の前に出たら驚いちゃうでしょ」

「そう? ねえねえ、あなた何をしてたの?」

少女は少し怯えたような顔になつて、スッと身を引いてから答えた。

「あの、流れ星を探してて、その……」

「お願い事するの? 何なに?」

「ふ、フランつたらツ」

「ホン、とヒカリが咳払い。

なるべく少女を刺激しないように、ヒカリは優しく話しかけた。

「あの、私ヒカリって言います。よかつたらあなたのお名前、教えてくれませんか?」

「な、名前……ですか。私は特に名乗るような名前が無いんですけど……皆からは、大妖精って呼ばれます」

「でも、そんなにおつきくないよねー?」

しげしげと大妖精を見つめるフラン。

大妖精はますます怯えてしまって、さらに距離を遠くしてしまった。

「あう……」

「そ、そんなに怯えないで。私たちはね、願い事を聞きに来たの」「願い事を……聞く?」

不思議そうに聞き返してきた大妖精に、ヒカリは簡単に説明した。

「私はね、みんなの願い事を聞きにこの幻想郷にやつてきたの。夜は、流れ星に願つてる人を探して、お昼は七夕の短冊を調べる予定なの」

「へえ……。願い事を集めているんですか」

「うん。それで、早速なんだけど、あなたの願い事はなんですか?」

「わ、私の願い事……」

すると、大妖精は真夜中でもわかるぐらいに顔を赤く染めてうつむいてしまった。

「えと、その……」

「どんなこと、お願いしてたの? 主役になりたいとか、自機昇格とか?」

「え……あの、フラン。何の話?」

「そんなこと、願つてませんよ。私が願つてたのは、その……」

後半はほとんど「よ」としか聞こえなかつた。
……もしかして、誰かに聞かれたら恥ずかしい願いだつたのだろうか。

「あ……じめんなさい。もしかして、言いにくいかな……?」

「い、いえ。ただ、ちょっとだけ恥ずかしくて」

「もつたいぶらずに教えなさいよ」

なかなか言い出さない大妖精に、フランはだんだんとイラライラし始めた。

殺氣にも似たピリピリした空気をヒカリは肌で感じる。

「私は、友達とみんな元気に、毎日一緒にいられたらしいなつて」

「ええ？ なんだ、そんなこと」

「わあ、素敵な願い事だね！ ちょっと感動しちゃった」

フランは興味無さそうにそっぽ向いて、ヒカリは瞳を輝かせた。と同時に、ポシェットの輝望石に反応があった。

今の大妖精の願いを感じて吸収したらしい。

ポシェット越しに柔らかな温もりが伝わってきた。

「えへへ。教えてくれてありがとう！ ジャあ、帰ろつか、フラン」「え…………うん」

大妖精にお礼を言つて湖を去る一人。

二人の背中を見送つてから、大妖精ははあとため息をついた。

「びっくりした。咄嗟に言つちやつたけど、もしかしてこれでお願い事が叶うのかな。だったら……」

もう一度空を見上げて、ぼつぼつとつぶやいた。

「……チルノちゃんを、賢くしてください、とかの方がよかつたかな」

「ねえ、ヒカリちゃん」「何？ フラン」

早速一つ目の願い事を聞けて満足しているヒカリに、フランは正直

に言った。

「願いを聞くお仕事つて、つまんないね」

「そ、そんなことないよ。良いお願ひ事だつたでしょ？」

「つまんないの。もつとバーン！ つて何かするのかと思ってたのに、地味でつまんなかった」

「……そうかなあ」

願いを聞くつて、面白いと思うんだけど。

フランはぶつくさ文句を言いながら紅魔館へと続く道を歩いていた。センサーにはもう反応が無いので今日の仕事はこれでお終い。早く紅魔館に帰らないと、もしかしたらフランが外出したのがバレてしまうかもしねり。

と思っていたところで、ヒカリのセンサーが再び反応した。今度は少し距離があるが、行けない距離ではない。

「確かにこの方角つて、人里がある場所……だつたかな」

「人里？ 人間が住んでるところ？」

「うん。……つて、フランは紅魔館から出たことないから知らないのか」

「そうだよ。お料理になつて出てきた人間なら見たことがあるけど」「へえ、人間のお料理……」

……ちょっと待て。

「……フラン、今何て言ったの？」

「ん？ 人間のお料理？」

思わず自分の耳を疑つた。

人間のお料理？

人間のお料理つて何だ、ソテーとかステーキとか……って、そうじやなくて！

「ふ、ふふふフランは人間を食べたことがあるの！？」

「あるけど？」

「う、嘘はいけないぞフラン！ いくら吸血鬼だからって、人を食べるってのは……」

するとフランは頬を膨らませながら語氣を荒げて言った。

「嘘じゃないもん！ ホントだもん！ ずっと前、咲夜に人間のケイキだって教えてもらつたもん！」

……今すぐ耳を取り外して交換したい。

そうすれば、今のフランの言葉がただの幻聴に聞こえていたのかもしれない。

ヒカリは本気で思った。

「……ま、まあその話はいいや」

「今度は人間の里があ。人間つてどんなんだろ。楽しみ〜」

嬉々として歩きだすフラン。

……里の人間を襲つたりしないだろうか。
もしそうなつたら……

「……いや、そうならないよつて、私が頑張るわ

フランを連れてきたことをちよつとだけ後悔しながら、ヒカリはそう決意を新たに人里へと向かつた。

第十一話 妖精の願い（後書き）

レ「ホント地味な話ねえ……」

夜「う、うるさいな！俺だって書いてて地味だと思ったよー。（泣）

レ「私の出番も少ないし……。ところで、このメモは何かしら

夜「あ、それは」

レ「……次回作メモ？ 今度のヒロインは……」

夜「か、勝手にメモを見るんじゃない！ というか、それ落書きみたいなモンだから書くかどうかわからないぞ」

レ「なら、今の内に私が主人公の素敵なお話にすり替えましょうか」

夜「俺口りじゃないんだけど……て、オイ！ 何で俺にグングニル

向け

「

もし書くとしたら、次のヒロインはもう決まっています。

ついでに、主人公は男です。

まだ書くか分からぬけどね……

第十一話 本能的殺意

センサーの指示通りに歩いて数十分後、ヒカリたちは人里ではなく大きな石段の前にやつてきていた。

石段の先は小高い丘となつていてその先には鳥居が見えた。

「……人里からずいぶん離れちゃつたけど、どうやらここみたい」

「んん？ 何だか覚えのある匂いがするなあ……」

「ここ知つてるの？ フラン」

フランは何か知つてゐようつた、知らないような曖昧な表情をして答えた。

「わかんない。でも、何となく知つてる人がいそう」

「ふむ……よく分かんないけど、この先に誰かいるんだよね。神社みたいだし、巫女さんかな」

神事として七夕をやるぐらいだから、きっと清楚でおしとやかな巫女さんなんだろうな。

前向きなイメージを抱きながらヒカリは石段をゆっくりと登つていく。

石段は思つた以上に長く、頂上に着くころには少々息が切れてしまつていた。

「ふう……。やつとついた」

真夜中の境内には当然人の気配などなく辺りはシャンと静まり返つていた。

夜の闇の中にそつと浮かび上がる社は神聖な建物のはずなのに何と

も言えない不気味さを醸し出している。

……その社が、少々ボロいことも関係しているかもしね。

「夜の神社つて意外と不気味だよねえ。何か出てきやう？」

「何が？」

「何がって、そりやもちろんオバケとか」

「オバケが出るの！？ 見たい見たい！」

瞳をキラキラさせながらフランが元気よく答える。

……吸血鬼もオバケと似てているような気がしなくもないが、とりあえずヒカリは軽く笑つて誤魔化した。

本当にいるわけもないし。

センサーを頼りにヒカリが歩きだしその後にフランがついてくる。神社の裏手には幻想郷を見渡せる小高い丘があつたが誰もいない、肌につくような生ぬるい風が吹いているだけだった。

「……誰もいないね

「でも、気配はあるよ」

フランは社の方を指差す。

すると、風に乗つて誰かの話し声のようなものが聞こえてきた。

「行つてみようか……フラン？」

何故かフランは少し顔を強ばらせながら社の方を見つめている。それは何かを警戒、あるいは威嚇しているようにも見えた。この先に何かがいるとでも言つのだろうか。

「フラン。今度は静かにしててよ？ センサーみたいに驚かせちゃつたら大変だからね」

「…………ん」

建物の陰を通りながらそつと歩きます。
どうやらそこは神社の縁側らしく、空を見上げながら何かを話している一人の少女がいた。

一人は、恐らくこの神社の巫女だろう。
赤と白を基調とした和服を着ていて、隣の少女を横目に小さな杯で酒を飲んでいた。

そして、巫女の隣には長い金髪の少女がくすくす笑っていた。
紫色のゆつたりとした出で立ちで、同じく杯を交わしている。
息を飲むほどに妖艶な少女だがどう見ても巫女には見えない。彼女の友人だろうか。

「…………ったく、どうして私はアンタの気まぐれで叩き起こされて星見酒だなんてくつだらないことに付き合わされなければならないのよ」

清らかな姿容を歪めながら毒づく巫女の口調は、ヒカリのイメージをぶち壊すような、恐ろしくふつきらばうなものだった。
対して毒づかれた少女は、何が面白いんだか相変わらずくすくす微笑んでいる。

「いいじゃないの。もうすぐ七夕なんだし、ちょっとぐらご風情を楽しみなさい」

「それなら七夕当日でいいじゃないの。私は疲れて眠いの。飲み終わったらさっさと寝るわ」

「つれないわねえ……。こんな静かで美しい夜なのよ。きっと素敵なことがあるわよ。例えば……」

艶やかな瞳が細まり、ヒカリたちが隠れている草の陰の方へ向けら

れた。

妖艶な唇がそつと開く。

「思わぬ来訪者……とかね」

「ツ……！」

突き刺さる視線。

ヒカリは思わず体を強ばらせ、動くべきかどうか一瞬迷つた。

「隠れても無駄よ。最初から、とっくに気づいてるんだから」

仕方なく、陰から姿を現すヒカリ。

胸の奥がざわついていて気持ちが悪い。

この人は何だ。それに、どうして私は恐怖している。

目の前の少女はヒカリの姿を見て楽しそうに再び笑んだ。

「可愛らしい来訪者ね。何かご用？」

「わ、私はヒカリって、言います。その、決して怪しい者では、なくて」

「……貴女の後ろの子は、誰なのかしら？」

少女に感づかれフランも姿を見せる。

この人、フランの存在にも気づいていたか。

フランの姿を見ると、二人の少女の目が軽く見開かれた。

「……」

「吸血鬼の……、レミリアの妹。どうして紅魔館を抜けてここにいるのかしら」

何故か巫女はフランがレミリアの妹だということまで知っていた。

この一人、本当に何者なのだろうか。

そして気がつくと、フランの全身から殺氣がにじみ出でていた。

矛先は、巫女の隣の少女。

「……何だお前。胡散臭いヤツ」

「初対面で胡散臭いだなんて言つもんぢやないわよ、吸血鬼のお嬢さん。お姉さまに常識を教わらなかつた?」

「知らない、そんなの」

「そう。じゃあ仕方ないわね」

少女は縁側から腰を上げ、ヒカリとフランの正面に對峙する。武器も何も持つていなし、特に構えを取つてゐるわけでもない。それなのに底知れぬ恐怖を感じるのは何故だ。

ヒカリの足が震える。

こんな感覚は初めてだつた。

「……あら、怖いの?」

「ち、違ひよ!」

少女が巫女をちょいちょいと指で招ぐ。

巫女は大袈裟に顔をしかめてから首を振つた。

面倒事はうんざり、と顔に書いてある。

すると少女が言った。

「ねえ、お二人さん。よかつたら私たちと弾幕じゅうこで一緒に遊ばない?」

「わたし“たち”つて何よ。私はやるとなんて一言も

「どうかしら? 楽しいと思つわよ」

「……聞いてないわね。はあ。せつかくの休みだったのに

「貴女は年中休みでしょ」

巫女までも腰を上げて少女の前に出て術符を構える。巫女服と同じ赤と白の術符だった。

「私は八雲紫。やくもゆかり 気軽に紫つて呼んでくれて構わないわ」

「博麗靈夢。はくれいれいむ 恨みはないけれど、面倒だからさつさと倒れてひょうつ だい

だい」

「ち、違います！ 私はお仕事で」

「いいよ。やつてやる」

「ふ、フランー？」

ヒカリの前に出ると、その手に湾曲した剣を握りしめた。その瞳は殺る気満々。

フランはどうも愉しそうに、狂氣じみた笑みを浮かべていた。

「今度は負けないからね、靈夢。それから……」

紫を睨み剣を突き付ける。

「お前は何か、嫌いだ。だから壊す」

「ふふ。出来るのならどうぞ？」

瞬間、火蓋が切られた。

常人であれば目で追えないような速度でフランが飛びかかる。

真夜中の博麗神社で、爆音と轟音のオーケストラが幕を開けた。

第十一話 本能的殺意（後書き）

夜「どうでもいい話だけど、東方キャラで野球やつたりびつなるんだろうね？」

パ「私はやらないわよ」

美「能力はありますか？」

夜「もちろん。だけど、術符は1試合につきランダムで3枚だけね」

パ「ドーベースじゃないの」

美「でも、面白そうですね。咲夜さんが時を止めて打ったり、投げたり守つたり……」

パ「魔理沙はマスタースパーククラスの剛速球、アリスなら人形使えば一人で9人分以上動けるし、レミィやフランのピッチャー返しは即死クラス……」

美「あ、天狗の新聞記者さんならバントでランニングホームラン出来ますよ」

夜「おい、普通に野球しろよ」

でも、書けたら面白そうだよな。

チームを考えるのも、何か特別なルールを考えるのも。

もちろんタイトルは「東方野球娘」で。

（既出っぽいけど、既出でしたらすみませぬ・）

け、決して大正野球娘にハマっているわけではないぞ！
何となくプロ野球の試合見てたらそう思つただけだ！

第十二話 彼の願い、夜闇を切り裂いて

「ああああああッ！…！」

真夜中の博麗神社に響く絶叫。

社の屋根の上で、フランは湾曲した剣、レーヴァテインを振り回しながら紫に猛追していた。

「ふふふ。力んじゃつて可愛いわね」

そんな激しい攻撃を紫は容易く往なし、或いは避けながら、フランをからかうように微笑んだ。

それは圧倒的なまでの余裕。

負ける見込みなど微塵も存在しないと、その貌かおが語っている。事実、フランの弾幕はかすりもしていない。

「すごいな……あの人。フランの攻撃を踊りながら避けてる」「あら、よそ見してるなんてずいぶん余裕ね」

フランの方へ泳がせていた視線を戻し地面を蹴る。

私も自分の敵に集中しないと。

襲いかかる黒と白の、よく分かんない弾幕の間を駆け抜け身を躱す。巫女は何の驚きも見せず攻撃を続ける。

「速いわね。すぐめんどくさいんだけど」

「あの！だから話を聞いてくださいよ！」

「ん？妙な勧誘ならお断りよ。新聞もキャッチセールスもパパラツチも勘弁」

「違うのにい！」

取り付く島もない。

ヒカリは靈夢の弾幕を避けながら、どうにか説得できる方法はないだろうかと考えていた。

とりあえず、よほどの事が無いかぎりこの速度の私を捉えるのは不可能なはず。

巫女と言つたつて、恐らく普通の人間だらう。前の、魔理沙とか言う人には運悪く捉えられたけど今度は失敗しない。

姿勢を低く、低くしてから地面を蹴る。

目の前か背後を取つてこつちの術符で勝てるはず。

ヒカリは靈夢の隙をうかがいながら弾幕を避け続けた。

「……何考えてるのか知らないけど、いい加減倒れてくれない？」

「だから、私は話を聞いてくれればそれで」

「やれやれ。ちつとも聞きやしない」

「どつちがー？」

不意に、靈夢の術符を投げる手が止まつた。

今しかない。

ヒカリは渾身の力で地面を抉るほど蹴りで突進。その刹那で、靈夢の真正面を捉えた。

軽く目が開いてその表情に焦りが映る。

ヒカリは右手拳を強く握り、その中心に力を込めた。

「ゼロ距離もらつた！　迅符『マッハ・ストレイト』！」

「んの……ツ！？」

力いっぱい伸ばした右ストレートが直撃。

靈夢は遙か彼方に吹き飛び、その姿がみるみるつむじ小さくなつて

いく。

ちなみに、何の能力も持たない相手にこの術符を使つと、もれなく空を煌めく星の一員になれるのだが、

「……チツ。いちいち速くてウザいわね。ちょっと本氣を出そつかしら」

霊夢はべつと血を吐きだしながら空中で静止していた。
そして複数枚の術符を握りしめ、四方八方にばら撒いた。

「広範囲攻撃？ 何でここの人つてみんなそんな術符持つてるんだか」

「バーカ。これは攻撃じゃないわ。結界よ
「結界……？」

ばら撒いた術符が博麗神社を囲い、それぞれが光り輝きだす。

「神技『八方鬼縛陣』」

地面に不可思議な紋様が光り、境内を包みこむ。

範囲攻撃を警戒して身構えていたが、激しい閃光に包まれただけで特に何も起こらなかつた。

「……何？ 今の、結界つて

「その能力、封じさせてもらつたわ。もう素早い動きは不可能なはずよ
「……そんなんはず」

姿勢を低くして、地面を蹴る。

そして光速を越える瞬間の強い衝撃がヒカリに、

「 ッ、わわッ！？」

衝撃がその身に襲いかかることはなく、ヒカリは思わずつまづいてビターん！と前のめりに倒れてしまった。起き上ると、鼻の頭がヒリヒリしている。

「う、嘘？ な、何で……？」

「言ひたでしよう。アンタの能力を封じさせてもらつたって。これでもう速く動けないでしょ」

靈夢は指先で握った術符を前に構え発動。針のように鋭い弾丸は雨のようにヒカリの頭上から一斉に降り注いだ。

「ヒカリちゃん……ッ！」

「きやああああッ！…」

弾幕が止み、やがて白煙が包み込む。

靈夢は一度着地してからフン、と軽く息をついた。

「これのどこが素敵な来訪者なのか、是非とも教えてもらいたいものね……ん？ 紫、フランは」「あそ！」

紫が指差したのは白煙が立ち込めている場所。風が吹き白煙を散らすと、その奥に一つの人影がうかがえた。

「……ひ、ヒカリちゃん、大丈夫？」

「フラン……ッ！」

ヒカリが顔を上げると、フランが両手を広げて立っていた。
そしてその背に突き刺さる弾丸を見てヒカリは絶句した。

「嘘……!? フラン、針が貫通して……！」

「え、えへへ。私は、吸血鬼だから、すぐに治るよ。だから大丈夫」

「フラン……」

傷だらけの体で微笑むフラン。

衣服に滲みだした鮮血が、その傷の深さを物語つている。

「あ、あれ……」

やがてフランの体がゆっくりと崩れ、ヒカリに覆いかぶさるようにして倒れた。

肌に直接伝わる生温かい血の感触。

「ち、ちょっとだけ、ちょっとだけ疲れちゃった。はは……は」

「フラン!/? い、いや……、いやあー?」

ヒカリの腕の中で、ゆっくりと、まるで開めるように瞳を開じるフラン。

このままでは、死んでしまう。

フランが死んでしまう。

私の、私のせいでフランが死んでしまう。

「そんなの……」

そんなのは、嫌だ。

「……ツ……」

急に紫と靈夢の表情に緊張が走り、二人同時にヒカリを見据える。

「な、何よ……コレ！？」

突如として地が、空が、世界が、何かに共鳴して地鳴りのような音を響かせたかと思うと、直後、一人の視界が金に染まる。

「ア、イツ……髪が！？」

靈夢が驚き声をあげる。

白金色だった少女の長い髪が、今まさに黄金に輝いていた。それは装飾に使われるような陳腐なものではなく、まさしく太陽の輝きにも似た神々しさと温かさを放っていた。

そしてヒカリはフランを抱えたまま、ただじっと、黙つて瞳を閉じていた。

ただ、一心に願つていた。

願え。
願え。
願え。

この身には、その力がある。
だから、願え。

正直に。
純粹に。
真摯に。
ただ、ひたすらに。

私は、私は

ヒカリの体からこいつそう眩い閃光が迸り博麗神社一帯を包み込む。靈夢と紫はあまりの激しさに思わず田が眩み膝をもついた。

「まふッ…………！」

「でも、あの子の光は何なの…………！」

その瞳すら貴くような閃光。

しかし何故か、それは春の日差しのよつた、とても暖かな光でもありました。

それは草花が陽を浴び芽吹くよつて。

それは冬を往く獸が田を覚ますよつて。

そして閃光は、一日の役田を終え落むる夕田のよつてゅうへつと、少しづつ消えていった。

「……う、うん」

フランが田を覚ました。

その身を貫いていた弾丸は消え去り、同時に傷も全て塞がっていた。全身の異常が無いことに驚きつつ、フランは先刻起こつた出来事を思い出ださとしていた。

「あ、あつれ？ 私、胡散臭い奴と戦つて、それからヒカリちゃんを……それ……で？」

フランはヒカリに訊ねた。

「ねえ、ヒカリちゃん。私、それからどうなったの？……ヒカリちゃん？」

頬に落ちる涙。

微かな塩の味。

それがヒカリの涙だとわかるのにせしても時間はかからなかつた。

「ヒカリちゃん、どうして泣いて……？」

「な、泣いてないよ！ ち、ちょっと困っちゃう、ん……」

「ヒカリちゃん！？」

ゆさゆせとその体を揺するが、ヒカリは力尽きたかの向ひに向の反応も見せない。

フランの顔が、みるみるうちに青むらむらしていく。

「し、死んじやつた！？ 死んじやつたの！？ ヒカリちゃん！ 起きて起きて！」

「……さて、私は帰りましょうか

「ちょっと待て」

自分の“すき間”に逃げ込むとする紫の肩を、靈夢は逃がすまいとがつしと堅く掴んだ。

「痛いじゃない靈夢。そんなリンクを片手で割るような握力で握られたら肩の骨が折れちゃうわ」

「だ、ま、れ！ こんな状況で逃げるとかどうかしてるわよー アンタにも責任あるんだから最後まで付き合いなさいー」

簡単な応急処置の後、靈夢の案内でフランはヒカリを抱えて社の中

へと向かつた。

第十二話 彼の願い、夜闇を切り裂いて（後書き）

美「ひ、ヒカリさんはスー——サイ 人だつたんですか！？」

夜「…………（痛い子を見るような半眼）」

パ「…………（呆れて何も言えない瞳）」

咲「…………（ダメだコイツ、早く始末しないと……的な視線）」

決してそんなものじゃあございません。

今作、戦闘シーンがやけに多い気がする。

そして何故、ヒカリと紫で戦闘させなかつたのか謎なお話……；

第十四話 幻想郷を愛する者

どこからか聞こえる声と、吹き抜ける微風。
そしてつづらと震む視界。

「う…………ん…………?」

「…………あ。ヒカリちゃん、起きた?」

目を覚ますと、ヒカリの目の前にはフランの笑顔。
ゆっくりと体を起こして周囲を見回すと、ヒカリは全く見覚えのない場所で寝かされていた。

畳張りの部屋に敷布団。

紅魔館とは趣が正反対だった。

和風。しかもかなり年季の入った和風。

「いじ」「どこ?」

「神社の中だよ」

「神社…………あ」

先刻の記憶が頭に蘇る。

巫女と戦闘中、能力が使えなくなつて、それから、フランが私をかばつて……！

「そういえば……ふ、フラン!? 大丈夫なの!?
「何が?」

フランは何事も無かつたかのようにあつけらかんと答える。
そんなわけがないとヒカリはあたふた狼狽えながらさりに訊ねた。

「な、何がって、さつきあの巫女さんの攻撃がフランの体を貫通し

て

「何ともなかつた

「う、嘘だよね？」

するとフランは頬を膨らませその表情をムッとしたままに言った。

「本当だもん！ むしろ、こいつが訊きたいの一！ ヒカリちゃん、

私に何をしたの？」

「はえ……？ 私が、フランに向かした……って？」

うんうん頷くフラン。

しかし、ヒカリにそんな覚えは毛頭無かつた。

ヒカリが覚えているのは、能力を封じられて派手にずっこけたことと、血まみれのフランの姿だけだ。

フランは身を乗り出し、やや興奮気味に言った。

「何かね、ヒカリちゃんがパーツで光つて、そしたら私の怪我が治つてたんだよ」

「私が、光つた？」

「うん！」

「冗談を言つて居る目ではなかつたし、そもそもフランが嘘をつくわけがない。

しかし、自分が光つたといわれても全然ピンとこなかつた。ヒカリにそんな能力はない。

刹那を瞬く能力にもそんな効果や術符もない。

本当であつたとしても、何故そんなことが……？

「……あら、気がついたのね」

先刻戦っていた巫女、博麗靈夢が現れ、どこか不機嫌そうに腕を組みながら立っていた。

「あ、あなた！」

「さつきは悪かつたわね。つい本気を出し過ぎて危つく殺すところだつたわ」

「……あの、全然悪びれてるよう見えないんですけど」

「そんなことより、体は大丈夫なの？」

あつたりと流されてしまつたため、ヒカリはそれ以上言及するのを止めた。

たぶん、言つても適当にあしらわれて終わる氣がする。
一応体を動かしてみて、それから頷く。

「…………はい。大丈夫です」

「そう。それはよかつたわ。巫女が人殺しなんて噂が広まつたら、少ないお賽銭がさらに少なくなるもの」

「お賽銭…………」

ふと、自分の目的を思い出し腕のセンサーを確かめる。

反応は一つ。

ということは、彼女のものだらうか。

「それで、アンタの目的は何なの？」

不機嫌そうな声で靈夢が訊ねる。

待つてましたと、ヒカリは少し身なりを整えてから答えた。

「あの、私ヒカリって言います。実は、私幻想郷に生きる人の願い

を聞くつていうお仕事で……」

「願いを、聞く？ またずいぶんとめんどくさい仕事ねえ……それで？」

「さつき願つていたのは、靈夢さんですか？」

「さつき……？ 私じゃないわよソレ」

「へ？」

予想外の言葉にヒカリは驚いた。
てつくり彼女が、幻想郷の平和でも願つていたのかと……

「平和ねえ……。確かに平和に越したことはないだろ？ けど、私は星に願うほど暇じゃないわ」

「え、ええ！？ あの、靈夢さん巫女ですよね？」

「そうだけど？」

「巫女つてもうひとつ、清楚で、清らかで、もうひとつ……何と言いますか、真面目な」

「清楚で清らか……まさに私のことね」

何処にそんな自信があるのかさっぱり分からぬ素敵な笑顔で靈夢が答えた。

ということは、あの願いは靈夢のものではなくてもう一人の……？
しかし、辺りを見回してもその少女の姿はなかつた。

「あの、もう一人の方は……？」

「ん？ 紫なら外にいるわよ。興醒めしたから酒を飲むつて。一体誰のせいでこんなことになつたと思つてるのかしら」

半分はあなたです。

なんて、ヒカリの口から言えるわけもなく。

「あの、少し失礼します」

ヒカリは立ち上がり、縁側から外に出て紫を探した。

紫は反対側の丘の上でのんびりと酒を飲んでいた。

「」んばんわ。素敵な来訪者さん」

「……あの、反省と言う言葉を知っていますか？」

「ああ？ 何のことかしら」

優雅な物腰。艶やかな横顔。

少女と称するにはあまりにも妖艶な姿容で紫は微笑んでいた。

「それで、私に何か御用？」

杯に清酒を注ぎながら紫が言った。

「あの、私今この幻想郷に生きる人の願いを訊ねて回っているんです」

「続けて？」

「それで、ここで反応があつたんですけど、さつき星に願っていたのは、あなたですか？」

「……ああ、どうかしら」

空の杯に再び注ぎ、そして一口でまた空にする。

微かに頬が紅いのは酔いが回ってきたことだろうが。

「この幻想郷が、永久に美しく平和であつてほしい」

「…………」

紫は答えず、杯を傾げた。

「素敵な願い事ですね」

「…………そりゃあ、私はこの幻想郷を愛しているもの」

そのまま紫は丘の上から望む夜の幻想郷を見つめながら言った。

「この世界は、何もかもが美しい。生きる人間も、豊かな自然も、妖しき存在ですら愛おしい、とても素晴らしい世界」

うつとりと、悦に浸るような紫の言葉。
とうに空になつた杯を捨て、紫はしばし丘の上からその美しい世界
を眺めていた。

「…………私は、これでも幻想郷の賢者。けれど、それ以前に同じくこの世界の住人。だからこそ私はこの世界を愛している。もちろん、誰よりも」

ヒカリのポシェットから柔らかな光が溢れる。
この反応は輝望石のものだ。

「…………あなたの願い、きっと届きます。いえ、届かせます」

「ふふふ。まるで貴女は、目の前に落ちてきた流れ星みたいね。今
すぐにも、貴女が願いを叶えてくれそう」

「そ、そんな力、私にはありませんよ」

輝望石にまた一つ、願いが満ちた。

今日はこれまでにしてそろそろ帰るわ。

早く紅魔館に戻らないと、フランのことがバレてしまつかもしだい。

「あの……その、夜分失礼しました」

「いいのよ。今回ばかりは私も戯れが過ぎたから。お詫びにて、途中まで送つて差し上げましょうか？」

「あ、でしたら大丈夫です。すぐに帰れますんで」

「そう。わかつたわ。道中気をつけてね」

「はい。では、失礼します」

紫に丁寧に頭を下げ、ヒカリは社の方へと走つて行つた。
早くフランと一緒に紅魔館に帰らないと。

「あ、ヒカリちゃん」

「フラン。時間がないからすぐ」帰るよ

「え？ わ、ヒカリちゃん ッー！」

「すじぶとん可愛い子だったけど、いつたい何処の子なのかしら…
…？」

紫は静かに立ち上がり、しばし思案を巡らせた後、自分の“すき間”へと帰つていった。

第十四話 幻想郷を愛する者（後書き）

お気に入り登録件数20件、評価ポイントなど、ありがとうございます。

最近茶番ばかりで全然御礼言つてなかつた。ごめんなさい。

感想、評価、ご意見や苦情等、いつでもご自由にどうぞ。

第十五話 まだ見ぬ幻想郷

ヒカリの一日は田の出と共に始まる。

それは、たとえ前日に遅く寝ても、である。

「…………ん？」

朝、胸に妙な重苦しさを感じヒカリは田を覚ました。

何かが、ヒカリの胸の上に乗っかっている。
ぼやける視界を「じ」「じ」にすりついてみると、ヒカリの上にフランがぐ
つすりと眠っていた。

純真無垢な寝顔。

シーツによだれがべつたりつてるのはともかく、何故フランがヒ
カリの部屋に？

「…………あ、思い出した」

昨日神社で仕事を済ませた後、急いで帰るために能力を使って紅魔
館に帰つたのだ。

そして門を過ぎたところで着地したのだが、フランはその速さと衝
撃に耐えきれず、その場で田をぐるぐる回しながら倒れてしまった。
それで、仕方なく自室に運んだのだが、ヒカリも疲れて眠つてしま
つていた。

「フラン。起きひー、朝だぞー」

「…………む…………ううん……」

フランは寝ぼけ眼でゆっくりとヒカリを見上げる。
それから少しボケージとして、またばたりと倒れる。

再び心地よさそうな寝息が聞こえてきた。

「うん、しうがない。先に食堂に行こつか」

「……む」

ヒカリがドアノブに手をかけたその瞬間、フランがむくつと起き上がりつた。

「……あー、ヒカリちゃん、おはよッー」

「おはよ。昨日はめんね。体大丈夫?」

「うん。大丈夫。ねえ、一緒に食堂行こッ」

「もちろん。ほひ、ちやんと髪梳かさなきや」

ヒカリがぼさぼさの金髪を指差すと、フランはめんどくさい顔を尖らせ言つた。

「いいよー。咲夜がやつてくれるもん」

「ダメ。じつにうどべりい自分でやらないと、ね?」

「むう……」

鏡台に座らせ、ヒカリはポショットから三田田形の櫛を取り出してフランの髪を梳かしてあげた。

「フランの髪、綺麗だよね

「えへへ。そうかな……?」

それはまるで、仲の良い姉妹のような微笑ましいシーン。

鏡に映るフランの笑顔はとても嬉しそうだ。

絹糸のように滑らかな髪を梳かし終えると、フランの寝癖はきれいさっぱりなくなつた。

「よし、これでいいかな」

「ありがと、ヒカリちゃん！」

「どういたしまして。じゃ、行こうか」

「二人は部屋を出て食堂へ向かう。

途中、フランと手を繋ぎながら階段を下りた。

食後、ヒカリはパチュリーのいる図書館へとやつてきた。

つい先日の派手な戦闘で出来た大穴も、魔理沙が空けたという大穴も無くなっていた。

換気が出来たせいか、埃っぽさが少し失せている。

「私に頼みつて何かしら」

パチュリーは自分のテーブルで大きな本を眺めながらヒカリに言った。

「私、ここのことよく知らないから何か勉強したいなって思つたんです。あの、何か資料とかないですか？」

「ふむ、勉強熱心なのはいいことよ。じゃあ、ちょっとだけお手伝いしてあげましょうか。小悪魔、いるかしら？」

パチュリーの呼びかけに小悪魔が姿を見せる。

一言一言何か伝えると、彼女はパタパタと走りいくつかの本を持ってくれた。

どれもこれも年季の入ったような古い羊皮紙の表紙のものばかりで、中には巻物のようなものまであった。

「大雑把にだけど、幻想郷に関する資料を持ってきたわ。あまり詳しくは書かれていないけど、どんな場所のかつて程度くらいはわかると思う」

まず、と最初にパチュリーが手にした本は死後の世界についての本だった。

「例えば……この冥界。簡単に言えば死者の魂が彷徨う場所ね。幻想郷には冥界へ通じる何らかの門があるそうよ」

「死後の世界……て。あの、私まだ死にたくないんですけど」

「死ないかぎりは大丈夫でしょ。それに冥界は本当に靈が彷徨うだけではほとんど無害だそうよ。私は、行つたことがないから分からないけど」

「願いの反応があつたら、行くしかないか……」

本当に死ななきゃいいけど。

次に手にしたのは妖怪の山についての本のようだ。

「見たことはあるわよね？　この幻想郷で山といつたら、ほとんどがこの『妖怪の山』を指すわ。覚えておきなさい。ここは、天狗によって管理されている場所なの。迂闊に入つたら恐らく命はないわ」

「う……。き、気をつけます」

「徹底した警備で内部は安全のようだけど、とても排他的らしいから行くなら注意しなさい。他は……そうね、こんなのはビックリしたら

本の表紙には『天上に住まう人』と書かれていた。

天上、ということは雲の上だろうか。

「別名は桃源郷……だつたかしら。私も話や伝承でしか聞いたことはないけれど、空の上にはそんな世界があるそつよ。天上の人は不老不死で常に優雅に暮らしているんだとか」

「……何だか御伽噺の世界ですね」

「これに関しては、私も眉つばモノね。魔理沙や靈夢は天人に会つたとか言つてたような気もするけど、証拠もないし」

「……あの一人、そんなに凄い人なんだ」

「あら、靈夢にも会つたの？ 彼女は何だかんだ言いながらも幻想郷で起きる怪異を解決しているの。力も相当なモノよ」

「そ、そうです……か」

それはもう身をもつて体験している。

どうりで強いわけだ。

「そういうえばお仕事、上手くいったのかしら？」

「あ、ハイ。ちゃんと願い事も集まっています」

「そう、それはよかつたわね。さて、お勉強の続きはお茶でも飲んでからにしましょうか。『ご馳走するわ』

「わあ！ ありがとうございます！」

ヒカリの屈託ない笑顔につられて、パチュリーも少し微笑んだ。

偶たまになら、賑やかな図書室も悪くないかも、と。

第十五話 まだ見ぬ幻想郷（後書き）

短いですが、一章終了です。

それと、今日は遅れちゃつて申し訳ないです；

第十六話 白金と、妹と、スクープと

その夜、つまりヒカリの仕事一日目。

全員が寝静まつたのを確認すると、ヒカリは玄関からそつと抜け出

し腕のセンサーの示す方向へと歩いていた。

反応はとても小さく、画面の光点も消えかけの豆電球みたいに微か

な反応だった。

「これ、すぐ遠いことかな。この直線状には……あ

月明かりだけが世界を照らす中、闇から浮き出たかのようこそびえる巨大な山。

この幻想郷で森と言えば『魔法の森』。

そして、山と言えば『妖怪の山』。

ついさっきパチュリーから勉強した知識が早速役に立つ。

今夜の目的地が決まつたが、ヒカリは浮かない顔をして呟いた。

「うう。天狗がどうのこうのって言つてたんだよなあ……。勝手に入つたら絶対怒られるよなあ」

それでも、恐らく捕まることはないだろつね。

ヒカリはポシェットに手を伸ばし、輝望石を月明かりにかざした。

淡いミルク色の光を放つ輝望石。

今はちよびり、ムードランプ程度の光だった。

「……悩んでもしようがない。私はやるんだもん。うん、やるわ

ーー」「やめやーー

・・・・?

「……お、おーー..」

「おーー！」

何故背後から声がするのだろうか。

答えは簡単。ヒカリの後ろに誰かがいるから。
しかも、この声は……言つまでもなく。

「……ふ、フランー..?」

「そうだよヒカリ、ちゃんツー！」

「わわわツー..?」

腋から両手が飛びだし腰の辺りからガバッと抱きしめられ、ヒカリ
は前のめりにつんのめった。

振り返ると、金の髪と宝石のような翼がひょこひょこと揺れていた。
フランは顔を上げると、ムツと顔をしかめてから言つた。

「私も一緒にいくつて言つたじゃんか。どうして置いていくの？」

「え？ いや、だつてそれは昨日だけかと思つて……」

「違うよー！ ヒカリちゃんのお仕事が終わるまでずっとー.. だよ
「ず、ずつとー..? つて、そうじやなくて、どうしてここにいるの
？ わつきフラン部屋で寝てたでしょ？」

「パチュリーのお人形借りてベッドに入れておいたのー..」

「……こいつは一本取られた」

「それでね、今日はヒカリちゃんのベッドの上に..」

「怖ツー！」

「えへへ~」

何故か否定も肯定もしないフラン。

……とりあえず、ヒカリはため息をついた。

「はあ……。咲夜さんとかにバレてなければいいけど。しょうがないか」

「やつた！ で、今日は何処行くの？」

「妖怪の山。あそこで微かな反応があるの」

「山！ わあ、楽しみ！」

「お、お願ひだから騒いだりしないでよ……？」

「わかつた！」

非常に大きな声で元気よくお返事。

それはまるで入学したての小学生の返事みたいだ。
とどのつまり、元気と勢いだけ。

「じゃ、飛んで行こ！」

「ちよ、まだ準備できてな 」

紅魔館から飛びだす一つの影。

瀟洒なメイドは影を追いながら、一つそり微笑んだ。

・

仕事上、ヒカリが夜を往くというのは仕方のないことである。
太陽が照らす木々は、命の光に溢れ見る者を癒したり和ませたりしてくれるだろう。

しかし月明かり、もしくは夜闇に浮かぶ木々といふものは、昼間の時とは打って変わってその表情を一変させる。
陽が照らせば美しく、陰が落ちれば恐ろしく。

「……うわ、流石に雰囲気あるなあ」

「真っ黒だね！」

「正しくは真っ暗。だけど……」

フランの声のとおり、月明かりは巨大な枝葉に遮られほとんど地上に届いていない。

ポシェットの中の輝墨石だけはぽんやりと輝いているが、明かりにするには心もとなさ過ぎた。

しかし、なるべく目立たないよう歩くにはちょっとびっくりのかもしない。

ヒカリはポシェットをぶら下げ足元だけを照らしながら歩きだした。腕のセンサーの反応が微かに強くなる。

この先で誰かが何かを願っているようだ。

進行方向から水の音が聞こえてきた。

「……わ。これは、すげー……」

やがて開けた場所に出ると、目の前に轟々と流れ落ちる巨大な滝が広がっていた。

水面に叩き付けられた飛沫が夜風に運ばれ頬に当たる。
マイナスイオンたっぷりの風はとても気持ち良かつた。

「滝だ！ 滝だよヒカリちゃん！」

「す、すげー……本当にすげいなあ……」

流れ落ちる水の音は非常に大きく、フランの声もヒカリの咳きもかき消してしまつ。

岩山からそのまま落ちてきたかのような巨大な石に飛び乗り滝の麓へ立つ。

飛沫はその勢いを増しながらヒカリの体に吹きつける。

「気持ちいいな。紫さんやパチュリーさんが言つてた通り、幻想郷は自然が豊かなんだ……おっとと」

と、呆けて自分の使命を忘れるところだつた。

ヒカリの使命は、幻想郷に生きる者の願いを集めること。ここで大自然に癒されている暇はないのだ。

岩場を降り、フランの元へ戻る。

パシヤツ

「……？」

その途中、何か機械的な小さな音が聞こえヒカリは振り向いた。
もちろんこの場にヒカリとフラン以外は誰もいない。

今のは、シャッター音だろうか。

気配を探し、周囲を見回していると、滝の上の木陰で何かが煌めいた。

目を凝らしてみると、それは丸いガラスのレンズ。

しかし細長い筒のような形状のそれは、遠距離を撮影する時に用いられる望遠レンズ。

つまり、そこから誰かがこちらを撮影しているといつーことだ……

「 はあッ！」

右手で矢を作り出し放つ。

レンズを捉え貫いたかと思った瞬間、木陰から何かが飛びだし矢は難なく回避されてしまった。

「いやいや、不思議な客人を見つけたので撮影してみれば、思わぬビッグスクープってヤツですね」

漆黒の翼をはためかせ現れたのは一人の少女。ポケットのいくつかついた真っ白なシャツに、黒のスカート。手には望遠レンズのついたカメラと、カメラ用であろう予備のフィルムを握りしめていた。

好奇心に満ちた笑みを浮かべながら一人を撮影し続け少女。フラッシュが眩しい。

「な、何ですかあなたは」「おっと、これはこれは申し遅れました。私は射命丸文。しゃめいまるあや清く正しい射命丸と覚えてくださいませ」「清く正しい……ですか」

清く正しい者が果たして隠し撮りとはどうこう了見か。いや、それよりも問題なのは……文がニヤニヤしながら手帳をめくつた。

「『封印されていたフランドール嬢、不良と化し夜の幻想郷を駆け巡る!』?」これで明日の号外の見出しが決まりましたね」「ほえ?」「ど、どうしてフランのことを…?」

何か手帳に書き込みながら、文はヒカリの問いに答えた。

「私の情報網を甘く見ないでください。幻想郷の怪異から奥様方のへそくりの隠し場所まで。私はどんな情報でも網羅しますから」

清く正しいのにへそくりの隠し場所まで知っているのか。

シシコリペーる満載の新聞記者は、フンフンと鼻歌交じりに手帳を閉じた。

「さて、劇的なスクープも手に入ったわけですし、早速帰つて編集作業に明け暮れますか。では――！」

「ま、待つて！」

しかしヒカリの声も届かず、文は空へ飛び上がり瞬く間に山の闇の中へと消えてしまった。

まずい。

早く後を追つてあの写真を取り戻さないと大変なことになる。

「フラン、ちょっと我慢しててよ！」

「ふえ？　あの、ヒカリちゃんもしかし――」

返事を待つのも惜しい。

ヒカリは全力で地面を蹴りその新聞記者を追いかけるため森の中を駆け抜けた。

第十六話 白金と、妹と、スクープと（後書き）

美「私、気づいたんです」

夜「気づいたって、何を？」

美「ヒカリさんって、星の子ですよね」

夜「そうだけど？」

美「白金で、すつぐ速いんですね」

夜「……続けて？」

美「これってつまり、ヒカリさんの元ネタってジジの」

夜「オラオラオラオラオラオラオラアッ！！」

俺自身ビックリしてるぐらいです；

そりゃあなんだよ。星の白金って書くとあら不思議……W

分かる人だけで、結構です。

「ご意見と評価ポイント、ありがとうございました。」

他にも意見等あれば、じゃんじゃんバリバリ言つてください。

作品に対するリクエストとか、俺自身への質問等でも、フリーダム

にどうぞ。

第十七話 黒天白夜

「ふふん。これは面白いスクープが手に入りました。紅魔館で幽閉されているといわれていたあのフランドール・スカーレットがこの妖怪の山に、謎の人物と二人で……？」

ふと足を止め思案を巡らせる。

「……フランドール嬢と一緒にいたあの少女は誰だ？」

幻想郷中を駆け巡る文はほとんどの住人を覚えてはいるが、あんな少女は見たこともない。

誰か外来人が来たという話も噂も聞いていない。

彼女はいつたい何者なのか。

いやむしろ、これはひょっとすると一大スクープになるんじゃないやあ……

「ふ、ふふふふ……！」

笑みを浮かべながら体をぐるりと回れ右。

今日は本当に運が良い。

紅魔館の秘密たる少女、そして謎の美少女。

前代未聞の一大スクープの予感に文は身震いし、手帳とカメラを取り出した。

「これは、正しく天命！ 天が！ 地が！ スクープが！ この私に書けと囁いている！ 早速引き返してあの少女の調査を」「待てえええええッ！！」

刹那、文の正面を暴風と声とが横切り、周囲の木々が次々となぎ倒されていった。

突然の出来事に呆然と立ち尽くし、今自分の目の前で起こった状況

を理解するのに数秒かかった。

「……な、ななな何ですか今の風はー?」

目の前に広がる惨状。

何十年、いや、何千年とこの妖怪の山で生きてきた古の樹木たちは
いとも容易く破壊され、まるで森林伐採直後のような有様。
そして、その中心で大きく地面を抉っている一人の少女。
白金色の髪をはためかせながら振り向いた、滝の麓で見たあの少女。
夜の闇の中でもハッキリと見えるその金の瞳に文の姿が映る。

「あの、すみません!」

「は、はい……?」

少女は文のカメラを指差し、草木も眠る深夜というのに遠慮なく大
声で叫んだ。

「そのカメラ、というか写真! 新聞で使うのはやめてください!」
「……はあ? どうしてまたそんなことを? というか、フラン
ドル嬢は……あ

少女の手に、ぐつたりと頸垂れるもう一人の少女。
フランドール・スカーレットだった。

先刻見せていたような笑みは消え失せ、顔面蒼白でぐつたりしてい
た。

「さ、殺人的加速だ……。あう……」

「大丈夫! 私は死んでないしフランは死なないでしょ?
「気持ち悪う……」

「一体何が起きたのだろうか。いや、そんなことより……」

「い、今の風はあなたですか？ 私をも驚かす風を操るだなんて、ますます興味が湧きますね。何者です？」

「私は緋彗ヒカリ。この幻想郷に、願いを聞きにやってきた星の子です！」

「星の子あ……？」

ヒカリの突飛な言葉に思わず文は苦笑した。

「くつくく。何ですかソレ？ 竹の子の親戚か何かですか？」

「し、失礼な！ 星の子は星の子なんですッ！」

「はいはい。それで、願いを聞きに来た、ですか。ふむふむ……く

く

微かに笑いながら手帳に書きこむ。

どうやら外来人らしい。

そんな種族は幻想郷にいないし、いたとしたら幻想郷中のほとんど

の情報を握る文が知らないわけがない。

「それで？ 私の写真にどんなご用が？」

「その写真、使われたら困るんです！ フランのこと、みんなに知られたら……！」

「彼女は紅魔館の秘密ですよ？ 興味のある方は少なからずいますつて。それに、私は一度掴んだスクープを逃すような三流の記者じやありませんよ」

「だ、だったら勝負しませんか！」

「勝負……？」

眉根を微かに歪め文が答える。

「弾幕勝負！ 私が勝つたらその写真を返してもらいますー。」

「返すも何も、これは私の撮った写真なんんですけど……まあ、いいでしょう。じゃあ、もし私が勝つたら、どうするんです？」

「そ、それは……えと……」

「では、私が勝つたらあなたも含め記事にさせてもらってよろしくですか？ もちろん徹底的な取材付で」

「しゅ、取材つて……」

ヒカリは躊躇いがちに視線を反らし、やがて文に向き直る。金の瞳はゆるぎなく文を見据えていた。

「わ、わかりました。何でもお答えしますー！」

文は口の端をつり上げて笑んだ。

「それじゃ、お相手してあげますよ。改めて、私は射命丸文。『風を操る能力』を持つ、幻想郷最速の称号を欲しいがままにする風神少女！」

「幻想郷、最速……」

「ぐり、と唾を飲むヒカリ。

その体が微かに震えた。

「ふふ。あなたの風も相当な強さみたいですが、私の速さの前には手も足も出ないでしょ？ では つと」

木々がなぎ倒され広がった荒野に着地すると、文は鳥の羽根が集まつたような団扇をヒカリに向けて構えた。

「いや、尋常に……って、さつきから何をそんなに震えているんですか？怖気づいたとか、無しですかね」

「わ、わかっていますよ。でも、ちょっとドキドキしちゃって『……？もしかしてあなた、『オ、わくわくすつぞ』的な人なんですか？」

「だ、誰だか分かんないけど……」

ヒカリは顔を上げ、自信に満ち溢れた笑顔で答えた。

「あなたを越えたら、幻想郷最速の称号貰えるのかなって思つたらドキドキしてきました」

「……あら。ずいぶんと舐められてるみたいですね。じゃ、最初っから容赦も手加減も無しでいきましょうか」

手にした団扇を軽く一振り。

突如、文の中心から凄まじい光弾の竜巻が巻き起こりヒカリの前に立ちはだかる。

「風の弾幕……！ 範囲広そうだけど、一直線に貫けば……」

そこに無防備に微笑む文がいる。

ただそれを、この速さで貫けば勝てる。

手にした矢に力を加え、矢から槍へと形を作る。

狙いを竜巻の中心、その先の文に定めると、ヒカリは手にした閃光纏う槍を大きく振りかぶった。

今日が初陣となる、ヒカリのオリジナル術符。スペルカード

「私の意地が全てを貫く！ 嘘らえ、『ランス・オブ・ブリューナク』！」

漆黒の闇を切り裂く白銀の槍が裂帛の勢いと共に放たれる。

銀の閃光は空気を切り裂き竜巻を貫くと、無防備な文に向かって突進していく。

切つ先が文の体を捉えたかと思つた瞬間、その姿が夜闇に霞んで消えた。

「 ッ！」

その場から素早く跳躍すると、白銀の槍は巨大な大木に突き刺さり真つ二つにしてしまった。

「 おつとど。私の術符を破るとはなかなかの高威力のようですね。驚きました」

「あ、当たつていれば勝ったのに！」

「そんな簡単に負けるとでも思つてたんですか？ 私を見ぐびらなりでくださいな」

「」、「こいつなつたらアタシの脚でッ

ぶツ！？」

いつものように地面を蹴り文に突進。

しかし、文の姿は一つの間にか空中へと浮かび上がっており、ヒカリはそのまままっすぐ木の表面に思いつきり体をぶつけてしまった。

「アッハハハ！ な、何してるんですかヒカリさん？ 私はこいつちですよ？」

「う、うおお……鼻がペっちゃんこにい……」

「さて、私も遊んでいる暇はありませんので、このまま一気に決着を」

文が別の術符を取り出し構えたところで、背後から声が聞こえてき

た。

「せ、先輩！ いつたいこれは何事ですか！」
「お、いいところで榊の登場ね」

「つたあ……ん？ あれ、誰だ……？」

ヒリヒリする鼻の頭をさすりながら、ヒカリは大木のてっぺんに立つ人影を見上げた。

月明かりに照らされた白いショートヘアと三角の耳。
道着のような出で立ちに、腰には大型の太刀を帯剣している。

「いいタイミングね榊。ちょっと手伝ってくれない？」
「侵入者の排除ですよね。わかつてます」
「まあ、理由は何でもいいか。あの子と戦つてる最中なの。一人で
やればすぐに終わるわ」
「了解しました」
「う、うそ……！ 援軍！？」

月を背後に笑う文と、寡黙にたたずむ榊と呼ばれた少女。
圧倒的不利な状況、ヒカリは歯噛みしながら一人を見上げた。

第十七話 黒天白夜（後書き）

また遅れたあ！？

ち、茶番劇はお休みで！

第十八話 コンビネーション・アサルト

「はああああッ！！」

「そらッ！ そらそらあッ！」

「うわわッ！ やつぱり、ふ、一人分の攻撃は厳しいッ！」

迫りくる斬撃、そして止むことのない光弾の嵐。

ヒカリは一人の意外なコンビネーションの良さに舌を巻いていた。文の激しい弾幕。

掻い潜った先では桟の鋭い太刀が振り下ろされ往く手を阻む。

「あわわ……ッく！」

どうにか回避しながら反撃のチャンスを待つ。

が、そもそも能力的に少し相性が悪い。

「せめて、空中でもこの速さをコントロール出来ればいいんだけど

……

未だヒカリは地面を走りながら攻撃を躊躇している。

空を飛んでもいいのだが、そうした場合この能力をコントロール出来る自信がない。

「桟、そろそろ決めますよ！」

「分かりました！」

羽根のついた団扇を高く掲げる文と、その背後で太刀を握り直す桟。何か仕掛けてくる。

ヒカリは一人を見上げたまま姿勢を低く構えいつでも跳べるように

して待つ。

「疾風『風神少女』」

手にした団扇を薙ぐと、文を中心には凄まじい烈風が巻き起こり、光弾が風に乗って雨のように襲いかかる。

攻撃範囲はかなり広い。

この荒野一帯を埋めつくさんばかりの弾幕と烈風にヒカリは呻いた。

「この風じゃ、踏ん張るので精一杯で……！」

「そこだッ！」

次の瞬間、桜が弾幕をすり抜けヒカリの目の前に躍り出た桜。

その手に握られた太刀は背後の風で加速し一気に振り下ろされる。

「ぶ、ブリュー・ナクッ！」

咄嗟に作り上げた白銀の槍で何とか太刀を受け止める。

しかし、少女の一撃とは思えないような重い一撃にヒカリは顔をしかめた。

「ツ……！　こ、これじゃ、もたない……！」

「このまま、押しますッ！」

少女の体重の乗った太刀に押し込まれ思わず膝を折る。
このままじゃ、やられる……！

「ヒカリちゃんに、何するんだあああ……！」
「むッ、新手？　うわああ！？」

ヒカリの横を凄まじいエネルギーの何かが横切り桺が思わず飛び退く。

目を覚ましたフランが、レーヴァテインを片手にヒカリの元へ駆け寄ってきた。

「大丈夫！？」

「な、何とか。助かったよフラン」

「えへへ」

「むう……。フランドール嬢の加勢。これはちと厳しいか」

「な、何なんですかあの人！？ それに今の攻撃は……。ど、どうしますか先輩？」

「任せてください。策はちゃんと考えてあります」

「本当ですか？」

桺の表情が明るくなる。
文の作戦はこうだ。

「まず、私があのヒカリさんという人と戦います」

「はい」

「そして、あなたはフランドール嬢と戦い、あとはそちらでビックリしてください」

「…………一瞬でも期待した私がバカでした」

「私の考えた作戦に何か問題でも？」

「問題しかないですよ！？」

二人の上空で桺の叫びが虚しく響く。

「では逆にしますか。桺がヒカリさん、私がフランドール嬢を」

「…………了解です」

太刀を構えヒカリを見据える桺。ヒカリもキッと見返した。

「……じゃあフラン。そつちも頑張ってね」「もちろん。あつという間に終わらせてヒカリちゃんを助けに行くよ」「私の方が早く終わるよ。だから、私がフランを助けに行く」「じゃあ、競争ね」「ん。わかった」

フランは空に、ヒカリはまっすぐに同時に飛び出す。

「では、お相手願いましょうか」「すぐに倒しちゃうんだから」「それはそれは、楽しみですね」

そして一人の姿が霞む。

と同時に激しい弾幕の内愛が勃発した。

「フラン……、いいなあ。私も能力を使って上手く飛べたらいいのに」「他所見している暇、あるんですか?」「そうだった……わ!」

慌てて身をよじり太刀を躲す。

もう少し反応が遅れていたら真つ一つになっていたかも知れない。

「そういえば、あなたの名前は?」「犬走柵。いぬばしりもみじこの妖怪の山を哨戒する者です」「紹介……? 観光案内ってこと?」

「そ、そつちの紹介じゃないです。警戒して、見張りを行つ方です」

「ああ、そつちか。ごめんごめん」

「……では、いきます！」

ヒカリも槍を握り直し、柾の太刀を受ける。

今度は一対一。負けるわけにはいかない。

かなりの速さで襲いかかる太刀を見切り、避けながらヒカリも槍を激しく突き立てる。

とはいへ、慣れない武器なので動きは素人並みだ。

「こーの！　こん……のッ！」

「武術に長けてるわけでは、ない、みたいですね……せいッ！」

「あうわッ！？」

柾が身を屈ませ鋭く足払い。

予期せぬ攻撃に対応できず、ヒカリは思い切りお尻を打ちつけてしまった。

「こー、これで戦うのは今日が初めてなの！　わわッ！」

太刀が頬をかすめ、ヒカリは飛び退いて柾との距離を取る。
危なかった。

もう少し反応が遅れてたら、首と胴体が離婚していたかもしがれない。

「……笑えないぞ、それ」

「何を一人でぶつぶつ言つてるんですか……？」

「こー、こうなつたらこつちで！　瞬符『光陰矢の如し』！」

白銀の槍を矢に変え投げつける。

光速をも越える矢は光の軌跡を描きまっすぐに柾へ向かうと太刀を

後方に弾き飛ばした。

「……ツ！？ 今の、速過ぎて見えない………？」

「次は、刹符『プラチナラピッドファイア』－」

「ぐ、このままじゃ－！」

ヒカリの手から迸る機関銃のよつたな光弾の一斉掃射。闇を切り裂く光弾はあつとくに間に棟を貫き後方の大木に叩きつけた。

「あつ……」

「勝った！ フランは……！？」

空を見上げると、高速で飛び交う一つの影。

フランは肩を上下させながらレーザーヴァテインを一心不乱に振り回し続けていた。

「このツ！ 当たれ、当たれ！」

「当たれと言われて当たるバカはこの幻想郷にいませ……、いや、いるかもせんけど。少なくとも私は当たりませんよ」

「当たれば、勝てるのにい！」

「ハハハ！ 当たらなければどうとこうことはない！」

フランの速度だって一般常識から考えれば容易く超越するほどの速い。

それでも文はその上をいき、余裕すら見せていく。

「は、速いな……あの人。幻想郷最速ってのは冗談でも何でもないんだ……。つと、ボケツとしてちゃダメだ。フランを助けにいかないと

軽く地面を蹴つて空に浮かび上がる。

フランのすぐ傍に寄り添つと、フランが横田でヒカリを見つめた。

「ヒカリちゃん、早かつたね」

「あやや。足止めにもなりませんでしたか桜は。そんな程度では出世の道は遠過ぎて霞んじゃいますよ」

「……ひ、ひどい扱いだ……がく」

桜の声が聞こえたかはさておき、ヒカリとフランは田の前で微笑う文を見据えた。

どうすれば、この人を捉えられる。
どうすれば、この人に追いつける。

「ヒカリちゃんの速さが私にもあれば、追いつけるのにな

「せめて、私の飛ぶ道を途中で変えられれば……」

ふと、湾曲するフランの剣とその姿が田に映る。

「…………フラン。ちょっとだけ、やつてほしこことがあるんだだけ
ど」

そしてその突然思いついたあまりにも突飛過ぎる発想を、フランの耳元で伝えた。

「…………え、ええ！？ も、そんなことホントに出来るの…？」

フランの大声に文の眉根が微かに揺れる。
向こうは何か企んでいるらしい。

「早くしてくれると嬉しいんですけどねえ。早く現像して、記事を書いて印刷して……くふふ」

文の頭の中ではすでに、この大スクープを称賛され、絶賛され、躍幻想郷のアイドルになる自分の姿が浮かび上がっていた。

「ど、どうなつてもしらないよ？」

「ゴメンね。変なこと頼んで。でも、これなら何とかなるかもしねいんだ」

「じゃあ、やるよ?」

ヒカリは頷くと、何故かそのまま着地してしまった。
そしてフランは術符を発動させレー・ヴァ・テインに力を込めていた。

「……一体何が始まるんです?」

とか言いながらも文は顔が一ヤついている。
完全に余裕の表情だ。

「いくよ、フラン」

適当な木の根元に立ち、ヒカリは上空のフランに目配せする。
フランは微かに困惑の表情を浮かべながらも、頷いた。

「禁忌『レーザ・テイン』」

術符が起動し、その湾曲した剣に爆発的な力が集まる。

触れば全てのものを破壊する力。

それをどうにかコントロールし、そして両手で握りしめて構える。

その姿はどいか、野球の打者のような格好だった。

「今だ！ フラン！」

「ど、どうなつても知らないよ！」

フランが叫び、手にしたレーヴァテインを大きく薙ぐ。

同時にヒカリは地面を蹴つて飛び上ると、目の前の木の表面を踏みしめた。

ミシミシと軋み根元から亀裂が走る。

そしてもう一度大木を蹴ると、まっすぐに飛び出した。

目標は、フラン。

いや、フランのレーヴァテイン。

「ッ、おおおおおおおおーー！」

フランがレーヴァテインを薙ぐ瞬間、その一瞬を狙つてヒカリが突進していく。

そしてヒカリの脚が、今まさに振り払わんとするレーヴァテインの腹に触れた。

「あうッ……く！」

その衝撃と重力に顔をしかめるフラン。

「そのまま、薙ぎ払つて！」

「っく、ああああああああッー！」

ヒカリの乗つたレーヴァテインを力いっぱい振り回し、フランはがむしゃらに振り下ろした。

レーヴァテインと、ヒカリの能力が合わさり、その速度が尋常じや

ないほどに加速する。

「シュー・ティング、スター」

「へ？」

「キイイイイイイイック！！」

あまりにも速過ぎて反応すら許さない飛び蹴りを直撃し、文の姿が震んだかと思うと、一瞬で地べたに叩き付けられた。

その勢いで、妖怪の山に巨大なクレーターが一つ出来上がるほど。そして、周囲一帯の木々を全て破碎してしまつほどに。

ヒカリはぐるぐると回転しながら見事に着地。

手には蹴る瞬間にこぼれ落ちた文のカメラが握られていた。

「ハア、ハア……！　ど、どうだ！　私の光速の蹴りは！？」
「つ、疲れ……たあ……」

ヒカリの傍にフランが着地。

しかし一人はほとんどヘトヘトで、その場にぺたりと座り込んでしまった。

「む、無茶苦茶……ハア、すぎるよ。野球じゃないんだから、レー
ヴァテインでヒカリちゃんを打つなんて……もう」

「け、結果オーライ……アッハハ。でも、ホントにもう疲れちゃつ
て……ん？」

見渡すと、何故か周囲が明るい。

しかもよく見るとそれは星や月の明かりの類ではなく、木々の合間から提灯のような人工的な光源が見えてきた。

「…………あ」

そして、ヒカリは今しがた自分の作ったクレーターを思い出し、戦慄した。

今は真夜中。

周囲の木々をありつたけなぎ倒し、クレーターまで作るよつた大騒ぎをすれば、当然天狗がこちらに気づく。

排他的な種族の天狗は侵入者を許さない。

このままここにいて天狗に捕まれば、どんなに可愛く見積もつても死刑確定。

ガバッ！ と立ち上がりフランの手を掴む。

フランは顔面蒼白でヒカリの顔を見上げた。

「あ、あの……さ」

「ゴメン、フラン」

そしてヒカリは残る力全てを振り絞つて地面を蹴った。

一瞬何かフランが叫んでいたような気もしたが……、とりあえず後で聞けばいい。

今はとにかく、ここから逃げ出さなければならない。

「あれ？ 輝望石に願いが溜まってる……？」

・

・

「お、おい！ 射命丸、大丈夫か！？」

クレーターのど真ん中、そこでのびていた文の表情は、何故か幸せ

そうだった。

「ね、念願の……一大、すくー……ふ……」

「お、おい！？ 死ぬな、死ぬんじゃない！？ え、衛生班！ 直ちに処置をお！？」

その後しばらく、妖怪の山の警戒レベルが通常の五倍に膨れ上がったそうな。

第十八話 ハンピネーション・アサルト（後書き）

レ「ずいぶんと無茶苦茶な描写じゃない。しかもこんな拙い文章で、読者にちゃんと場面を理解してもらえるかしら」

夜「……ちょっと自信ないです」

レ「それと彼女の、ブリューナクだっけ？ 私のグングールとビビちらが上かしら。個人的に少し興味があるわ」

夜「あの……だつたらどうして殺氣の向きがこちらなんでしょうか」

レ「何となくよ、何となく。フフフ……」

梶「ところであの、シリーズ皆勤賞の私について何かコメントはな
いんですか……？」

そして「一章終了のお知らせ。

妖怪の山にはしばらく入れそうにもありません。

お気に入り登録、評価ポイント等、ありがとうございます。

それと、タグを少し追加しました。

き、キャラが安定しねえ……」

第十九話　目玉焼も譲争（前書き）

今回、ギャグ要素強めです。
キャラの崩壊が著しいので注意をば。

第十九話 目玉焼き論争

窓から差し込む光を浴び、今日もヒカリは目を覚ます。仕事が終わり眠りについても、時間が時間なのであつといつ間に朝が来る。

「……習慣つて、時々恐い」

むくつと半眼のまま起きて、それから鏡の前で髪を梳かす。身支度を整え食堂に向かうと、既にレミリアが席についていて新聞を片手に紅茶を飲んでいた。

『新たなる異変！？ 妖怪の山に巨大なクレーター！』

紙面を飾っているのは、昨日ヒカリがあの新聞記者を叩き付け出来上がったクレーター。

レミリアはヒカリに気づき、深紅の瞳を細めて挨拶をした。

「おはよう。仕事は順調なのかしら？」

「お、おはようございます。仕事は、万事順調ですよ？」

乾いた笑いを浮かべながら席につくと、咲夜が早速紅茶を出してくれた。

もちろん、大量の角砂糖とミルクも添えられている。

「し、新聞、見せてもらつてもいい？」

「ええ。私はもう読み終えたから。はい」

恐る恐る文章に視線を落とし黙読。

犯人等は未だ不明、となつてゐるのにヒカリはホッと胸をなでおろした。

「珍しいわよね。呂外なのに、あの天狗が編集した新聞じゃないのよソレ」

「あの方がこんな大ニユースを掴んだら、ほつとかないでしょ」「

犯人が不明となつてゐる理由が判明した。

あの人、大丈夫だろうか。

ミルクの入れ過ぎで真っ白な、もはや紅茶といつ名前が当てはまらなくなつた飲み物をヒカリは少し複雑な気持ちですすつた。

「おはよー」

「あ、パチュリーさん。おはよー!」¹それこます

パチュリーは席につくとヒカリと同じように新聞の紙面に視線を落とす。

「……お、おはよーう」

一番最後にフランが現れ、ぼんやりとした足取りで席についた。まだ完全に起きていらないらしく、寝ぼけ眼のまま体がぐらぐら揺れ動いている。

そんなどらしないフランを見てか、レミリアはため息混じりに言った。

「フラン、ここ最近どらしないわよ。夜更かしでもしてゐるの?」

「…………ほえ?」

かなり間を開けた返事にレミリアの眉間にしわが寄る。

やがてメイドたちの給仕が始まり朝食が並べられる。

今日の朝食は食パンと田玉焼きとソーセージ。それと「ーンポター
ジュー」、デザートはカットフルーツの盛り合せ。

「いただきまわ」

「いたふあ……こまわ」

「まだ寝てるのフラン？　いい加減田を覚ましなさい」

「今日は田玉焼きかあ。じゃあ、私は」

田の前に並んだ調味料を順に田で追う。

醤油、ソース、マヨネーズ、ケチャップ…………？　ば、馬鹿なー？

「砂糖が…………ない！？」

「こつたに何にかける氣ですかー！？」

それでも一応砂糖を持ってきてくれる咲夜さん。
答えはもちらん決まっているが。

「え？　田玉焼きには砂糖が常識…………」

そんなヒカリの言葉を聞いて、パチュリーが額に手を当へながら心配そうに言つた。

「……甘党もそこまでいいくと病氣よ？　そんな食生活じゃ毎日が糖

尿病よ」

「なんて恐ろしい毎日…………」

咲夜さんの顔が引きつっている。

私は至つて健康なんだけどな。

そこで言葉を挿んだのは、今までに調味料に手を伸ばしていたレミ

リアだった。

「何やつてゐるの。田玉焼きにかけるものなんて全世界共通でしちう？」

「まあ、そうね」

「はい、お嬢様。田玉焼きにかけるのはもちろん」

「醤油でしょ」「ソースよ」「マヨネーズですね」

・・・・・

食堂の空気が止まった。

それから何故か背景が燃え上がり三人の少女が椅子を吹っ飛ばして立ち上がる。

「一応訊くけど、田玉焼きには醤油が常識よねえ？」

「そんなルールはございませんよ、お嬢様」

「……まさかこんなところで世界の歪みを見るとは思わなかつたわ」

世界の歪みつて。

「何を言つてゐるパチュ。田玉焼きといつのは和食よ。和食なら和食らしく醤油をかけるのがベストでしょ」

「違うわレミィ。田玉焼きは洋食。故にソースをかけるべき。いいえ、ソース以外あつてはならないわ」

「パチュリー様、ソースでは卵本来の風味を損ねてしまつ恐れがあります。ここは調味料も原料として用いられるマヨネーズを

「咲夜、それじゃ卵に卵をかけているのと同じだわ！」

……というか、朝っぱらから妙なテンションで田玉焼きを囮み熱戦

を繰り広げられても。

レミリアがテーブルを叩く。

「咲夜！ 私の命令には絶対でしょーー？ いいから醤油をかけなさい！」

「いいえ。お嬢様の命といえど、これだけは引き下がれません。卵焼きにはマヨネーズです」

「一人とも死んでいるわ！ ソースこそが至高！ 神なのよーー？」

目玉焼きだけなのにそこまで盛り上がらんでも。

と、もの凄く口を挟みたいのだが、殺氣めいた三人の表情を見ていると怖くて言えないし、言つたら恐らく死んでる気がする。

一触即発。

妖精メイドは全員して青ざめていて、ヒカリは苦笑い、フランはフォークとナイフを持つ手がひっくり返っていた。

目の前のソーセージをフォークで切つてナイフで刺すという何とも器用な動作で食べている。

「これじゃ、埒が明かないわね……」

「私に名案があるわ。……ヒカリ」

「は、はい。……なんでしょうか？」

呼ばれて振り返ると、三人分の視線と殺気が一斉に突き刺さった。

「貴女に問うわ。目玉焼きにはもちろん、醤油よねえ？」

深紅の瞳が野獣のようにぎらりといっている。

一言で言えば、危ない。

「いいえ。ソースよね。ソース以外、何をかけるのかしら？」

傍から見たら愛らしくて素敵な笑顔なのに、何故だろ？

背筋が氷河期だ

「マヨネーズ、ですよね？」

全身にナイフが突きつけられたかのような緊張感。…… というか既に突きつけられているような気がするのは絶対に気のせいじゃないはず。

「さあ、答へなさい？　田玉焼きにかけるべきせ」

『醤油』『ソース』『マヨネーズ』

「あ、あつあつ……」

脅迫の三重奏。

どれを選んでも恐らくヤヴァアイ。

ガチ泣きしそうなのをじりえながら、慎重に、田の前に並んだ調味料を見据える。

伸ばす手が、震える。

不意に、ヒカリにある妙案が浮かび上がった。

これららの状況を開拓し、皆と平和的に食卓を囲めるのではない
か？

紅魔館の和氣あいあいとした食卓を取り戻すため、ヒカリは手を揺るぎなく広げ、そして掴んだ。

選んだ調味料を全てぶちまけ、ヒカリの田玉焼きに降り注ぐ。醤油と、ソースと、マヨネーズと。

.....

おかしい

三人の視線が凍りついている。
どれか一つに絞るのなら、いつそ全部かけてしまえば結果は同じはず。

この画期的な妙案にスキなどない！
それなのに、何だこの怖気は。

「ヒカリ……。貴女には失望したわ」
「へ……？」

レミリアの右手で深紅の魔槍が禍々しい光を放つ。その切っ先がまっすぐヒカリの首筋に突きつけられる。

「何か、言い残すことは？」

「ああ、ああ」
「ああ、ああ」

「そう。それが最期の言葉ね」

ニッコリと笑ひニコア。

次の瞬間、ヒカリの姿が霞んで消えた。

「アーリヤの魔術は、魔術そのものだ。」

グングニルが唸りがあげてヒカリを遙か彼方に吹き飛ばすと、紅魔館の屋根に再び大穴が出来あがつた。

第十九話 目玉焼き論争（後書き）

美「目玉焼きには何もかけないのが一番ですよ」
夜「目玉焼きに限らず、俺は何でもかんでも醤油をつけるけどねえ」

美「え？ じゃあコロッケとかは？」

夜「醤油」

美「トーストには？」

夜「醤油」

美「……ところで、私の朝食は？」

夜「さあて！ ヒカリの次の目的地はどうだうなー。」

美「豪華な朝ご飯、羨ましい……しぐべー」

夜（……流石に可哀想になつてきたな）

今回は息抜き的なお話です。

第一十話　田舎せ満漢全席？

「あう……。結局朝ご飯食べれなかつたなあ」

空腹で嘆きの声をあげるお腹をさすりながら、ヒカリは人里の中を歩いていた。

太陽がちょうど中天に昇り現在十一時ちょっと過ぎ。人々は昼食を求めてそれぞれの家々に帰つたり、店屋で何か注文したりしていた。

「せめて、パンの一かけらでも食べればよかつたんだけどなあ……」

「ヒカリさん、大丈夫ですか？」

ふと、後ろから声をかけられヒカリは振り向く。
動きやすそうな、たしかチャイナドレスという服だつただろうか。
そんな姿で赤茶のおさげ髪を揺らす少女と田^たが合つた。

紅魔館の門番を務める、紅美鈴。

実は、ヒカリと美鈴は咲夜のお使いを頼まれている最中だった。

「お気遣いどうも、美鈴さん。大丈夫ですよ。星の子は丈夫です」

ぐしゃ、ぐしゃわわわわわう、ぎゅうう……

お腹の中の虫が派手な交響曲を奏で始めた。

ホントはそろそろ限界なのかもしけないが、ヒカリはとりあえず笑つて誤魔化した。

「……全然大丈夫そうに見えないですよ。そうだ、私が何か御馳走

しましょうか

「え？ いいんですか？」

美鈴は優しく笑ってくれた。

その柔軟な顔立ちで微笑まれると何だか胸の奥がホッとする。例えるなら、近所の優しいお姉さんと言つたところだろうか。彼女がパン屋のお姉さんだったら、毎日通う大学生が大量生産されそうだ。

……」この文章、どつかで見覚えがあるな。

「あの……、ヒカリさん？ 顔が緩んでますよ？」

「な、何でもないです！ ジャ、私冷やし中華食べたいな」

「ええ。それじゃお店に行きましょうか」

美鈴とヒカリは当初の目的を忘れ里の食堂へと向かつ。

そして注文した冷やし中華はあつといつ間にヒカリの前に出された。割り箸を口で割り、調味料に手を伸ばす。もちろんヒカリのお目当ての調味料は無い。

「今度からマイ砂糖とか持つた方がいいのかな」

「あの、普通冷やし中華つてお砂糖かけませんよね……？」

「美味しいんだけどなあ。誰も理解してくれやしない」

「あ、あはは……」

とか文句言いながらもヒカリは喉越しのいい中華麺を一気にすすぐた。

「なあ、聞いたかよ？」

「あ？ 何だ歎から棒に」

ふと、近くの席の会話が聞こえてきた。
麦茶を飲みながら聞き耳を立てると、里の男一名が何やら話をしているようだった。

「新聞の端っこに書いてあつたんだがよ、冥界にはお姫様がいるって話じやねえか」

「ああ、噂はよく聞くよな。俺らとは比べ物にならないほど優雅で豪奢な生活をしているってんだろう?」

「せうせう。きっと下々の俺らには理解できなこりうな、とてつもない珍味とか毎日食つてんだろうなあ……」

「おいおい。いくらお姫様でも冥界のお姫様だら? もう死んでるだろうに豪華な食事も何もないだら?」

「夢のないヤツだな。もしもの話だよ。きっと毎日満漢全席なんだろつなあ……」

「へッ。俺は普通に酒が飲めりや十分だつての」

「……今聞いた、美鈴さん?」

「はあ。冥界のお姫様のことですか? 私はあまり紅魔館外に出ることはないので、ほとんど知りませんけど」

「毎日が満漢全席……」

「……いやあの、そんな話してませんでしたよね?」

「毎日が満漢全席……ツー」

大事なことなの気がしたで一回呴いた。

しかしながら羨ましい毎日だらうか。

あつとあらゆる料理に砂糖かけ放題じゃないか。

「冥界があ。誰か願い事してないかな」

「しかし、一度死んだ者が何を願うとこうのでしょつか……?」

「やつ……だね。とこつか、輝望石も反応するんだかわからないし……あれ？」

ポショットの奥が温かいので取り出してみると、何故か輝望石が強い反応を示していた。

この近くで誰か何かを願っているらしい。

ヒカリは一足先に店を出て走る。

やがてたどり着いたのは、前に咲夜に駆走してもらった小さな茶屋だった。

「あ……」

すると店の軒先に飾られた葉竹に子供たちが集まっていた、我先にと短冊を掲げせめざ合っていた。

「おや、あんたは」の間の

「い、こんにちは」

「無邪気なもんだろ。夜でもないのに、ましてやまだ七夕当口でもないのにはしゃいじやつてさ。急いだって意味ないのに」

女将はくくつと笑いながら子供たちを見つめていた。

男の子、女の子混ざって色とりどりの短冊を吊るしていく。ふと、ヒカリは子供たちの吊るした短冊に手を伸ばしてみた。

【むじきになりたい】

【おひめさまになれますよひめさま】

「うわー、わすが子供だなあ……まさ」

誰がかいたのか一目でわかる。

一番団体の大きなあの子と、ちよつと我儘そつなあの子だらへ。

【お母さんを、守れるようにになれますように】

「…………ふふ」

ほんのりと、胸の奥底がくすぐったいようなこの気持ち。すると、気弱そうな少年が上田づかにヒカリを見つめていた。ヒカリは笑つて返した。

「素敵なお願い事だね。君の願い事、きつと叶うよ」
「え、えへへ……。ありがと、お姉ちゃん」
「えー？ 無理だよコイツじや。かけっこでこつもビロジyanか」
「そ、それは……あ、うう、……ぐすッ」
「しかも泣き虫だもん。そんなの叶うもんか」
「ああ？ それはどうかな？」

ヒカリの言葉に、子供たちが一同に振り返る。

「わつこつのは気持ちが大事なの。ずっとそつやつて願い続けてれば、きっといつか強い自分になれよ、ウン」
「ええ～……？」
「ほらほら。短冊飾り終わつたらわいわと遊んでおいで。川に行く約束なんだろ？」
「あ！ そうだつた！ ジヤあおばさん、お姉ちゃん、バイバイ！」
「うん。行つてらっしゃいな」

蜘蛛の子散らすように散り散りになつていいく子供たちを見送ると、あの氣弱そうな男の子が一番後ろでぺこりと頭を下げる。

「ははは、あんな律儀な性格しちゃって。一体誰に似たんだか
「へえ……。女将さんの息子さんなんだ。立派な願い事してるじゃ
ん」

「ま、その優しい気持ちだけ受け取つておくさ」

「いつかこのお店を継いでたりしてね」

「そんな遠い話のことはわからんね。そりだ、よかつたら何か食べ
てくれかい？」

「でも、今お金ないし」

「いいよ。今日だけサービスしてあげる」

「ホント？ ジャあとびきり甘こヤツがいいな」

はいよ、と軽い返事をして女将は店の奥へ戻つていった。
その瞳が微かに潤んでいたのを見て、ヒカリは少し嬉しくなつた。
同時に、ちょっとぴりホームシックな気持ちになつた。

「……お母さん、か」

真昼の青空を見上げ、見えないとわかっているのに星を探す。

「おーーー！ 出来たよーーー！」

女将の声にヒカリは我に帰り、慌てて席について皿を受け取つた。
皿に盛られていたのは蜜たつぷりのみたらし団子。
ほんの少し塩つぽかつたけど、それがかえつて蜜の甘さを引き立て
ていてとても美味しかつた。

第一十話 目指せ満漢全席？（後書き）

パ「あら、今日は美鈴いないの」

夜「台本渡したら凄い勢いで出ていったよ」

パ「ふうん……？（ニヤニヤ）」

咲「ところで、夜斗さんは短冊に何か願い事をしたことあるんですか？」

夜「昔、龍神丸が欲しつて書いたのは覚えてる」

パ「いくらなんでも、もう少し現実的にしなさいよ」

夜「じゃあゾイドが欲しい。ケーニッヒウルフ、もしくは妥協してライガーゼロイエーガーでもいい」

咲「子供ですねえ……」

第一十一話 霧の恋恋へ

その夜、ヒカリは紅魔館の屋根の上でぼんやりと空を眺めていた。風の音すら聞こえない、蒸し暑い熱帯夜。食堂でもらったラムネを流し込みながら、ヒカリは夜の闇に目を向けていた。

「……今日は反応、ないのかな」

いつもより少し早めに外へ出でているのだが、輝望石はほんのり明滅するだけで特にこれといった反応を見せることはなかつた。今日は誰も、願い事を願つていなかつたのだらうか。それはちよつと寂しい。

「あー、今日は早くに準備してゐるのね」

いつの間にか、ヒカリの背後にレミコアが立つていて了。レミコアはヒカリの隣に腰かけると、夜空を見上ながら言った。

「あなた、願いを集めているのよね」

「そうだけど……？」

「今、この場で願つたらダメかしつ？」

「え……？」

その時のレミコアの横顔は、少しつむき気味で、何だか寂しそうな表情をしていた。

何かを、躊躇しているように見える。

ヒカリはそつと輝望石に手を伸ばす。

ほんのりとした温もりが伝わるが、誰かの願いに呼応している様子

はなかつた。

やがて、レミリアが首を振つて立ち上がる。

「いえ、何でもないわ。仕事、頑張りなさいよ
「は、はい……」

それだけ言つと、レミリアは翼をはためかせ庭へと降りていった。
何か、願いことでもあるのだろうか。
……もしかして、フランのことだろうか。

「……ん?」

不意に、輝望石からポツと小さな火が灯るような温かさが伝わってきた。

誰かが何処かで星に願いを込めている。
だが、距離がもの凄く遠いらしく。

一瞬だけ温かくなつたかと思つたら、一気に温もりが失せてしまつていた。

輝望石を掲げ方角を調べる。

反応はあるがやはり微弱なものだつた。

「これは、飛びながら探すしかなか。……よし、支度しよう」と

屋根を飛びおりテラスに着地。

そのまま自室へ向かつと、途中で咲夜と出くわした。

「あ、咲夜さん」

「お仕事ですか?」

「うん。だけど、今回はどうも遠いみたいで……」

「遠い、ですか。でしたら、お弁当でも作って差し上げましょうか？」

「え？ ホント？ それは助かります！」

腹が減つては戦が出来ぬ。

いや、別に戦はしない（と、思つ）が咲夜の申し出はとてもありがたいものだった。

「それじゃ、何人分作りましょうか？」

「へ？ やだなあ咲夜さん。私は一人でお仕事に……ッ！」

一瞬、ヒカリは言葉を詰まらせた。

この返答は明らかにおかしい。

それはまるで、ヒカリが誰かと一緒に行くことを知っているかのようである……

「二人分で、よろしいですか？」

「え、あ、いやその……」

ずばり人数まで当てられている。

もしかして見られてたのだろうか。

すると咲夜は笑顔で、声を潜めながら小さく答えた。

「ふふふ。『心配なさらずに』。事情は既に存じ上げてますわ。……
フランお嬢様と、一緒に行ってるんでしょう？」

「う……。い、いつから知つてたの？」

「最初から、です。本来、こういうお仕事は門番がするのですけどねえ……」

「あ、あはは……」

今日のお使いのことをするつかり忘れ、さりにはそのお使いのお金で食事をしていったことがバレて、美鈴はあの後厳しく叱られていた。ヒカリは部外者だということでお咎めなし。

叱られている美鈴を見ていてヒカリは小さな罪悪感を抱いたが、美鈴はお気になさらずと笑っていた。

余計、ヒカリの罪悪感は膨れたが。

「レミリアお嬢様には秘密にしておきます。ですが、くれぐれもお氣をつけてください。フランお嬢様は今でこそ落ち着いていますが、情緒不安定な面もありますので」

「え、気をつけます……」

それからヒカリは自室で身支度し、部屋を出ようとしたりでフランとぶつかった。

「あ、フラン」

「今日も行くからね！」

「わ、わかったよ。だけど、そんな大声出しけやレミリアに気づかれちゃうよ？」

「あ……」

慌てて口を塞ぐフランの姿が何だか微笑ましくて、思わずくすぐす笑ってしまった。

「あ、ねえねえヒカリちゃん」

「何？ フラン」

「髪、梳かしてほしいな」

「また？ …… じょうがないなあ」

「えへへ」

鏡台の前にフランが帽子を外してちょこんと座る。

…… そういえば、吸血鬼って鏡に映らないんじゃなかつたつけ、と
訊ねたら、

「そんな吸血鬼不便だよお」

と笑われた。

まあ、正論だ。

ブラシをかけ終え帽子をかぶせると、フランがヒカリに飛びついた。

「とおッ！」

「わ！ ど、どうしたの急に？」

「何だか、ヒカリちゃんといふの楽しいんだもん。ねえ、私とヒカ
リちゃんは、お友達？」

「友達……か。ふふ」

ヒカリは迷うことなく頷いた。

「もちろん。フランは私の友達だよ」

「ホント？ へへ、嬉しいなあ……」

赤面したのが恥ずかしいのか、フランはヒカリの胸に顔を埋めてし
まつた。

……ちよつとくすぐつたい。

「じゃ、また皆が寝たら行こうか。今日は遠いよ？ 大丈夫？」

「へいき、へつちやー！」

皆が寝るまでの間、二人は部屋でのんびり談笑して過ごしていた。

それから更に夜も更け皆が寝静まつた頃、ヒカリとフランは紅魔館からまつすぐ西に向かつて飛んでいた。

輝望石の反応が少しづつ強くなる。

やがて目の前で霧が立ち込めてきたので一人は仕方なく着地して陸路を行くこととなつた。

「何だかここ……寒いな」

「そう? ひんやりして気持ちいいよ」

ヒカリは体の震えが止まらず、両腕で抱きしめながらゆっくりと前に進んだ。

霧のせいで視界は最悪。

元来た道すら判別できない。

不安が胸を過ぎる中、田の前に何かを見つけフランが指をさした。

「あ。あれ何かな?」

「あれ……つて?」

立ち込める霧がヒカリの視界を邪魔するが、不意に風が吹いて霧を吹き飛ばした。

そして現れたのは巨大な門だった。

「これ……門? だけど、こんな大きくする必要あるのかなあ?」

ヒカリの言うとおりこの門はかなり大きい、いや大き過ぎた。

たとえ巨人が来ても軽く身をかがめたら易々入れるであろうその門

は、何か得体のしれない生き物の巨大な顎門^{あごと}にも見えた。門の向こうも、同様に霧に包まれ何も見えない。

「……だけど、この先に反応がある。行くしかないみたいだ」「えへへ。何だかドキドキするね」

ヒカリは正直不安だったのだが、フランの天真爛漫な笑顔を見ていたらいくらか気分が晴れた。

「よし、奥へ行こうか」「うん」

揃って門をぐぐり歩きだす。

霧はさらに濃くなり、肌に感じている寒さもより厳しくなってきた。ヒカリの歯がカチカチ鳴りはじめる。

「寒い?」「だ、大丈夫……」

真夏のはずなのに、この底冷えするような寒さは何なのだろうか。例えるなら、冷蔵庫の中に突然放り込まれたような全身を駆け巡る冷氣。

そのまましばらくずっと、ずっと歩き続けた。どれくらい歩いたんだろうか。

やがて霧の向こうに石段が見え始めた。見上げると、その先も相変わらず霧だらけで、霧と石段以外ほとんど何も見えなかつた。

「こ、ここ上るのか……」

「飛んでいけばいいじゃん。あつという間に着くよ?」

「ううん……」

たしかにフランの言つとおり飛んでいけばあつという間だろ。だが、目の前が何も見えない状況で空を飛んで大丈夫だらうか。それを考へると素直に頷けない。

用心して歩いて上るのが無難だろ。

ヒカリは石段を踏みしめた。

「いや。 じいには慎重に行こう。 何かあつたら大変だし」「ええ？ もう、めんどくさいなあ……」

それでもフランも渋々ついてきて、石段を上りはじめた。一段一段上るたびに、身を貫くような寒さがヒカリに襲いかかる。

「おつかしいなあ……。 じいのローブ、どんな寒とも暑とも平気なはずなのに」

見上げる視線の先に、石段の終わりが見えない。
一体いつまで上り続けるのだろうか。
……もしかして、終わりがないとでも言つのだらうか。

「……あ。 ヒカリちゃん、また何か見えたよ？」
「え？ 見えるも何も霧以外何も……」

と、言葉を切つて目の前の光景に自分の目を疑つた。
いつの間にか石段を上り切り、そして霧の合間から巨大な屋敷が姿を見せていた。

「うわ……！ 何だ、このお屋敷……」
「すごい！ 紅魔館より広くて大きい！」

念のため輝望石をかざす。

反応は強く、この屋敷の奥を示していた。

ところ、「」とは、ここで誰かが何かを願っているのか。

「じゃ、早速入る」

ばふッ

「きやうツ」

「あらり、『めんなさい?』

門の奥へ入ろうとした矢先、フランが何か柔らかいものにぶつかって思わず尻もち。

「だ、大丈夫?」

「ねえ、大丈夫?」

ヒカリが駆け寄ると同時に、目の前に桃色の髪の少女が顔を覗かせた。

「う、わ!？」

思わずフランを抱えて後方へ飛び退いてしまった。

すると、桃色の髪の少女は首を傾げ、それからくすくすと微笑浮べた。

「やあねえ。そんな、オバケでも見たような顔しちゃって。……あ、ぶつかってごめんなさい。その子、大丈夫?」

「私は大丈夫だよヒカリちゃん」

「ホント？……よかつた。あの、すみません。急に飛び出しちゃ

つて

「『』『』めんなさこ」

ヒカリに窓つてフランも頭を上げる。

すると少女は『』のよ、と言つて手を振つた。

「ひからいんだ、『』めんなさいね。食後のお散歩にでてもいいと思つてたんだけど、屋敷の中は見飽きちゃつて……」

「屋敷つてことは、あなたが『』の主つてことはですか？」

少女は『』と微笑み頷いた。

「主つてほど大袈裟なものじゃないわ。私、西行寺幽々子つていうの。貴女たちは？」

「私は、緋彗ヒカリつて言います。で、『』ちが」

「フランデール・スカーレット。フランで『』よ」

「ヒカリちゃんに、フランちゃんね。よろしく。……あらへ、スカ

ーレッ」とつて何処かで聞き覚えがあるような？」

ギクッ！

思わず普通に名乗つてしまつたが、名字を出すのはまずかった。ヒカリはどうにか誤魔化そうと思案を巡らせていたが、それはやがて別の声によつて阻まれた。

「幽々子様ーー！ どちらですかーー？」

「むむ。このままじゃ見つかっちゃうわね……」

「へ？ 見つかっちゃうて……？」

「そうだ。ちょっと貴女、付き合つてくださいない？」

「付き合つて……わ、ちょっと？」

すると幽々子がヒカリの手を取り、一田散に飛び出した。
少女にしてはやけに強い力で引っ張られ、ヒカリはほとんど成すが
ままだつた。

「ふ、フランも行くよ～！」

慌ててその後を追いかけるフラン。

幽々子を含めた三人は、再び霧の奥へ包み込まれていった。

「はあ、はあ……。どうしよう。お屋敷の中で見つからないってことば……ま、まさか、誘拐！？　い、今行きますよ幽々子様あ～！」
「！」

そりそりその後を、別の少女が裂帛の勢いで駆け出した。

第一十一話 霧の匂いへ（後書き）

パ「突然だけど、東方キラソートの時間です」「夜「な、何だ突然」

パ「早苗。「桜」

咲「や、夜斗さんが窓ガラスに頭ぶつけまくつてます！」

パ「どこのドーカよ……というか、そこまで悩むものかしら？」

夜「死活問題だズエアツ！」

パ「じゃあ、私と咲夜なら？」

夜「……おかしいな。どっちを選んでも死ぬんだけど」

東方キラソート……恐ろしい子！

といふが、また幽々子登場。

そこまで好きなキラソートじゃないんだが……

ちなみに俺の中では、

1位 東風谷早苗

2位 犬走桜

3位 風見幽香 だつたりします。

第一十一話 勘違いの辻斬り少女（前書き）

今回、ギャグ要素強め。

第一十一話 勘違いの辻斬り少女

「はふう……。走ったのなんて久々だから、ちょっと疲れちゃったわ」

幽々子は手近な岩に腰をかけると、桜をあしらつた優雅な扇子でぱたぱたと扇いでいた。

「あの、どうして走る必要があつたんですか？ それに今の声は……」

「あの子は私の友達よ。だけど、真面目すぎるのが玉にキズなんだけどねえ」

くすくす笑う幽々子。

何というか、ほんわかという表現がピッタリな人だった。

ゆつたりとした袖口をした藍色の着物におつとりとした愛らしい瞳。物腰ものんびりとしていて、いいトコ育ちのお嬢様、みたいな雰囲気がある。

屋敷の主なんだから当然か。

「そういうえば、ヒカリちゃんとフランちゃんだけ？ 二人ともこんなところに何しに来たの？」

息を整えた幽々子が横のヒカリに訊ねた。

「私、幻想郷を生きる人の願いを集めるのが仕事なんです。だから、願いを探しにここまで」

「へえ、願い事……。何だか、ロマンチックなお仕事ね。ふふ」

「それで、幽々子さん。この辺りで何か願い事をしているような人

見ませんでしたか？」

「つ、ん……、そうね。もしかしたら」「幽々子様あツ！！」

再び声を遮られ振り返ると、そこには銀の髪の少女がせいぜいと肩で息しながら立っていた。

背と腰には、少女には不釣り合いな刀を帯剣している。

……今、幽々子様と呼んでいたような。

「あらう。あつさつ見つかっちゃった」

幽々子はやんわりと笑っていたのだが、何故か銀の髪の少女はヒカリを見つけるや否や、全身から溢れんばかりの殺氣を放った。

「貴様か……」

「く……？　あの、どうしてそんな恐い顔して……」

ジャキーン！

甲高い音共に背と腰の一刃が抜刀され切つ先がヒカリに向けられる。鬼気迫るような表情で睨み据えられ、ヒカリはまるで蛇にガン飛ばしされた小動物みたいに縮こまることしか出来なかつた。

「貴様が幽々子様をかどわかし、あまつさえこのよつたな邊鄙な場所まで連れ去つたのだな！　許さんツ！　絶対に、許さんツ！」

「ち、ちちち違うよお！？　私は幽々子さんに引っ張られてここまで……。ゆ、幽々子さんからも何か言つて、つて、うおわあツ！」

？」

間一髪のところで刃を回避し飛び退く。

しかし銀の髪の少女は刃を繰り出しヒカリに襲いかかってくる。

「はあッ！ セえいッ！」

「だから、うわわッ！ 話、を！ 聞いて、つつてゐるの、にい！？」

聞く耳持たず、少女は猪突猛進に斬り込んでくる。

神速かとも思える、それは普通の人間が繰り出すよつた速度の斬撃とは思えなかつた。

二刀から繰り出されるコンビネーションに舌を巻きつつ、ヒカリはどうにか攻撃を回避していた。

「だけど、このままじゃ、やられ……、ひッ！？」

「避けてばかり、いないで！ 正々堂々、戦いなさい！」

「もう！ なんで、」「うッ、なるの～ッ！？」

能力を使って逃げ出したいが、少女の剣閃がそれすらも阻んでくる。少しでも気を抜けば一瞬でばっさり斬られる。

「……そうだ。距離を取れば」

後方に大きく退くと同時に踏み込めば、少しばかり時間があるかもしれない。

とにかく、一瞬でも不意をつければいい。

少女の不意をついて術符を使って身動きを封じる。

それさえできれば勝機はある。

「よおし……！」

少女の斬撃が大振りになるのを待つ。

大振りになつたところを見計らつて後方に飛び出し能力を使って踏

み込む。

そして、時が来た。

「はあああッ！…」

二刀を振り上げ斬りかかる、その瞬間にヒカリは地面を蹴つて飛び退いた。

距離は十一分に空いた。

この一瞬の時間を逃したりはしない。

「！」から一気に加速して「

ヒカリが姿勢を低く構えたその瞬間、驚くことに田の前に立たす少女が踏み込んでいた。

「な……！？」

「そこおッ！」

「ひいにッ！？ ビ、ビうなつてゐのぉ！？」

身を屈めて回避……したはずなのだが、髪の毛が数本斬られたような気がした。

そしてヒカリに再び斬撃のラッショウが襲いかかる。

「この！ いい加減に斬られなさい！」

「無茶苦茶なあ！？ 斬られたら死んじゃいますよー！？」

「是非とも死んでください！」

「『死』やああああー！？ ビ、ビユビビビツコム、つわあー！？」

止むことのない斬撃の嵐。

ヒカリも槍で反撃しようにも、これでは出す暇もない。

そうだ。フランからレー・ヴァテイン借りれないだろうか。

「ふ、フラン！？」

ちらと視線を動かすと、フランと幽々子は向かいあいながら座つて何かやり取りをしていた。

「む～！ お姉さん、あっち向いてホイ強いなあ。もつかい！」

「いいわよ。じゃんけんぽん。あっち向いて……ホイ」

「むむむ……。また負けた」

「何やつてんのぉー？ うあ、わわわー！」

白刃がヒカリをかすめる。

赤い零が頬を伝わつて口に入ると、鉄臭い嫌な味がした。

「逃げているだけでは、私には勝てませんよー！」

「くそぅ……！ 何だか、私はこの人と相性が最悪な気がする……！」

「！」

恐らく彼女は剣の達人。

しかもとんでもないレベルの達人。

免許皆伝の人気が免許皆伝するよつな……、いや、これは何だか妙な例えだが。

とにかく、彼女はとんでもなく強い。

ヒカリは何となくだが少女の太刀筋を覚えた。今しがたを見せたあの剣術は恐らく居合抜き。

刀に全身全霊の力を込めながら刹那を見切り、その一瞬に込めた力を一点に集中させ放つ神速の剣。

たぶんヒカリが能力を使って飛んだとしても、その刹那ですら見切

られてしまつかもしれない。

一瞬、それは本当に短い時間の世界。

そんな世界を垣間見れる一人だから」その戦い。

圧倒的にヒカリが不利……なのだが。

「ぐぐぐ……」

手も足も出ない。

いやもう本当に。迂闊に出せば斬られそうだ。

「さあ！ 観念してお縄につきなさい！」

「私は無実だあ！？ フラン、助けてえ！？」

「じゃあ……こっちはからしら」

「残念、またババだよお！ お姉さんババ抜くの上手だねえ

「つうん……。どうしてからしら……？」

「じ、自力で何とかするしかない！」

援護や助力は諦めた。

というか何処から出てきたトランプ。

しかも二人でババ抜きとか寂しくないのか。

「せいやあッ！」

「あうわッ！ もづ、こっちは、疲れて、きて……ッあ！？」

気がつくと、ヒカリは崖の端まで追いつめられていた。

崖の下まで霧が深く立ち込めていて、その奥をうかがい知ることは出来ない。

落ちたら……たぶん。

「隙ありッ！」

「え？ ちょ、あ……ッ」

トン、と自分の足が地を蹴る感触。

そして同時に重力がヒカリの全身に襲いかかり、今自分の身に何が起きているのか、混乱して何もわからなくなつた。

「ひ、うわ……ッうあああああ！？」

その力に逆らえず、抗えず、ヒカリはそのまま奈落の底へと真っ逆さまに落ちていった……

第一十一話 勘違いの辻斬り少女（後書き）

あ「ねえ～？ ボクの出番ないの？」

夜「うお！？ な、なんで！」
「あてなが？」

あ「だつて退屈なんだもん。前に言つてたオリキャラだけのお話や
らないの？」

夜「考え中だ。鋭意考え中」

今日、ちょっとお祭り行つて少し遅れちゃいました。
申し訳ないです。

PS

鈴村さん、真綾さん、「結婚おめでとうござんなさい」。

末永くお幸せに！

第一一二三話　冥界から地獄

揺れる……

それはまるで波間に揉まれて揺れるように、ぐらり、ぐらりと穏やかなリズムで体が上下している。

目を開けると、薄靄のかかったような空と、何か大きな棒のようなものを持った人影が映つた。

人影がこちらに気づくと手を差し伸べてきた。

「…………う、うん？」

「おお、やつと気づいたか」

やがて視界がハッキリすると、手を差し伸べてきたのが少女だとわかつた。

たつぱりとした着物と、長身に映える鮮やかな紅い髪。そして思わず目を見張るような自己主張の激しい北半球。

「…………

あ、あと五年もすれば私だつてあれくらい……

「いやいや。いきなり船の上に落っこちてきたから驚いたよ。……つて、おいアンタ大丈夫か？ ボケーッとしちまつて」

「…………あわ」

少女に手を振られやつと我に帰つたヒカリは、すぐさま周囲を見回した。向こうに見える岸には、誰が何のために作ったのかわからない小石の塔。

その先にはがらんとしていて何もない殺風景な光景が延々と広がっている。

しかも、今ヒカリは川面を往く船の上にいた。何故自分がここにいるのか状況がわからず、ヒカリは少女に訊ねた。

「あの、ここはどこですか……？」

「ん、ここかい？　ここは三途の川だよ」

「三途の川……？」

それって、たしか死んだ人が行く場所ではなかつただろうか。ヒカリが頭に疑問符を浮かべていると、少女は怪訝そうな表情を浮かべた。

「……おかしいな。死人のはずのアンタがどうして言葉を話すんだ？　おかしいじゃないか」

「へ？　いやあの、そんなこと言われてもそもそも私は死んでないし……？」

「ああ？　こりやあ妙なモン拾っちゃったのかねえ……」

少女は何か困った様子で頬をかきながら呟いた。

「ちよいと、失礼するよ」

「ふえ？」

少女がヒカリと視線を合わせ、その紅色の瞳に一瞬光が映る。

そのまま目を合わせていろいろ、少女の顔がみるみるつむじに青ざめていった。

わなわなと体を震わせやがて後ずさるが、狭い船の上でそんなことをすれば当然終わりは近いわけで、

「お、おわあ！？」

「だ、大丈夫ですか！？」

少女が川に落ちそうになるのを、ヒカリが腕を掴んで引っ張り上げた。

そして少女が大きく息をついて頬杖つきながら言つた。

「ふう。ありがとうよ。しかしこりや一体どうしたことだい？ そんな寿命のヤツ初めて見て……つていうか、まだ寿命も終えてないのに何でここにいるのさ？」

「な、何でつて言われても……」

ヒカリはとりあえず今までの経緯を覚えているかぎり思い出して話した。

願いを聞くための仕事をしているということ。
それで霧に包まれた世界の奥で西行寺幽々子という人物に出会い、
それからその幽々子の友人という人物と成り行きで戦い、結果崖から転落して……

すると少女はお腹を抱えながら大笑いした。

「アツハハハ！ それで冥界から落ちたってか？ ズいぶんドジな話だねえ」

「へえ。あそこ冥界って言うんだ……」

「そ、そんなことも知らなかつたのかい？ つてことはアンタこの辺の人間じゃないんだ」

「えと私は星の子で……」

「星の子お？ そんな妖怪初めて聞いたねえ」

「いやあの、妖怪じやないんですけど……」

「あそуд。まだ名乗つてなかつたね。あたいは死神の小野塚小町。おのづかこまち

この川で死者の魂を運ぶ案内人をやつてるのさ」

「わ、私はヒカリつていいます。へえ、小町さんは死神で死者の魂

を運ぶ案内人ですか」

・・・・!?

死神。死者の魂の案内人。

その言葉を聞いた途端、ヒカリの顔面が一瞬で蒼白になつた。

「し、死神い！？」

「そうだつて言つただろ。そして、今まさにアンタを運んでる真つ
最中つてわけや」

「帰る！」

「は？　お、おい！？　バカよせつてのに！」

脱兎の如く飛び出そとしたヒカリの腕を小町が慌てて掴む。
ヒカリがじたばたと暴れるので船体がぐらつき傾ぐ。

「あ、暴れるなつて！？　ここは三途の川だ、泳いで行こうたつて
すぐに沈んじまうし、対岸まで飛んで行くのなんてのも無理なんだ
ぞ！？」

「いやいやいや！？　まだ死にたくないの～！」

「だから、落ち着けつてのに！　船が、沈むだらうがッ！」

「それも嫌ああ！？」

小町が無理やり押し込みどうにか冷静さを取り戻すと、ヒカリは涙
目になつて小町を見上げた。

「…………」

「お願いだから無茶苦茶は言わないでおくれよ？あたいにこくら
頼んだつて地獄へ向かうことに変わりはないんだからな」

「や、そんな……」

船の上では身動きもできず、ヒカリはがくんと頃垂れてそれきり何もしゃべらなくなってしまった。

「…………まいっただねえ」

死者の魂を運ぶのが仕事の小町だが、今回のように魂も実体もあるまで三途の川に落ちてきたのは初めての事例だった。
といふか、ここには靈体や魂のみの存在しか入れないはずなのにどうしているのだろうか。

そして、もう一つ気になるのは今見た彼女の寿命。

「ありやどうこう」とだい……。どんなに力の強い妖怪でもよくて数千年、あるいは一万年とかつてのもいるが……」

ヒカリの寿命は本当に桁が違つた。

思わず我が目を疑つてひっくり返るほどだ。

小町が今まで見てきた死者の寿命を全て足せばその桁にギリギリ届くかもしれない。

ヒカリの寿命はそれほどまでに、永かつた。

「…………お叱り覚悟で映姫さまのところに報告に行くしかないか。ああ、ついてないねえ。せつかく真面目に仕事しようとしたすりやあこれかい」

船の操作をしながら振り向き、小町はヒカリに言った。

「おこヒカリとやら。ちゅうへり付を取つても、いつナビにこかい？」

「…………」

無言のヒカリに小町はやれやれと溜息した。

「おいおい。そんな世紀末迎えたような顔しなさんな。地獄つてのも案外悪いところじゃないんだよ？ 小つるせに上司をえいなれば静かで居心地のいい最高の……」

「…………」

「…………聞いちやいないね。ま、突然地獄行きなんて決まれば当然か」

精一杯冗句を交えながら努めていったのだが、ヒカリは何も答えないかった。

しかし、この先ヒカリがどなるのか小町にはわからない。

とりあえずやるべきことば、このまま上司のところへ向かって、それこそ白黒ハツキリをせてもらつのだ。

「それまで、のんびり往きますかねえ」

ゆらり、と三面を揺らしながら、小町の操る船は薄靄の向こうへと消えていった。

第一二三話　冥界から地獄（後書き）

パ「ずいぶんオリジナル設定が濃くなつてきてるわねえ」

夜「俺も書いて思つた……」

パ「そういえば、昨日のあとがきに出でた鈴村さんと真綾さんって誰よ？」

夜「ん？ 最近結婚した声優さんだよ」

パ「あなた声優好きなの？」

夜「下野紘を愛していますが何か？」

パ「俗に言つ腐女子つてヤツね」

夜「失礼な。俺は腐つてねえ！」

パ「そこは女子を否定なさい！？」

評価。ポイントがちょこつと上がつてた。
ありがとうございます。

最初に比べたらずいぶんと原作崩壊が目立りますけど、これからも
読んでくれたら嬉しいです。

第一十四話 地獄の果てで

小町に案内されたどり着いたのは、地獄という物騒な場には不釣り合いな絢爛豪華な建物だった。

柱や壁、天井にまで意匠が施されており、まるで貴族が住んでいうな宮殿のようにも見えた。

「ここのが地獄……ホントに？」

「おいおい。何ボケッとしてんだ。こっちだよこっち

「あ、はいはい……ッ」

呆けている間に、小町はどんどん奥へ奥へと進んでいく。その途中、何度も小町と似たような格好の人を見つけて。やはり彼らも死神なのだろうか。
それにしては……

「……死神って、けっこつ普通だなあ」

見た目も特に変わったところはない。

みんな小町同様普通の人間のような姿をしてるし普通に言葉も通じる。

(死神つてこう、カツコイイ着物姿で武器は刀でオサレな戦いをするイメージがあるんだけど……)

「あの、小町さん」

「んん？ なんだい？」

「小町さんに信条つてありますか？」

「信条だつて？ そんなもん考えたこともないよ。つて、いきなり

どうしたんだい？

「え、何でも……」

ヒカリの知っている死神なりこじで、逃げも隠れもするが嘘はつかない、とか言つてくれるんだが。どうもこの世界の死神というのは、ヒカリのイメージとはかけ離れているようだ。

……少し残念だつた。

「ほい、到着つと。わたくし……」ほん

まっすぐ進んで突き当たった場所には他同様に装飾の施された一つの扉があつた。

小町は何故か咳払いをしてからドアノブに手を伸ば、さないで軽く握りこぶしを作つてノックした。

「……同じ轍を踏むあたいじゃなによ

「???

「入りなさい」

やがて、ドア越しからでもよく聞こえる澄んだ声が聞こえてきた。小町が一言告げてから入ると、真正面に座する少女と目が合つた。

「何用ですか小町。それに、彼女は？」

「あたいの仕事中に冥界から降ってきたヒカリつていつヤツです。それで、ちょいと映姫さまに相談に来たというか、何といいますか

……

「……用件は手短に。貴女ほど私は暇じゃないんですから」

「ハッハハ。映姫さまったら冗談キツイですよ。あたいほど善良で

勤勉な死神は滅多にいないじゃ ないですか

映姫と呼ばれている少女の眉が、小町の善良、それから勤勉という言葉の辺りでぴくりと反応する。

「先日の報告書、まだですか？ もう期限を一ヶ月はとつて過ぎていますよ」

「う……」

「それと、前回の魂を運ぶ際に一人三途の川に落としたのを忘れて戻ってきたそうじゃないですか」

「ぐひ……」

「始末書。それから反省文を原稿用紙百枚と指示したはずですが、それを忘れながらも貴女は善良で勤勉な死神だと。そう言いたいのですね」

「そ、それはその……えっと……」

映姫の静かな殺氣のせいか、長身のはずの小町がどんどん小さくなつて見える。

「バン！」と机を叩く小気味いい音と小町の「きやん！」という案外可愛らしい悲鳴が重なった。

「結局貴女はいつもいつも仕事を蔑ろにして ないがし！」

「わー、わー！？ そ、そんなことよつコイツのじとです、じつこの！？」

映姫はふうとため息つくと、頬杖付きながらヒカリの方に視線を動かした。

ダークグリーンのショートヘア。

何やら不思議な紋様の描かれた衣服に、変わった形の帽子。手には、何に使うのかよくわからない棒のようなものを握っている。

「……して、ヒカリさん、でしたか。彼女がどうかしたのですか？」

「見ての通りですよ。冥界から直接落ちたからなのか、魂も実体もくつ付いたままなんですよ」

「魂も実体も……ふむ。これまたずいぶんと特殊なお方のようですね」

「……？」

すると映姫は座していた椅子から下りてヒカリの元へと歩いてきた。そしてポケットから小さな札を取り出すと、それを直接手渡した。

「あの……これは？」

「本来、この地獄に来た魂は外界に出るとは禁じられています。いや、厳密に禁じてはいませんか」

「……？」

「ほん。今回は特例中の特例。貴女をこのから出ることを許可します。これはその許可状です」

「はあ！？　じ、冗談ですよね映姫さま？　そんなこと前代未聞で

……？」

映姫の瞳が細まり小町を見据える。

「特例中の特例、と言ったでしょう。本来なら絶対に私が許可しません。それに、私の役目は死者を裁くこと。死んでもいない者を裁くことは出来ません」

「じゃあ、私は外に戻れるんですね？」

ヒカリの言葉に映姫は口の端を少しだけ上げて頷いた。

「貴女にはまだ、やることがあるのでしょう？　それに、ずいぶん

と珍しい物をお持ちのようで

「珍しい……？」

映姫はヒカリのポシェットを指差しながら言った。

この中に入ってるもので珍しい物なんてあつただろうか。

「死者の魂が跋扈するこの地獄には眩し過ぎる光。それは、人の願いの光でしょうか」

「輝望石のこと……？」

ポシェットから取り出すと、輝望石は淡いミルク色の小さな光を放つていた。

小町が身を乗り出して物珍しそうに輝望石を見つめる。

「ほえ……？ なんだい」「りや？」

「えと、輝望石って言って、人の願いを集める性質をもつ石なんです」

「人の願いを集めることはあるかい？ この石に願えば何か願いが叶うのかい？」

「え？ う、ううん……」

そういうえば、輝望石に直接願われたらどうなるのだろうか。ちゃんと願い事として吸収するのだろうか。

「試してみてもいいかい？」

「へ？ あ、いいんですけど……」

小町は輝望石をひったくりどつかとその場に腰掛ける。それから、あれこれ思案しながらぶつぶつと呟き始めた。

「ありがとよ。つへへ、さあて何を願おうか。有休千年とかどうだい？ もしくはあたいの船の新調なんてのも捨てがたいねえ。……そうだ。いつそ上司の性格を変えてもらおうか。口づるをこ上司つてのはやつぱ苦手で……」

「それを、上司の前で言つとはいい度胸してますね……」

「……あ」

映姫の背後に阿修羅神像が浮かび上がり、その素敵な笑顔からは想像もできないような殺氣が溢れだす。

・

「度々すみません」

「いえ、あの……、小町さんは、大丈夫なんですか？」

部屋の隅で痙攣してゐる小町を指差しながらヒカリが訊ねる。映姫は返り血を拭つてから首を振つた。

「わ。ここに長居は無用でしょ。外へ戻る門へと案内させますので、そちらに向かってください」

「はい。あの、ありがとうございます」

「今回だけ、ですので。次また落ちてきたら容赦なく地獄へ落としますから」

「……あ、気をつけます」

ヒカリは部屋を出ようとして、ふと足を止めて振り返る。

「あの、映姫さまは何かお願い事とかありますか？」
「願い事ですか。……そうですね、強いて言えば」

奥で痙攣してゐる小町を指差しながら、映姫は言つた。

「彼女がもう少し眞面目に働いてくれるようになる」と、ですかね
「じゃあ、今度星に願つてください。私がその願い、きっと届けて
あげますから。じゃあ！」

そう言い残して、ヒカリは映姫の部屋から飛び出して行つた。

「星に願う、ですか。そんなロマンチックなこと、すっかり忘れて
いましたよ。今度機会があれば、外に出て流星でも探してみましょ
うか」

それについても。

映姫はヒカリの姿を、いや、魂を見ていてふとあるものと似ている
と思つた。

「……小町、貴女は彼女を見てどう思いましたか？」
「…………」
「氣絶してゐるフリをしていても無駄ですから。早く答えないといと給料
120%カットしますよ」
「そりやあんまりだあーー？」
「……で、小町は何か氣づきませんでしたか？」
「えつと……何が？」

“どうやら向も氣づいていないらしく。

まあ、これに関しては小町が知らないだけかもしれないが。

「……いえ。気づいていないのなら結構です。さ、貴女は早く始末書と反省文を書いてください」

「ひい～！」

映姫の遠い記憶の中でたった一度だけの出来事。

本当に一度だけ、映姫は天上人の魂というものを見たことがあった。それは一切の淀みない、まっさらで穢れというものを知らない魂。

ヒカリの魂は、まさにそれと似ていた。

純粋で透明な魂。

「……まあ、ただの勘違いかもしぬせんけど」

そもそも、今言つた天上人が天界から地上、ましてや冥界や地獄に降りてくるわけがないのだ。

だからこの考えはくだらない妄想に過ぎない。

映姫は涙目の中を横目にため息をつき、そして机に向かって止めていた事務処理を再開した。

第一十四話 地獄の果てで（後書き）

美「いつもあなたのお話だと、小町さんは四季を問ではなく、映姫さまって言いますよね。何でですか？」

夜「いや、特に理由はないけど……特に固定つてわけでもないし、こっちにしてるだけ」

美「ふうん……」

パ「で、ヒカリの正体って何？」

夜「ここで言えるわけないだろー？」

小ネタで文字数を稼ぎ始めた。

汚い、さすが夜斗は汚い。

「メント、感想、お待ちしております。

第一一十五話 小ちな一步

「うう……、疲れたなあ……」

地獄から帰還したヒカリは、幽々子のお屋敷である白玉楼の一室でひっくり返っていた。

その後、何とか冥界に辿り着き、フランと合流してこの白玉楼で休んでいたらしいと幽々子から誘われヒカリはお言葉に甘えていた。ヒカリを誘拐犯と勘違いした妖夢は、それはもうひたすらに謝罪し続けて、終いには死んで詫びるだと喚いてから幽々子に奢められどづにか落ち着いた。

「もう。妖夢は半人半靈なんだからもう半分死んでるじゃないの」「ですから、もう半分死んでお詫びして……」
「そ、そこまでしなくて結構です……」

地獄からの帰り道。それから妖夢の説得等、色々なことをいつぺんに体験したせいかヒカリはひどく疲れていた。

「ヒカリちゃん……大丈夫?」「だ、大丈夫……」

フランが心配そうに覗きこんできたので、ヒカリは軽く笑つて返事した。

疲れのせいで引きつった笑みしか返せなかつたが。

「元気がない時は、『』飯を食べればいいのよ」

「あ、幽々子さん」

すると、部屋に「一ノ一ノ顔の幽々子がやつてきた。

「迷惑かけちゃったし、お詫びと言つちゃあなんだけビジ」飯」馳走してあげるわ。それで許してちょうだいね？」

「いや、迷惑だなんてとんでもな……」

ふと、ヒカリは自分がいる場所を思い出し言葉を止める。そして脳内で蘇るあの食堂で聞いた村人Aと村人Bの会話。

（きっと毎日が満漢全席なんだうなあ……）

毎日が満漢全席。
毎日が満漢全席。

大事なので復唱する。

「リリは白玉楼つてこいつお屋敷。そして冥界のお姫様つてこいつは恐らく幽々子さんのこと。そして食事……と来ればッ！」
「ひ、ヒカリちゃんがぶつぶつ独り言言つてる……」

「どうする?」「飯食べて

「もういりんですね……」

・

そして食堂へと通されると、一人一つの食膳が用意されていた。それは、いわゆる日本旅館とかでみるような光景だった。
この上に、今から見たこともないような豪華な食事が乗るのかと思

うと涎が止まらない。

「ヒカリちゃんの口から滝が！」

「ち、ちちちち違つよフラン！」「……」これは汗だよ…？

「無理しかないですよその言い逃れ……」

いつの間にか現れていた妖夢に横からツツ「ミミを入れられた。よく見ると、彼女の手の盆には溢れんばかりの料理が乗っていた。

「う、うわあ……！」

それは巨大な魚とエビのような生き物のお造り。

次いで屋敷の侍女が大名行列のように幾度と現れ様々な料理を運んできた。

高級そ�で巨大な何かの肉のステーキ。

あまりに美し過ぎて本当に食べ物なのか怪しいゼリーのよつなもの。例を上げるとキリがなくて、一言で言えばまさしく満漢全席。

……満漢全席つて、何のことか知らないけど。

一通りの食事を運び終えると幽々子がパン、と手を合わせた。

「じゃあ、いただきましょうか」

「はー。じゃあ

『『いただきまーす！』』

神速をも超える速度で箸に手を伸ばし、皿の前にそびえるあつとあらゆる食事に向かつヒカリ。

「つおおおおおおおおおお！」

「は、速い！ ヒカリさんの腕に残像が………？」

「ヒカリちゃんすー」——！」

「……お食事くらい、静かにしましょうね」

とか何とか言いながらも、幽々子は十杯目の茶碗を侍女に渡していった。

食後のデザートの桃を突つついでいると、不意に幽々子はこんなことを言いだした。

「あ、そうそう。ヒカリちゃんつて願いを集めてるって言ってたわよね？」

「はい。——の近くで反応があつたから——までも来たんです。もしかして、何か知ってるんですか？」

「言いそびれちゃつてたんだけそれ、もしかしたら私かなつて思つて」

「へ？」

「いくら妖夢に頼んでもダメだったから、さつきお星様にお祈りしてたの。天界の桃が食べたいなつて」

「天界の桃？」

すると妖夢はハアとため息をついてから、少しだめんどくさそうな顔をして言つた。

「ですから幽々子様、それは天界にしか存在しないもので手に入らないどご説明したじゃないですか」

「だって、食べたいんですけど。天界の桃よ？ きっとこんな小さ

な桃よりも甘美で、とっても美味しいんでしょうねえ……」

楊枝に差した桃をうつとりと見つめながら、幽々子はそっと口に運んだ。

……かれこれ六個目なのだが、いつたいあの体の何処に入るのだろうか。

さつきからヒカリは気になつてしようがない。

「天界の桃……か」

「あら。もしかしてヒカリちゃん、私のお願ひ叶えてくれるのかしら?」

「え、いや、その……ううん。どうなんだろ? 天界なんて何処にあるのかわからぬいし……」

「うふふ。別に本気にしなくてもいいのよ。これは私の我儘なお願いですもの。誰かが叶えてくれなくてもいいのよ」

「でも……」

何だか申し訳ない気持ちになつてヒカリはしゅんと俯いてしまった。私は、本当に願いを集めることしか出来ないのか。集めるだけ、なのか。

誰か一人ぐらい、その願いを叶えることは出来ないものだらうか。例えば、今日の前で笑ってくれている幽々子とか……

「……ヒカリちゃん?」

ヒカリはすつと立ち上がり、幽々子をまっすぐ見据えて言った。

「あの、天界の行き方とか、わかりますか?」

「ひ、ヒカリさん! ? まさかあなた行く氣ですか?」

「本当にいいのよ? 戯言だと思つてくれれば」

「これは私のお仕事ですから、私が決めます。天界の行き方、教えてくれませんか？」

願いを集めただけじゃ、ダメな気がした。
このまま願いを集めて、ただお母さんやお父さんに褒められるだけではいけない気がした。

願いを集め、その先を見たいと思つた。
だから、自分で行動したい。

「……本当にに行くの？」

「はい。突然だけど決めました」

「幽々子様……」

「……じゃあ、教えてあげるわ。天界は、文字通り天の世界。もちろん地べたを走り回つたつて見つからないわ。だから、空を探すのよ」

「空……」

「ここの幻想郷で一番高いところを目指しなさい。そこに、天界へ続く門があるわ」

「幻想郷で一番高い場所……」

「ヒカリちゃん、妖怪の山だよー」

フランの言葉で思い出すあの遙かにそびえる広大な山。
山の頂上へ行けば、天界へと続く門が見つかるかもしれない。

「そうか……うん！　あの、幽々子さん、ありがとうございます！
あなたの願い、私がきっと叶えてみせます！　行く、フラン！」
「うん！　それじゃお姉さん、オバケのお姉ちゃん、バイバイ！」

立ち上がり駆け出した二人は、あつという間に白玉楼の門をくぐつて行つてしまつた。

幽々子がひらひらと手を振りながら見送ると、堪えていた微笑を漏らした。

「ふふふ。まさか本当に来つてくれると思わなかつたわ」「いいのですか？ 例え天界に辿り着いたとしても手に入るわけが……」

残つた桃の欠片を頬張りながら、桃色の唇がそつと開く。

「大丈夫よ。私に降りてきた流れ星ですもの。きっと叶えてくれるわ

「流れ星……ですか？ 普通の女の子のようでしたけど……」

「ふふふ。たまには妖夢も、お星様に何かお願ひしてみたら？」

主の言葉に、妖夢はただただ首を傾げるだけだった。

第一十五話 小さな一步（後書き）

夜「幻想万華鏡を見て感動した……！」

美「でも声は入ってなかつたですよ？」

夜「みゆきちの声など、脳内再生は容易いッ！　他のキャストも夢想夏郷のキャストで脳内再生すれば問題なしッ！」

美「……私はそれ声当てられてなかつたです」

幽々子をまと妖夢の声って、やるとしたら誰なんだろう……？

個人的に、幽々子さま 能登真美子さん

妖夢 渡辺久美子さん ……だとちょっと嬉しい。

でも、どっちもロロロロディスクは別の声が当てられてるんだよなあ

第一十六話 天を目標して（前書き）

今回、やや短めですみませぬ；

第一十六話 天を皿指して

「あ、おはよー」やれこます。ヒカリさ……ッ！？」

朝食用の皿を並べていた咲夜はヒカリの顔を見た瞬間、思わず抱えていた皿を落としちゃった。

「……お、おはよー、『やれこま……す』

田元には真っ黒なクマが出来ており髪はぼわぼわに乱れ、その声にも霸気がない。

三田三晩寝ずに過ごしたらいつなるのだらうか。
と、咲夜が思わず心配になるほど凄まじい形相をしていた。

「あの、ヒカリさん……ですよね？」

「そ、そうです……」

「いつたい何をしたらいちなるんですか……？」

「全然、寝れなくて……」

疲れ果てたまま紅魔館に帰つたのはいいが、あまりに眞界に長居しがちで、過ぎたため、ベッドについた時にはもう朝日が昇り始めていた。
結局、ヒカリは一睡もしていない。

「べ、別にきつちり起きなくともいいんですよ。寝坊したって誰も咎めませんし……」

「やうしたいのは山々なんですけど、習慣のせいで体が、ほとんど勝手に起きちゃつて……はわ……あ！」

ヒカリが大欠伸をしてると、レミコアが寝間着姿のまま現れた。

そしてヒカリの姿を見つけると、とても不快そうに顔をしかめながらややきつめの口調で言つた。

「ちょっと……朝からだらしない恰好でウロウロしないでちょうどいいよ」

「す、すみませふわああ……あう」

「……そうだ咲夜、ヒカリに」コーヒーでも淹れてあげなさいよ。砂糖抜きで

「ですが、それだとヒカリさんは……。はい、わかりました」

そして淹れたての「コーヒーがヒカリの元へと運ばれると、ヒカリはいつも通り咲夜に礼を言つてからカップに口をつけた。口をつけた瞬間、ヒカリの顔が戦慄の色に変わった。

「…………ふ、ぶわあッ！？ ゲホ、ゲツホゲツホ…………！
な、何これ苦あいッ！？ まっずッ？！ い、いんにゃのあらひの
コーヒーじゃ、うえ、けほッ、じつほ…………」

「普通コーヒーは苦いものよ。これで少しは田が覚めたかしり？」

絡みつくような苦みに悶絶するヒカリを見下しながら、レミリアは悪戯っぽく微笑むと自分のカップに口をつけた。

・

「ああ～、もひ……今朝は死にそعدだつたよ……」

「たかがコーヒーくらいで大袈裟ねえ」

・

未だに苦みでヒツヒツする舌を手でおおきながら、ヒカリはパチュ

リーの図書室で本を開いていた。

もちろん、幽々子から聞いた天界への門を調べるためだ。

「妖怪の山に天界に続く門があるだなんてねえ……。初めて聞いたわ」

「（――）の図書室の本でも詳しい情報とかわからないのかな……」

読書用の眼鏡を外しながらパチュリーが言った。

「ううん。そういうのは妖怪の山の神社の方が詳しく知つてそうね」「妖怪の山の神社……？」

前に一度妖怪の山に行つたが、そんなもの山頂にあつただろうか。とはいへ、あの時は文たちとの戦闘に夢中でほとんど何も覚えていなかつたが。

「山頂の方に守矢神社っていう神社があるのよ。そこには一柱の神とそれを祀る巫女がいてね。仲良く暮らしてゐんだそうよ」

「二人の神に、巫女さん一人……」

「もしかしたら地元の彼らの方が詳しいんじゃないかしら。試しに訊いてみるのはどう?」

「ううん……でも、今の妖怪の山はもの凄く警備が厳重で猫の子一匹入るような隙はないですよ。真夜中じゃもつと警備は厳重になるだろうし……」

「そういえばそんなこと新聞に書いてあつたわね。あれ、あなたの仕業だったの」

「ふ、不可抗力というか、何というか……」

あの時は戦わざるを得なかつた。

でないと、フランのことが幻想郷中に知れ渡つてしまつて大変なこ

とになつていたのだ。

「まあ、私はほとんどあの山に行くことなんてないからいいけど。でも、貴女なら別に何の問題もないでしょう?」

「え?」

「え? ジゃないわよ。その能力を使えば、誰の目にも止まらずに移動できるじやない」

「そ、それはそなんですけど……」

移動するのはヒカリだけではない。

必ずフランと一緒に行動しなければならないのだ。

……しかし単独で潜入するのなら、能力を使って逃げながら山頂を目指せば事足りるかもしねれない。

「妖怪の山の山頂……か」

一人で、行つてみようか。

ヒカリは図書室を出て部屋に戻ると、簡単な身支度を整えて妖怪の山へと向かつた。

第一十六話 天を目標して（後書き）

美「これが書き終わつたら、次はどんなお話を書くんですか？」
夜「ん？ い、一応また東方のお話のつもりだけど……」
美「つ、ついに私がメインヒロインにー？」
夜「そんなコトは一言も言つていないが」
美「でも、主人公さんはもう決まつてゐみたいですね。ふむふむ……」
夜「だから勝手に見るなつてのー！」

一応、能力も決まつてますしひロインたちもちやんと決まつてます。

P.S アニメ版のテガミバチを見たら一瞬でハマつたッ！
キヤストにみゆきちに藤村さん、潤ちゃんに岸尾だとおツー？
何という俺得キヤストなんだッ！

ずいぶん長いことジャンプ読んでないけど、まだ連載してゐるのかな?
俺が最後にジャンプ読んだのって、ワンピでHースが死んだところ
なんだよな……w

第一一十七話 眠れる獅子……じゃなくて蛙

「 つと。さて、ここまで来れたけど」

紅魔館を出てまっすぐ北へ向かい、現在ヒカリは妖怪の山の木の上で身を潜めていた。

理由は単純。

目の前を黒い翼の天狗たちが数人の部隊を組んで巡回しているからだ。

「 き、厳しいなあ……」

この場は木々の間に隠れてやり過ごせたが、果たしてこのまま見つからずに進めるだろうか。

今日ヒカリが目指すのは妖怪の山、山頂。
そこにあるという守矢神社を訪ねるため、いつもして厳重警戒の山へと向かつたのだが……

「 A班、異常無し」

「 同じく、こちらG班、異常は無し」

「 ……見つかったら絶対死ぬよね、私」

ぶるっと身を震わせ唾を飲む。

この森林地帯に入る時も何度かやり過ごしたが、全身に走る緊張で嫌な汗ばかり額を滴る。

まあ、能力を使ってしまえば逃げるのは容易い。しかし……

「 うへ、緊張するどいつも足がすくんじゃうんだよな……はあ。……

…よし、今なら

地面に降りて構え、思い切り蹴り上げる。

天狗たちの厳重な警備を掻い潜りながら、ヒカリは山の頂上を目指し斜面を駆け上つて行つた。

「 ッ、と」

田の前に気配を感じ足を止める。

……巡回する天狗の小隊がまたしてもその往く手を阻む。

「 本当に、こんな山の奥に神社なんてあるのかなあ。ちょっと心配になつてきたぞ」

天狗が移動したのを見計らつて再び蹴る。

それを幾度も幾度も繰り返しながら斜面を登つて行くと、やがてヒカリの田の前に大きな石段が見え始めた。

入り口には灰色の鳥居、おそらくこの先がパチュリーが言つていた守矢神社なのだろう。

……それにしても、

「 幻想郷の石段つて、みんな長いよね……」

しかも田の前の石段は長過ぎて雲に隠れるほどだ。

こんな長過ぎる石段、一体誰が昇るというのだろうか。

いつそエスカレーターみたいに勝手に動いてくれればどれだけ楽か。

「 ……ま、動くわけないけどさ」

グッと足を屈伸させ思い切り蹴つて飛び上がる。

石段がぐんぐん眼下に靈み消えていき、やがて石段の先にぼんやりと影が浮かび上がった。

「あれは……」

そこには、巨大な社がそびえたつていた。

博麗神社の倍ほどもありそうな境内に、手前と奥に大小二つの本殿が見える。

境内の入り口には同じく大きな鳥居がそびえており、そこからまっすぐ滑らかな一本道が伸びている。ピン、と静かに張りつめたような空気が、ヒカリを微かに緊張させる。

神社というものが、改めて神聖な場所なのだと思い知られたような気持ちになった。

「博麗神社とは大違ひだな……。ここに、巫女さんと神様が一人いるって言つてたよね」

鳥居をくぐり前へ前へと進んでいく。

本殿の正面に立つと、その見た目よりも大きく感じる社の様にヒカリは少し怯んでしまった。

流石は、二人の神を崇めている神社と言つたところか。

「う、めんくださーい……」

ヒカリの声は張りつめた空気を虚しく震わせただけだった。

返事は……ない。留守なのだろうか。

違ひだ

「……うう、さつきから凄く緊張するなあ。ホント、博麗神社と大

あつちはもつとこづ、緩い空氣だ。

誰でも気軽に入っていけそうな、隔たりとかが無いような気がする。だが、この守矢神社というのは少し、いやかなり違っていた。

「そ、そうだ。お賽銭入れなきや。神社に来たらお賽銭を入れるのが常識だもんね」

張りつめた緊張を振り払おうと、少し意気込みながらヒカリは賽銭箱を目指し歩きだして、止めた。
理由は至極単純。

「お賽銭箱……どこ?」

田の前の本殿正面には何も置いていないし、近くにそれらしきものも見当たらない。

普通、目立つ場所にあるようなものだが……
ヒカリは境内を歩きながら賽銭箱を探すため歩きだした。
玉砂利を踏みしめる音が境内に響き渡る。
しばらく探したのだが、結局賽銭箱は見つからなかつた。

「はあ。ちょっと休憩つと

足を休ませるため、ヒカリは社の縁側で腰を落ち着かせた。
それほど長く歩いていたわけではないのだが、妖怪の山で能力を使つたり、石段を無視して飛んだせいか少し疲れていた。
思わず欠伸が出来てしまい涙が浮かぶ。

「…………すう

「…………? 何か、聞こえる?」

それは子供の寝息のようだった。

ヒカリが振り返つてみると、畳の上に猫みたいに丸くなつた一人の少女がいた。

昼寝中らしく、気持ちのよさそつた寝息をたてている。
どうやら彼女の寝息のようだ。

ヒカリよりも小さなその少女は、少女の頭よりやや大きめな、目のついた不思議な帽子を被りながら眠つていた。
少女が瞳を閉じているのと同じく、何故か帽子まで瞳を閉じている。

「……もしかして、この子が巫女さんかな」

どんなに羶膚ひじきあ田に見ても、流石に彼女が神だとは到底思えなかつた。
神と言つたら、恐らくもつと威厳に満ち溢れたものだらう。
今彼女には、威厳どころか何も感じない。

昼寝中の子猫のような無防備な横顔には、涎がべつとついていた。

「こそこそいのに巫女さんなんてやつてるんだ。偉いなあ……」

何となく、ヒカリは悪戯したくなつて彼女の傍に近づいた。
相変わらず可愛らしい寝息を立てている少女の頬を、人さし指で、

ふにつ

「あ、あう……」

少女は小さく呻き、口元を「こすりこすり」とせながら反対方向に寝がえりをうつた。

「ち、ちよつと可愛いかも……」

面白くなつたヒカリは同じく反対方向に回り込んで指を少女の頬に、

ふにつ

すると少女はまたしても反対方向に寝返りをうつ。
そして再びヒカリが回り込んで、

ふにつ

またまた寝返りする少女。
三度回り込むヒカリが、

ふにつ

……以下略。

「く、くふふ……ッ。この子、面白いなあ。どつかの巫女さんもこのぐらゐ可愛げがあればいいのにね~へへ~」

ふにつ

ぱち

「……いツ?」

ヒカリの指を頬に当たたその瞬間、何故か帽子と目が合つた。
ぎょりり、と丸い目玉に見据えられ、思わずヒカリは体を硬直させ
身構える。

「な、ななな何だ何だ！？」

「…………私の昏睡中に、よくもまあ好き放題やつてくれたね……」

むくじと少女の体が起き上がるごと、畳の跡がついたままの顔でヒ力
りを睨みつけてきた。

「…………や、いれは、その…………」

おかしい。

声は確かに見た田通りの子供のようなやんちゃで高めの声なの、
その小さな体からは今まで経験したことが無いような殺氣をひしひ
しと感じむ。

少女は口の端を一マット不気味に吊り上げた。

「ふ、ふふふ……。土着神の頂点に立つこの私に悪戯だなんて、隨
分と勇氣があるじやない。……いいわ。ちやあんとお返ししてあげ
る」

「！」これはその、出来心とこつか何と言つか……って、ヒイッ！
？」「

言いかけるヒカリの頬を何かが鋭くかすめ、赤い雪が零れる。
いつの間にか少女の手には、丸い形をした刃を握りしめていた。

「ち……チャクラム！？」

「覚悟はいいかしら。無礼な参拝者サン！」

少女は笑顔なのにその田には殺る気満々で、笑みなんてこれっぽ
ちも映つていなかつた。

第一一十七話 眠れる獅子……じやなくて蛙（後書き）

夜「“萌え”が足りないッ！」

パ「ついに貴方もキチガイになつたのね」

夜「よくもこんなキチガイレコードをつて違つわッ！　このお話に足りないモノは“萌え”だと氣づいたんだッ！」

パ「……で？」

夜「つまり、次回作はもつとそういう要素を強めでいくッ！」

パ「あやと」わねえ……」

次の主人公は番台です。

……」の字であつてたつけ？

第一十八話 壮絶な神遊び

境内に激しい爆音と金属音が同時に鳴り響く。突如勃発した弾幕により、一変して守矢神社は戦場へと化した。

「ほらほらあッ！」

少女の投げつけるチャクラムを回避しながら、ヒカリは半分泣きべそをかいていた。

「うう……。どうしてこうなるのさ。ちょっととした悪戯だったのに！」

「神様に悪戯するなんていい度胸してるよホント。そおらッ！」
「か、神様だなんて知らなかつたんだよおー！」

鋭く弧を描いて襲いかかるチャ克拉ムと、広範囲に及ぶ光弾による波状攻撃。

いくらヒカリが速く動けても、反撃に転じることが出来なければただ防戦一方なだけだ。

「だから、話を聞いてくださいよ！　私は緋彗ヒカリって言つて、天界に行ける門を探しにここまで」

「そういえば私も名乗つてなかつたね。私は洩矢諏訪子って言つんだ。さ、名乗り終えたことだし神遊びを続けようか！」
「だあ～もうッ！　結局みんな聞いてくれないんだから～！」

境内を走り回りながら、ヒカリは諏訪子と名乗つた少女を横目で観察していた。

無尽蔵に放たれる光弾、チャクラムを巧みに操りヒカリの隙を突く鋭い一撃。

しかし、あの小さな体の『』にそんな力があるのだろうか。神通力といつやつだらうか。だとしたら、このまま逃げ続けていても埒が明かないかもしれない。

「せえ……んのツー！」

振り返つて低く構え一気に加速。

諏訪子の田の前まで迫ると、その表情に微かな動搖が見られた。

「うわ！ な、いきなり突っ込んできた！？」

「『』なつたら速攻かけて倒すッ。瞬符『光陰矢の如し』…」

至近距離で放たれる神速の矢は諏訪子の体を捉え、そのまままつすぐ社の壁に叩きつけられる。

「くッ！ 速過ぎて、避けられなかつた……？」

「『』のままッ、迅符『マツハ・ストレイト』…」

動きを封じた諏訪子に渾身の右ストレートを見舞う。しかし、ヒカリが拳を突き出した瞬間、既に諏訪子の姿が消えていた。

そのまま壁を貫き派手な大穴を開けてしまった。

「……な

「速いねえ。けど、ちょっと威力が弱過ぎるかな」

いつの間にか諏訪子は屋根の上に飛び移つており、不敵な笑顔を浮かべながらヒカリを見降ろしていた。

「今のが決まれば勝ちだつたのに……」

「そんな簡単に神様を倒せるとでも思つてたの？ ふふふ。見くびつてもらひちや困るなあ」

「やっぱ、神様は強いな……。さて、どうじょうか」

「まだ勝てる氣でいるみたいだね。じゃあ、ちょっとだけ本気を見せてあげようかな」

諏訪子の手に光る一枚の符。

それが術符と氣づくのにそれほどの時間は有さなかつた。

「鉄輪『ミシカルリング』」

諏訪子の両手に集まる光弾は、彼女の武器であるチャクラムのよう
に丸い形を作り、その手の上でぐるぐると回転し始める。
そして諏訪子はそれをヒカリに田がけて、投げた。

「 ッ！」

地を這いながら襲いかかる輪の形をした光弾を、ヒカリはすんでの
ところで躱す。

光弾はそのまままっすぐ走り抜け、神社の鳥居を跡形もなく破壊し
てしまつた。

「あ……」

諏訪子は思わずやつちました！ といふ表情を浮かべていたが、ヒ
カリはそのあまりの威力に蒼白した。

「……当たつたら、本当に死んじゃうな

「うわあ、どうじよ。神奈子や早苗に怒りやぢや……あうう
「い、こうなつたら……」

ヒカリはそつとポショットに手を伸ばし、長らく使わなかつた一枚の白い術符を取り出した。

いや、使わなかつた、という言い方は正しくないかもしない。
この術符は、ヒカリが物心ついた時から持つていたものなのだが、
何故か未だに使いこなせずにいる一枚だ。

制御できない術符。

それはほとんど、暴走といつてもいい。

でも、威力だけならどの術符よりも格段に上。

使つか……

「ない……よね」

「また何かやううとしてるな。その前に終わらせてやるんだから

諏訪子がまた別の術符を握りしめながら猛進。

ヒカリはグッと力を込めて地面を蹴つ飛ばすと、斜め後方に飛び上
がり白い術符を発動させる。

太陽にも似た閃光がヒカリを包みこむとその両手の先に一気に集束
させる。

あまりの熱さに、ヒカリは顔を苦悶に歪めた。

「『瞬光』せつなさみだれうち」

そしてヒカリの両手から放たれる、暴風雨にも似た光弾の嵐。
今まで使つていた光弾の倍の威力の弾幕が一瞬のうちに諏訪子曰く
「へへ。そんな速いだけの弾幕なら避け

着弾した弾幕が起こした爆風に、諏訪子の姿と声が一瞬で消え失せる。

白煙と光弾は止むことなく諏訪子に襲いかかり、やがてそれは神社の境内全体に放射状に広がつていく。

「ツ、威力が強過ぎてコントロールできない……！」

両手の中で暴れまわる力を自身の精神力と気合だけでどうにか抑えてはいるが、どうしても上手く操れない。

ヒカリの弾幕は止まるることを知らず、ただ無差別に広がり神社を破壊させていく。

やがて、ヒカリの手の平の力が消え弾幕が収まった。ヒカリは境内に着地して、その惨状に頬をかきながらため息をついた。

「…………死刑、決定かな」

山積みになつた瓦礫。

崩壊する境内。

そして目の前でひっくり返る諏訪子の姿。

どう見ても、ヒカリが守矢神社を襲撃したようにしか見えない。

ガサ……バキッ

不意に瓦礫の山がもぞもぞと動き出したかと思うと、諏訪子の顔が飛び出した。

「ふはあ！ いやあ、強いじゃないの君。私気に入っちゃつたよ

八八八

「『J』、『J』、『J』、『J』、『J』めんなさい！　あの、えと、この術符は制御できなくて、だけど最終兵器というか何といつか……」

狼狽えるヒカリに、何故か諏訪子は上機嫌な様子でうんうんと頷き、そのまま機嫌よくヒカリの肩をバツシバツシと叩いて笑つた。

「ハハハ。いいのよ。これは“神遊び”なんだから。気軽なお遊び

「そ、ですか。は、ハハハ……、ツおうー?」

ぐい、と首を引っ張られ諏訪子に前屈みにさせられると、何故か諏訪子は神妙な面持ちでこそっと耳打ちしてきた。

「その……」これは“神遊び”。遊びだからね。遊びってのは無邪気なものだよね。だから、その、神社の鳥居を壊したり、社が崩壊してのも、事故つてことでいいよね……？」

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

思い切り首を絞められ、そこから先の言葉が出ない。

「くれぐれも、他の一人が帰つてきて事情を聞かれて、答えない

「わや、わやー。く、勘わー。ドレタル」

パツと手を放され、ヒカリはどうにか息を落ち着かせる。 目の前を歩く諏訪子はとても楽しそうで、一パツと笑いながら

「いやあ、それにしても派手にやつちやつたねえ。神奈子に知られたら大変だよ。留守を任せたつてのに神社がこの様じや顔向けが出来ないつたらありやしない」

「そ、そうですね…………ツツー！」

その瞬間、ヒカリの顔が凍りついたのを不審に思つた諏訪子が首を傾げた。

「あれ？ どうしたのさ」

「…………（かくかく、ふるふる）」

小刻みに震えるヒカリを見て諏訪子はますます首を傾げる。その表情は、何かに怯えているような顔をしていた。
さながら彼女の田の前に、鬼神か悪魔でもいるかのような。

「そんな顔してどうしたのや。ここにそんな凶暴な妖怪はいないよ？」
「いるとしたらおつかない蛇みたいなおばさんか……」

「おつかない蛇みたいなおばさんか。それは是非ともお田にかかりたいものだなあ諏訪子」

「…………」

かくかくと、油の切れた機械のよつなぎこちない動作で諏訪子が振り向く。

頭から角は生やしてはいなかつたが、そこにはたしかに鬼がいた。
いや、彼女は神なのだから……

「あ、あにゅああああああああああー！？」

鬼神、が正しいか。

第一十八話 壮絶な神遊び（後書き）

パ「一つ、いいかしら」

夜「何？」

パ「彼女の『せつなさみだれうち』って、どう区切るの？」
美「『せつな・さみだれうち』？ それとも『せつなさ・みだれう
ち』？」

夜「ん？ それは……元ネタわかる人だけニヤニヤしててください
な」

わかる人にはわかるネタです。

いつも読んでくださる方々、ありがとうございます。

第一十九話 天界への階

「……諏訪子が迷惑かけたようすはない。怪我はないか?」

守矢神社に残つた小さな社の中。

そうヒカリに優しく声をかけたのは、先刻諏訪子の背後に立つていた鬼神……ではなく、少女。

しかし少女は、胸に大きな鏡が輝いていたり、背には背丈と同じかそれ以上の大きさの注連縄を背負つていて、ひどく変わつた格好をしていた。

微かに細める瞳と、凛と響くその声。

そして少女に漂う不思議な威圧感と存在感。

「えと……あ、あなたが、ここのもつ一人の神様ですか?」

少女は「ぐ、と頷いた。

「八坂神奈子やさかかなだ。好きに呼んでくれてかまわないよ。君も、少し緊張を解いてはどうかな」

「は、はい……」

神奈子に促され足を崩す。

すると、別室から白と青の巫女服姿の少女が戸口から顔を覗かせてきた。

「神奈子様、お茶のい用意が」

「ありがとう、早苗」

早苗と呼ばれた少女は、おずおずといつた感じで部屋に入り、神奈

子とヒカリに給仕してから部屋を静かに退室していった。

神社という和風な場に似合わないガラスのコップには冷茶が注がれていて、白く透き通った氷がゆらゆらと揺れている。

「い、いただき、ます」

「そんな緊張しなくてもいいというのに。律儀な子だな」

神奈子はそう言って笑つて見せたが、正直今のヒカリにそんな余裕はなかつた。

成り行きとはいえ神社を半壊させ、あまつさえ奉る神と対峙し倒してしまつたのだ。

流石にヒカリはそんな無神経な性格ではない。

震える手でコップを掴み、ちびちびと冷茶を飲む。

「さて……。ヒカリと言つたね。君は天界へ続く門を探している。そう言つたね」

神奈子の瞳にヒカリが映る。

口に残つていた冷茶を飲みこんでからヒカリは答えた。

「は、はい。妖怪の山の頂上に、天界へと続く門があると聞いてここまでやつてきたんです」

「ふむ……。そういうえば、神社の裏手の奥の方にそんなものがあつたような気がするが……」

「ほ、ホントですか！？」

思わず身を乗り出したヒカリに、神奈子の瞳がスッと細まる。

「何用で天界に？ 其処は観光や何かで行くところじゃないぞ」

「願いを、叶えるためです」

「……願い？」

瞳が再び細められる。

その瞳に映る色は奇異か好奇心なのか、それとも両方なのか。そんな神奈子の目をまっすぐ見据えながら、ヒカリは言った。

「私、幻想郷で願いを集めるお仕事をします。だけど、やつているうちに、ただ願いを集めてるだけじゃいけない気がして……」
「…………」

神奈子の眉が微かに上がる。

「ただ願いを集めて、そのまま帰るだけじゃいけない気がしたんです。どうしてか、わからないけど……。その、だから、自分で叶えられる願いなら、自分の手で叶えてあげたいと思って、それで……」
「…………」

その時、神奈子は驚き目を見開いた。

ヒカリの髪が、服が、身体が、うつすらと何かに呼応するかのように黄金色に輝きだしたのだ。

夜空を瞬くような、神々しい小さな輝き。

神奈子はフッと笑みを浮かべて背もたれに背中を預けた。

「ふふ。不思議な参拝客だ。諏訪子が本気を出してしまったのも頷

ける」

「ふえ？」

間抜けな声と共に全身を包んでいた儂い光が消える。
どうやら自覚もないようだ。

「わかつた。天界の門への場所を教えてあげよ。地図を書いたらいいのかな？」

「い、いいんですか？ ありがとうございます！」

ヒカリは地に伏せて頭を垂れて謝辞を述べたが、神奈子には思いつきり笑われた。

「よしてくれ。私はそんな堅苦しい存在ではないんだから」「で、でも神様ですよね？ 神様って言つたらもつとこう……」「もつと気軽に接してくれた方が私は楽だがね。親しみやすければ、信仰も得やすいだろ？」「

「そんなもんなのかなあ……？」

「八百万も神はいるんだ。親しみやすい神だつているのさ」「ふうん……」

神にも十人十色といふことらしい。

妙な納得をしたヒカリは、ふと気になつたことを神奈子に訊ねた。

「あの、諭訪子さまは？」

「社の修繕をさせているよ。何、君が負い目を感じる」とはないのだから気にするな

「いや、でも……」

そんなことを言われても、神社を半壊させたのはほとんど私なのだ
が。

……少し、手伝つてから帰つ。

「それで、天界への門の道はわかつたわけね」

紅魔館、パチュリーの図書室。

守矢神社から帰ったヒカリは夕食後、パチュリーに事の顛末を報告していた。

「うん。だから、今日早速天界へ行つてみます」

「土産話、期待しているわ。私じゃ行けそうにないもの」

「そんなことないですよ。調子のいい時にまた行けばいいんです」

「ありがと。じゃ、今日も頑張つて」

「はい」

自室に戻つて支度。

ふと、フランのことが頭を過ぎつた。

「……天界に連れて行つて大丈夫なのかな」

天界とは、天人と呼ばれる者が住むとされる桃源郷。あらゆる修行や苦行を乗り越えた者だけが相応しい神聖な世界。人々は毎日平穏に暮らし、日夜酒を飲み交わしたり、歌つて踊つたりしているんだとか。

当然危険のない、絶対の安全が約束されている場所。

……そんな中に、フランを連れて行つて大丈夫なのだろうか。また何か騒動が起きてしまつたら、今度こそお終いだ。

「ヒカリちゃん！」

「うおわー!?」

背中からフランに抱きつかれ、前のめりにつんのめる。

フランはヒカリの横つ腹に頬をすりすり寄せながら上田づかいに見上げてきた。

「今日は何処行くの？」
「んど、今日は天界に……」
「天界？ それって何処？」
「前に幽々子さんと話をしてたでしょ。空の上有る世界だって」「お空の上……」

フランの顔が好奇心に輝き、その瞳がいつにも増して煌めいていた。

「行く！ 私も絶対行く！」
「う、ううん……。だけど、今回はどうし……」
「行くの！ 絶対絶対行くんだからー。」「わ、わかったわかった」

まあ、問題さえ起こさなければ大丈夫だらう。
抱きつくフランの頭を撫でながら、ヒカリは軽くため息をついた。

守矢神社裏手、妖怪の山の奥に出来た小さな盆地。
そこに、冥界へ入る時に見た門とそっくりの巨大な門があった。
冥界の門と違つて、こちらには温かな光が差し込んでいる。
その先に、白い階段のようなものが高く高く伸びていた。

「……じゃあ、行こうか。フラン」「うん！ 空の上つてどんな風になつてるだろ？ 楽しみッ」

「うん、そうだね。……あれ」

ポシェットの奥の輝望石が反応している。

何故か輝望石は、天界の門の奥を示していた。

「天界の人？……何を願っているんだろう？」

「ヒカリちゃん、早く行こッ」

「わ、わかった」

フランの引っ張られながら、ヒカリは先の見えない階段を上り始めた。

第一十九話 天界への階（後書き）

特に今日は無し。
次回もお楽しみに。

第三十話 畫の中の畫

長い、長い階段だった。

大理石のように硬く滑らかな、しかしそれでいて踏みしめると跳ね返るふわりとした何とも不思議な感触の階段。

「……何だか、おかしな感じだ」

階段の下はもぢろん妖怪の山。

高度は……高過ぎて考えたくもないが、あれだけ大きくそびえていた妖怪の山が豆粒のようだから高さは相当なはず。

「たつかいねヒカリちゃん！ 落ちたらどうなつかうのかな？」

無邪気なフランの笑い声。

しかし、そんな高い場所にいるといつに恐怖を全く感じないのは何故なのだろうか。

いくら星の子と言えどこの高さを生身で落ちはば即死だろ？

「それにしても、なつがに階段だなあ……。どれくらい上ったんだ
わ！」

行けども行けども終わりの見えないその階段。

最初の内はそれでも楽しかったのだが、いつも長いと流石に飽きる。延々と同じ色の階段を上るだけ。

景色も、あまりに高過ぎて変わっているんだか変わっていないんだかよくわからない。

上りつかれたヒカリは、フランの手を離してペたりと階段に腰掛けた。

「はあ、……。ちょっと休憩」

「うん。わかつたよ」

フランもヒカリの傍にちゃんと腰をかける。

くつついたフランの体温が、ほんのりと伝わってきてちょっと心地よい。

「！」の階段を過ぎ……。ビルまで続いて

ぐ、ぐぐぐぐぐ……

ヒカリのお腹が小さな音を立てた。

突然の腹の虫に驚き、フランはケラケラと笑いだしヒカリは赤面しながら乾いた笑いを浮かべた。

「は、ハハハ……。なんか、お腹空いたな」

「じゃあじゃあ、フランがいいものあげる」

「いいもの……？」

そう言つてフランは自分のポケットに手を突っ込んで、小さな包み紙を取り出す。

中にはビスケットがちよづけ三枚入っていた。

「今日のおやつを、ちょっとだけ持つてきたの。はい、ヒカリちゃん

ん

「え、いこの？」

「いいよー。」

「……えへへ。ありがと」

「……と差し出されたビスケットを受け取り一口かじる。

サクッと軽い食感と、甘いバターの香りが口いっぱいに広がっていく。

フランのくれたビスケットは、ヒカリの空腹をほんの少しだが優しく満たしてくれた。

フランも何処となく嬉しそうな顔をしていた。

「じゃあ、私も何かお返ししないとね。ううん、何かあったかな……」

ポシホットの奥を「じそじそ」探つてみると指先に何かが「ツン」と当たった。

取り出してみるとそれは小さな小瓶で中には乾燥した果物のようなもののが入っていた。

「……氣の利かないポシホットだなあ」

「何これ？ 赤い……しなびたイチゴ？」

「か、乾燥してるだけ。ドライフルーツって言えば多少聞こえはいいんだけど……」

栓を抜いて中から取り出す。

「……正直ヒカリはこれが苦手だ。

幻想郷へ出かけるときに入れた覚えはないし、恐らく母親の仕業だろう。

「日持ちは半永久的……。日持ちは、だけど

「食べれるの？」

「一応……」

「じゃあいただきます！」

「わ、ちょっと待ったフラン

乾燥したイチゴ(?)を口に放り込んで数秒後、フランの瞳に涙が滲み始めるとき元がきゅっと結ばれた。

「し、しゅっぱっ！」

「うん……。何でか知らないけど、コレ滅茶苦茶酸っぱいんだよねえ……」

「お、お水とかない？」

「あ、それぐらいなら……」

ヒカリが水筒を差し出すと一気に飲み干してしまった。

「う、ごめんね。大したもののが無くて」

「いいよー、えと、うん。美味しかった！」

「無理しなくてもいいのに……」

ぐ、くうう……

今度はフランの方から聞こえた。

フランは恥ずかしそうに頬を赤らめながらヒカリの方を見て言った。

「……あはは。食べたら余計にお腹空いたやつた……かも」「ならフラン、ここにビスケットあるから食べなよ」

「うそ。……あ」

フランがもう一枚ビスケットを食べようと手を伸ばし、止めた。

残るビスケットは一枚。

フランはヒカリの顔色をつかがづつ見上げて、ついに上田づかいに見上げてきて、

「さ、最後の一 個どうする？」

「ん。私はもういいから、フランが食べなよ」

そう笑つて答えた。

しかし、何故かフランは不満そつた顔をしてビスケットとヒカリを交互に見比べた。

「……うん」

すると、フランはビスケットをちょうど半分になるよう真ん中でパキッと割つてしまつた。

そして割れた破片をよく見比べ、大きい方をヒカリに差し出す。

「はい、半分こー！」

「いや、でも私はもういいから」

「半分こー！」

「……うん、じゃあ貰うね」

半分に割れたビスケットしばらく見つめてから、ヒカリはフランと一緒にビスケットを頬張つた。

ビスケットを食べ終え元気も回復し一人は再び歩き出す。
相変わらず景色はほとんど一緒だったが、少しずつだが変化も見え始めた。

「風が……出てきたね」

階段の周囲から吹き付ける強い風。

風はやがて雲をかき集め、ヒカリたちの視界を奪う。
集まつた雲はやがて「じろじろ」と不穏な音を立て黒く染まつていぐ。
二人は足を止めて背中合わせに身構えた。

「……誰か、いるよね」

「…………」

微かに感じる水の匂い、そして誰かに見られているような視線。雲に隠れてよくは分からぬが、この奥に何かが存在しているのは確かだつた。

いつの間にかフランはレー・ヴァテインを握つていて、ヒカリもそれに合わせてブリューナクを取り出した。

「総領娘様に言われて様子を見に来たら、いつこうことでしたか」

雲の向こうから、鈴の音のような綺麗な声が響く。そして雷鳴が轟き暗雲が引き裂かれると、そこに一人の少女が空中を浮遊していた。

天女のような羽衣に身を包んだ少女が、ヒカリとフランを見据える。

「では、少しお相手願えますか？ こちらもそう命じられているもので」

「命じられてるって……？ あなた、何者なの！」

「これは失礼しました。永江衣玖と申します。此度は、総領娘様からの命により馳せ参じたという次第です」

「総領娘……？」

「お前、邪魔！ どつか行っちゃえ！」

フランが敵意を剥き出しにして衣玖と名乗った少女に吠える。すると衣玖は、困ったような表情を浮かべて頬に手を当てた。

「すみません。総領娘様の命なので私も簡単には引き下がれないんです。では、お相手願いましょうか」

衣玖の手に小さな雷球が集うと、周りの雲も呼応して雷鳴を起こす。次の瞬間、ヒカリたちのいた場所に蒼白い雷が降り注ぐ。

「……ふむ。避けられましたか」

が、ヒカリとフランは瞬時に左右に展開し雷撃を回避していた。

「もしかして、侵入者を排除する門番かなあの人」

「……許さない」

「フラン、……ツ！」

フランの全身に漂う、鮮血のように紅いオーラ。

その姿を見た瞬間、ヒカリの背筋にゾッと悪寒が走った。

「ふ、フラン、……ツ！」

その眼は紅く光り、その貌には激昂に歪んでいた。

レーヴィアテインを握る手が、力チカチと音を立てながら震えている。次の瞬間、フランの姿が消えた。

それは刹那を往くヒカリの動体視力でさえ追いつけない、想像を絶するような速度。

「あああああああああああッ！！」

「ツー！」

衣玖の真横をかすめる紅の一撃。

間一髪身をよじって躲したものの、衣玖の表情は戦慄に凍りついていた。

「い、今のは何！？ 速過ぎて、何も判らなかつた！？」

「私より速かつた……！？ だ、ダメだよフラン！？」

「……ツ！！」

衣玖の背後を舞う深紅の姿。

レー・ヴァ・テインをまつすぐ振り上げ、フランが雄叫びをあげながら猪突猛進に襲いかかる。

衣玖はすんでのところで羽衣を高速回転させレー・ヴァ・テインを弾く。ガシャン！ と金属と金属とが激しくぶつかり合つのような音がして、衣玖とフランは互いに反対方向に吹き飛ばされた。

「！」のままじやあの人があ……、フランッ！ フラ……ツ！」

ヒカリの声が届かないのか、フランは全く反応を見せず衣玖の上空から見下ろしている。

陰になつて見えないフランの顔が、ニイツと愉しそうに歪んだ。

「禁忌『フォーオブカインド』」

フランの術符が発動し、その効果で四人に分身すると一斉にレー・ヴァ・テインを振り下ろす。

激しい剣圧と光弾が、衣玖目がけてまつすぐ注ぐ。

「……ツ！？」

光弾が爆ぜ周囲を白煙が包む。

衣玖の姿は、跡形もなく消え失せていた。

「……クスツ、クスクス……」

「フラン！ 私の声、聞こえてないの…？」

怪我をした衣玖を抱えたまま、ヒカリが叫ぶ。フランの弾幕が襲いかかるその刹那、ヒカリは能力を使って強引に衣玖を捕まえ離脱していた。

衣玖は光速移動とフランの攻撃のせいで氣を失っていた。階段の端に衣玖を静かに横たわらせるど、ヒカリはフランの正面に飛んだ。

「フラン！ やり過ぎだよ！ 一步間違えてたら、あの人死んでた

！」

「……」

紅い双眸が、ちらとヒカリを映す。

白金の髪、純白のローブに小さなポショット。

狂気に駆られたフランの脳裏に過ぎる、大切な何か。

何か。

……何か？

……それは、何だ？

「……」

虚ろな紅い眼が揺らぐ。
震える。

手についていたレーザー・テインが消え、フランの瞳にいつもの、無垢な光が戻る。

そして、閉じた。

「あ……」
「フラン…」

そのまま真っ逆さまに落ちるフランに手を伸ばし、抱き寄せる。フランはヒカリの腕の中で、氣を失っていた。

「何、何なの？ フラン、ビックリかけつけて……」

「なかなか凄いお客わんじやない。ビックリしたわ
「ツ！？ だ、誰！」

ヒカリが振り返ると、そこには倒れていたはずの衣玖と、その横で仁王立ちする少女の姿があった。

長い蒼の髪が、風に乗つてふわりと揺れる。

上品なその出で立ち、恐らく彼女が衣玖の言つていた総領娘に違いない。

「いい暇潰しが出来そうで嬉しいわ。さ、そんなところでボサッとしてないでこっちに来なさいよ。手当ぐらにしてあげるからさ」「ひ、暇潰しつてあなた誰！」

「比那名居天子。そんなこといいからさつさと来なさいよ。この私が手当してあげるって言つてんだから」

「手当も何も、ここはただの階段で」

「まだ気づかないの？」

「え……？」

天子はやれやれと言つた具合でため息をつくと、雲の向こうにツカツカと進んでいつてしまつた。

強い風が雲を吹き飛ばし、天子の進んだ先には大きな門扉がそびえていた。

「歓迎するつもりはないけど、ようこそ天界へ。わかつたらさつさ

「おおなさいよ」

音も立てずに大きな門が開く。

その先には、ヒカリも見たことが無いような雅で煌びやかな建物が所狭しと立ち並んでいた。

第三十話 畫の中の畫（後書き）

パ「……何か言つ」とは？」

夜「どうしてこいつなつた」

弾幕ごつこが本格化したら、こんな感じになるといつとひでえなこりや……

原作壊してるとか嫌疑をかけられても文句は言えん。だから閲覧者数にムラがあるのだろうか？

ううむ……

PS

三ツ矢サイダー塩、すゞく微妙ですよねえ……？

そんな俺が最近飲みまくつてるのはセブンアップクリアドライ（だつけ？）

ほぼ毎日一本飲んでる気がする……w

シユタゲの影響もあつてか、ドクペもよく飲みますよんり

第三十一話 微かな面影

窓の外に広がる、絢爛豪華な世界。煌びやかな装飾の施された建物は、太陽の光りを浴びてその輝きをいつそう強く増していた。

ヒカリが今いるのは、天子に案内され連れて来られたとある一室。内装も外同様に豪奢で、思わず目がくらむほどに金や銀といった色で包まれていた。

窓から視線を反らし後ろを振り向く。

部屋の中央、天蓋が備え付けられたベッドの上でフランは静かに眠つていた。

「…………」

そつと、白い頬を撫ぜる。

手に伝わる生氣を失つたような冷たさ。

ヒカリの視界が、滲んでぼやける。

「死んで、ないよね？ 吸血鬼だもの、死ぬわけないよね？」

「大丈夫ですよ。氣を失っているだけですから」

「……あ、うわ！」

部屋の戸口に、いつの間にか衣玖が立つていてヒカリの方を見ていた。

涙ぐんでいたのが恥ずかしくて顔をそむける。

顔を拭つてから振り向くと、優しく微笑む衣玖の笑顔が見えた。

「彼女ることは私にお任せください。総領娘様からもそう託つていますし」

「いや、でも……」

「心配なく。別に取つて喰つたりはしませんから。……まあ、その実ほとんど手当も必要ないでしううけど」

「…………」

「そうだ、ヒカリさんはしばらく外を散策してみてはどうですか？多少の気分転換にはなるかと」

「……はい。じゃあ、少しだけ」

ここにいても邪魔になるだけだろう。

ヒカリは最低限の荷物だけ持つて部屋を出ようととした。

「…………？」

ふと、衣玖の姿を見てヒカリは首を傾げた。

「あの、衣玖さん、さつきの攻撃で服が……？」

「ふふ。こちらの天衣は特別製で、多少の傷なら直っちゃうんですよ」

「へえ……すごいなあ」

「出口は突き当たりを左です。何かあればこちらから」連絡いたしますので」

「わかりました」

そういうえば、私の服もそつだつたつけ。

天界の技術は凄いのかもしねい。

・

しばらく歩いて見つけたのは、妙なセンスの造形物付きの大きな噴水広場だった。

ベンチで語り合う男女や、遊び回る子供たちの姿。

それは地上で見る光景とほとんど同じで、強いて言つならその姿は一般の市民とは比べ物にならないほどに優雅な格好だった。衣玖の着ていたような羽衣姿のものもいれば、黄金の衣に身を包んだもの、ほとんどの人がやたら派手で豪華な衣装を着ていた。一切の苦しみを乗り越えると、このような豪華な衣装を身にしたくなるのだろうか。

ヒカリは少し疑問に思った。

噴水の縁に腰をかけてぼんやり空を見上げる。

雲の上の世界なので雲一つないのは当たり前で、空は通常より青みの強い青空が広がっている。

「……ひこじせ、じこせソラに近づいたとか」

伸ばせば届きそうなヒカリのいた世界。

星と闇の世界が、とても懐かしく思えた。

……ホームシックだろうか。

もつすぐ帰るのだから、これぐらい我慢しないと。

「……あ、いたいた」

ヒカリがボーッとしていると、前の通りから天子が長いドレスを揺らしながら早足で近づいてきた。

「あれ、天子さん」

「さん付けじゃ足りないわ。様を付けなさい、さ・ま・を」

「え、ええ……？」

「冗談よ。そんなことより、ちょっと付き合ってくれない？ セツ

かく叶つた暇潰しなんだからさ」「ひらり

「叶つた？ 暇潰しつて……。わ、ちょっとー？」

天子の手が強引にヒカリの腕を掴む。抵抗しようとしたが、恐ろしいまでの力で全く抑えなかつた。

「弾幕」じつにやるなりこじじゃ狭いでしょ。向こうの方にちょうどいい空き地があるから、そっちでやるわよ

「だ、弾幕じつにって、まだやるなんて一言もわあああツー？」

周囲の人々に奇異の目で見られながら、ヒカリは天子に引きずられ噴水広場を後にした。

・
・

そしてたどり着いた地平線が見えるほど広大な空き地。

空き地と言うには、流石に広過ぎやしないだろつか……？

「あの……。私、今そんな気分じゃないんですけど」

「あなたの気分なんて知ったこっちゃないわ。いいから私に付き合う。手加減とかそういうのは考えなくていいから。わかった？」
「しょうがないな……」

ポシェットから術符を取り出し三枚だけ握りしめる。

そして前を見据えると、天子はいつの間にか大剣を構えていた。

「……ツ？」

突如目の前から感じる謎の威圧感に思わず体がすくむ。全身に重く響くこの感覚は何だ。

出処は……

「緋想の剣。細かい説明してもあんたじゃわからないだろ? だから省略するわ」

「む……。心無しバカにされたような気がする」

瞬間、切つ先から白い閃光が走りヒカリに猛進。

身をよじって回避、後に能力をいつでも発動できるよう低く構える。

「じゃ、これはどう!?!?」

天子が切つ先を地面に突き立てるとき激しい震動と共に地面が隆起しそのままヒカリ目がけて襲いかかる。

これぐらいなら、能力を使わなくとも大丈夫そう。低く構えていたのを止め、そのまま右手にステップして攻撃を回避。隆起した地面は激しい力で抉られたかのように、空き地に大きな溝を残した。

「これぐらいの攻撃なら、全然何ともないですよ!」

「……いいわ。次はこれを使いましょうか」

サツと左手を地面にかざすと、地面から注連縄に包まれた大きな石が現れる。

さほど脅威には見えなかつたが、ヒカリは一応低く身構えておく。

「要石『カナメファンネル』」

すると石が轟と唸りを上げながら突進。

しかし前と同様それほど速い攻撃ではない。

落ち着いて回避し攻撃に転じようとした瞬間、背後に力の流れを感じヒカリは飛び退く。

案の定、ヒカリのいた場所に光弾が撃ち込まれ激しく地面を抉られた。

「もしかしてこの人……」

大して強くないんじゃないかな？

天使は腕組みしたままこちらを見つめているだけで、それ以上何もしてこない。

様子を見ているのか、それとも……

「……よし、こっちも攻撃しよう

構えて地面を蹴る。

神速を越える速度で天子の正面を捉え、握りしめていた術符を一枚起動させる。

「瞬符『光陰矢の如し』」

零距離で放たれる光の矢が天子の腕を捉える。

そしてもう一度別の術符を発動すればヒカリの勝ち。
そう確信していたが、

キインッ！

突如響いた、甲高い謎の音。

それが天子の肌に当たった矢の音だと気づくのに数秒かかった。

「……え？」

「ん？ 何かしたのかしら？」

天子の腕には傷一つ無かった。

目の前で起こった出来事が信じられなくて、ヒカリはその場で呆然と立ち尽くしていた。

「そ、そんな……！？」

「ところで、相手の獲物が剣だところにて、この近距離で棒立ちしてていいの？」

「……ッ！」

ヒカリが氣づいた時既に遅く、腹に緋想の剣の腹が押し当てられて派手に吹き飛ばされ肺から息を吐き出す。

そのままヒカリは立ち上がることが出来ず倒れてしまった。

「なっさけないわね。せっかくいい暇潰しできるのかと思ったのに
「ゲホ……ッ。うう、弾幕で負けるならまだしも物理で負けるとち
よつと凹むなあ……」

「……」

ヒカリの傍による天子が、何故かじいっとヒカリの顔を見つめていた。
しづしづと、まるで観察しているようだった。

「……あ、あの？」

「一応訊くけど、私たち初対面よね？」

「へ？」

ソラにいたヒカリが、天界の住人と面識などあるわけがない。

ヒカリは当然首を横に振る。

しかし天子は、何か心当たりでもあるのか微かに首を傾げ思案していた。

「…………もしかして、あなた」

「は、はい……？」

半信半疑、といった感じで天子が言った。

「…………あなた、天人だつたりしない？」

第三十一話 微かな面影（後書き）

パ「もしも、あなたが何か“能力”を得るとしたら、どんな能力になるのかしらね？」

夜「さあ……？ 想像もつかないや」

美「じゃ、何か能力が手に入るのなら、どんな能力がいいんですか？」

夜「ううん……。桜と同じ香りを操る能力がいいかな」

パ「あら。文才の能力にはしないの？」

夜「それは、出来たら自分で掴みたいかな……」

もしも自分にしてする能力があつたら……

東方ファンなら誰しも考えませんか？

何故か、感想が一件減つてゐる……

間違えて消しちゃつたのかな……；

ともあれ、読んでくださる方々、いつもありがとうございます。

第三十一話　両親の正体

「私は天人なんかじゃないですよ。私は星の子ですって
「しかし総領娘様、何を根拠にヒカリさんを天人だと？」

天子は指で頭を突いて何か思い出すようにしながら答えた。

「なんか見覚えのある顔なのよねえコイツ。ずいぶん昔に見たような覚えが……」

「ずいぶん昔って、私まだそんなに長生きしてませんよ？」
「見た目だけなら天子様より少し幼いと見受けしますが……」
「ちょっと待ちなさいよ。今思い出すから。ううん……」

ヒカリの姿をチラチラ見ながら天子が唸る。
もちろんのことながらヒカリは天子と面識があるわけがない。
もともとヒカリはこの幻想郷の外にいたのだから面識が無くて当然だ。

それなのに見覚えがあるとはどういう意味なのだろうか。

「……衣玖、ちょっといい？」
「何でしようか」「歴史の本、用意できない？」
「歴史……ですか？」

衣玖の眉根が微かに揺れる。
しかしそうにわかりましたと額き部屋を出していくと、やがて古びた書物を持って戻ってきた。

「これでよろしいでしょうか？」

「載つてゐるといいんだけど……」

幾らかページを捲つていると、不意に天子の手が止まる。そこには新聞記事の切り取りのようなものが記されていた。

「これは？」

「ずっと前に、天人だというのに不可思議な發明ばかりを繰り返す、いわば変人がいたのよ」

記事には『天人らしからぬ奇行』と見出しが出でている。本文に目を通すと、そこにはこんなことが記されていた。

修行や苦難を乗り越え、自ずと無欲となる天人の中に、一人だけ可笑しな言動や行動を繰り返す変わり者の天人がいた。

そもそも、天界にいる時点でその身に欲がある時点でおかしいのだが、彼らは常日頃から『ソラへ飛びたい』と天界よりもずっと上空、星が瞬く虚空を指差して話をしていたそうだ。

彼らは日夜怪しげな機械をどこからか持ち込み、人知れず何やら実験を繰り返していた。

当時天界を治めていた帝はこの奇怪な二人を危険視し、やがて彼らを彼らが望んでいた天界の果てへと追放した……

「普通天人となつた者は欲を捨てここで毎日飲んだり踊つたりするのよ。それなのに、この二人は訳の分からないことを言いながら怪しげな研究に没頭してたんだそうよ」

「それはわかりましたが、これとヒカリさんに何の関係が？」

「たしかに、私はこの人たちの言つてるソラつてどこから来た人だけど……」

「次のページを見て御覧なさい」

言われるまま本のページを一枚めくる。

そこにはその記事で説明されていたとされる例の一組の肖像画が映っていた。

一人は男性、もう一人は女性。

男性の方は特にこれといった特徴はなく、強いて言えば他の天人と同様に豪奢な衣に身を包んでいる。

そして、女性の方は……

「これよこれ。ヒカリってさ、この天人にそっくりだと思わない？」

肖像画に映っていた女性は、ヒカリと同じ白金色の長い髪を揺らして立っていた。

顔立ちはどこか柔和な顔立ちで、優しそうな人だった。

「そう……ですねえ」

衣玖がヒカリと肖像画の女性とを見比べる。

ヒカリはまだ子供なのでハツキリと似ていると断言はできないが、鼻筋のラインが何処となく似ているような気がしなくもない。

今のヒカリと共にしているのは髪の色と、それから瞳の色だけだ。

「ううん……。何とも言えませんね。ヒカリさんはどうですか？」
「ちらの方々、ご両親とそっくりですか？」

「……そ、そっくりも何も」

ヒカリの手が震え肖像画を指でなぞる。
忘れもしない、自分の一番大事な一人の顔。

「私のお父さんとお母さん……。で、でも何で？　私のお父さんとお母さんは……」

「ふうん。つまり、あなたはこの一人の娘つてわけか。じゃあ、星の子つてのは何なのかしら？」

わからない。

今ので、何もかもが分からなくなつた。

私は星の子でも何でもなくて、ただの天人の娘？

元は幻想郷の人間だつた？

じゃあ、今まで見てきたものは何？

星の子つて何？

自分で中で確かだつたものが、一瞬で崩れる音が内から響いてくる。

「ヒカリさん……？」

「…………ッ」

「あ、ちょっと！？」

ヒカリはバツと駆け出し部屋を飛び出す。

「あ、ヒカリちゃん、わッ！」

誰かにぶつかつても振り向かず、ひらすら走る。

衣玖と天子が部屋を出たころには、ヒカリの姿は忽然と消えていた。

「つたぐ、急に走り出すなんて何考えてるのよー。」

「彼女、何処へ行つたのでしょうか……？ あら、貴女は目が覚めたようですね」

フランの姿を見つけた衣玖が胸をなで下ろす。

フランは、しばし呆然とヒカリの走り去つていった方向を見つめて、

「……お前、ヒカリちゃんに何をした」

怒りと殺氣を込めた眼差しを天子に向かた。

「ち、違うわよ！ 私たちのせいじゃないわよ。アイツが勝手に…
…つて、ちょっとー？ 何物騒なモン出してさやあああああああ
！？」

徹底的にレーザーヴァテインで叩いてから、フランは剣を収めてヒカリの方へと走り出した。

「えっと……大丈夫、ですか？」
「アイツら……一人まとめて潰す」

全身あざだらけの天子は何とか立ち上がると、フラン同様ヒカリを探るために部屋を出て行つた。

第三十一話　両親の正体（後書き）

夜「なんだこの……失敗した感は」

アクセス数激減……

も、もう少しだけヒカリにお付き合ってくださいな；

第三十二話 私は私

「ヒカリちゃん、何処行つたんだる……？」

フランは屋根の上からヒカリを探していた。
見渡すと広がる雲に包まれた煌びやかな世界。
目を凝らして周囲を見渡したがヒカリの姿は見つからなかつた。
豪奢な姿の天人から、白いローブ姿の人間を見つけるなど容易いはずなのに。

「……お」

天界の端、ちょいづき崖となつてゐる部分にちゃんと小さな白い人影を見つけた。

もしかしたらヒカリかもしれない。

フランは屋根を思い切り蹴ると崖を目指して一気に飛んだ。
崖の少し手前で着地して走ると、ヒカリが崖つぶちで立ち戻りしているのが見えた。

「ヒカリちゃん！」

「…………あ、フラン？」

ヒカリがフランに振り向く。

その瞳に霸氣はなく、金の瞳は何処か虚ろだった。

「どしたのヒカリちゃん？ あの変な人たちが何かしたの？」

ゆっくりと、ヒカリが首を振る。

「うん、違うよ。ちょっと、こそこそあつて」

「いろいろへ。」

フランがヒカリの顔を横から覗きこむ。
ヒカリは、少しだけ顔を反らした。

「一つ、訊いていい？」

「何？」

「……フランの、お母さんとお父さんってどんな人？」

「私のお母さんとお父さん？　うん……」

フランは頬に手を当て遠い、遠い記憶を呼び覚まそうとして……

「…………わかんない。全然。覚えてないもの」

「…………そつか。吸血鬼の親も、やつぱり吸血鬼なのかな」

「ヒカリちゃん……？」

ヒカリはちゅんとしゃがみ込んで体育座り。

両腕を抱えながら、目の前の真白な雲海を遠い目で見つめた。

「じゃあ、ヒカリちゃんのお母さんとお父さんってどんな人？」

同じように横にしゃがみ込んでフランが訊ねる。

一瞬ヒカリは目を伏せ、それから寂しそうに答えた。

「お母さんは、ちょっと心配し過ぎな感じ。お父さんはいつも優

しいよ」

「ふうん……。それって、どんな感じなの？」

「どんな、って……？」

横目だけフランを一瞥。

依然としてフランは屈託のない笑みを浮かべていた。

「私は、お母さんとかお父さんって、よくわかんないから。家族つて言つたら、お姉様とか咲夜とか、パチュリーも……家族みたいなものかな」

フランの言葉に、ヒカリはほんの少しだけ口の端を上げた。

「……ふふ。まあ、そんな感じだよ。いつも一緒に大切な人。お母さんとかお父さんは、それよりちょっと尊敬する人」

「尊敬？」

「うん。あかなりたいなつていう目標みたいな……」

言いかけて、言葉が口の中で震んで消える。

「……どうしたの？」

「……もしも、大切な人が、自分に嘘をついていたら、フランならどう思う？」

「嘘？」

「例えば、レミリアがフランに嘘をついたら？」

「戦う」

「……どんな理由でも？」

「だって、納得いかないもの。私を閉じ込めてた理由だって、未だに教えてくれないし」

「納得いかない……か」

フランの断言に、ヒカリは苦笑した。

「納得いかないから、戦うの！ でも、今まで一度だって勝てたこ

とないから……」

「勝てたら理由を教えてくれるのかな？」

「教えてくれなかつたら、お姉様はホントの嘘つきだよ」

「……そつか

そつ言うフランを見てヒカリが微笑む。

本当は、大好きな姉と仲良くしたいだけなのに。

不器用な妹だな、と。

「ヒカリちゃん、嘘つかれてたの？」

「それとはちよつと違うんだけど……。何だか自信とか無くしちゃ

つて

「……？」

フツと笑みを消してヒカリがうつむく。

「私つて、何なんだろ？。お母さんもお父さんも私は星の子だつて
言つて、私もそう思つてた。なのにその二人は幻想郷の、天界の
住人だつた。私は何なんだろう。願いを集める星の子であるべきな
のかな。それとも……」

「……えと、私は難しいこと、よく分かんないけど」

フランが言った。

「気になるなら、訊けばいいんじゃないかな。ヒカリちゃんのお母
さんとお父さんに。直接訊けば、納得するでしょう？」

「それは……そなうなんだけど」

「それにさ。ヒカリちゃんはヒカリちゃんじゃない

「……え」

顔を上げると、フランはいつの間にか街の方へと足を向けていた。
そしてヒカリの方をくるっと振り返って笑つてみせた。

「ヒカリちゃんは私の友達、でしょ？ 気になることは早くお仕事終わらせて、お母さんとお父さんに訊けばいいんだよ」

「わ、……だね。うん」

少しだけ、ヒカリの中の何かが吹っ切れたよつた気がした。
そうだ。

今はとにかく自分の仕事を果たさなくてはいけない。
冥界で幽々子が待つているのだ。

腕でゴシゴシ目を擦つて立ち上ると、バシバシ頬を叩いて氣合いを入れ直す。

私は、私だ。

誰だとかそんな些細なことは、後でいくらでも訊けばいい。

「あれ？ もしかして泣いた？」

フランが少し意地悪く訊ねてきた。

「まさか。落ち込んだって立ち直るのも早いのが私だよ」

「あはは。じゃ、戻ろうよ」

フランに手を引かれ走りだす。

握りしめた手を見つめながら、ヒカリは心の中でフランに感謝していた。

悩むのが、馬鹿馬鹿しくなった。

お母さんとかお父さんとか、星の子とかはともかく。
私は、私なんだ。

「天子さんに頼んで、桃を貰いに行かない」とね

フランと並んで街を走り抜け、ヒカリたちは最初にいたあの家へと
急いだ。

第三十三話 私は私（後書き）

ず、ずいぶん軽い主人公になっちゃったような；

最近、ちよいと執筆作業が遅れ気味だ
新作の妄想でもしてようか……

第三十四話 天の桃

「あら、お帰り。早かつたのね」

二人が家に戻ると、天子が卓について楊枝で何やら突いていた。

「あれ？ あなたヒカリちゃんを探してくれたんじゃ？」

「ここに誰かいないと行き違いになっちゃうでしょ。だから私が待つていてあげたのよ」

「そりなんだ……？」

本当は面倒だから衣玖に任せた。

と言つてもよかつたのだが、同じ天人の好として止めておいた。

「あの、ごめんなさい。勝手に飛び出しちゃって……」

「いいわよ別に。それよりもさ、アンタたち何か用があつてここまで来たんでしょう？ そつちはいいの？」

「そうだよヒカリちゃん！ 桃だよ桃！」

「はあ？ 桃ですか？」

天子が呆れたような声を出すと、二人の視線が微妙に上を向く。ちょうど天子の頭の上の帽子の辺り。

「こ、これが天界の桃ですか！？」

「んなわけないでしょ馬鹿ッ！ は、離せ手を伸ばすなつてのもおおおッ！…」

・ · ·

「ヒカリさん、もう戻つてらして……？ その「コブは何ですか？」

衣玖が部屋に戻つてくるなり、一人の頭の派手なタンコブが目に入る。

涙目で振り返る二人は無言で天子を何度も何度も指差した。

「こいつらが、私の帽子の飾りを天界の桃だとか言って取ろうとするから本気で殴つただけよ」

「まあ、それお飾りでしたの？」

「衣玖まで何言つてんの！？」

「ふふ。冗談です」

にこやかに衣玖が微笑むとヒカリとフランの頭のタンコブを優しく撫でた。

ほんのり香水の匂いがして、二人は少しどキッとした。

「お二人とも、天界の桃がご入用ですか？」

「は、はい。とある人に頼まれちゃって」

「地上の人間で天界の桃を食べたいだなんて、どんだけ食い意地の張つたヤツなのかしら。ちょっと見てみたいわね」

ふんぞり返つた天子が不機嫌そうに眉を寄せる。

たしかに彼女は食い意地張つている気がする。人間じゃないけど。衣玖がにこやかに指を立て提案した。

「じゃあ、果樹園にでもご案内しましょうか？」

「果樹園？ 桃以外にも果物があるの？」

「桃以外ここにはないわよ」

「え？」

「言つなれば桃園ですね。ここにはそれ以外、食べ物はありません

し

「えーツ？ 桃以外にないの？ リンゴとか、イチゴとかは？」

「ないわよ」

「ケチ」

「私にケチつて言つんじゃないわよ！」

天子とフランがギリギリと火花を散らしながらにらみ合つ。やんちゃな子供二人の慣れ合いとよく似ているような気がしてヒカリはクスッと笑みをこぼした。

二人とも我儘だから、案外相性がいいのかもしねり。

「……はあ。いいんじやないの別に行つても。私はめんどくさいからバス」

「なら、早速行きましょつか。出てすぐのところですのにお時間はかかるないかと」

「ありがとうございます、衣玖さん」

「いえいえ」

天子に犬でも追つ払つような感じでヒラヒラと手を振られながら、ヒカリとフランは衣玖を先頭に部屋を出ていった。

・

陽光の差し込む果樹園。

そこでは青々とした桃の木々が見渡すかぎりに広がっていた。

桃の木の下では、天人たちが数人で木を囲みながら飲んだり踊つたりと楽しそうに過ごしていた。

・

「すゞい……。これ全部、天界の桃なんですか？」

「はい。まあ、特にこれといったお世話はしていませんけど」

「すゞいすゞい！ わあーいッ！」

「あ、フラン待つてよー。」

斜面を駆け降りフランが桃の木に飛び移る。

白く透き通るようなピンク色をした果実をもぎ取ると、大きく口を開いてかじりつぶ。

力、キンシ！

甲高い音が響いたかと思えばフランが突然その場にしゃがみ込んでしまった。

「フランシー？」

うずくまるフランにヒカリが駆け寄る。

顔を上げると、フランはとても悔しそうに涙を浮かべていた。

「ど、どうしたの？ それに今の音は……？」

「か、かひやくて……」

「え？ フラン、今何で？」

顎を何度も手で確かめてからフランが訴えるようにして答える。

「この桃、硬くて食べれないよ……」

「硬くて食べれない……？」

今しがたフランが手にしていた桃を取り観察する。

特にこれといった以上はなく、見た目もほとんど普通の桃だった。

柔らかい皮も「ふに」していてふんわりといい匂いがする。

「……普通に柔らかそうだよ？」ほら

「で、でもお……」

桃を受け取りフランがもう一度大きく口を開けてかぶりつく。すると不思議なことに、あれだけ柔らかそうな桃だったのにフランの歯では全く傷一つ付かなかつた。

顔を真っ赤にしながらしばらく続けていたが、やがて頸が疲れて吐き出してしまつた。

「これ偽物だよ。他の、本物は……」

「無駄ですよ。この桃は天人以外のものが食べることを許されていませんので」

いつの間にか衣玖が傍に駆け寄つていて、落ちた桃をそつと拾い上げた。

桃を指で示しながら、まるで教鞭を執る先生のような口調で言つた。
「これは天人以外が口をつけても、食べられないものなんです。ですから、地上の人人が欲していたとしても、残念ながら食することは出来ないんです」

「じゃあ、衣玖さんは食べられるんですか？」

「私は天人ではありませんのでもちろん食べません」

落ちた桃を衣の袖で優しく拭うと、衣玖は桃をヒカリにスッと差し出した。

「貴女なら、食べられますよ。よかつたらどうですか？」

「私が？　いや、でも私が食べても……」

とはいって、田の前の桃はとても美味しそうだった。

ほんのり漂う甘酸っぱい香り。

触れれば蕩けてしまいそうな薄皮の、その奥には想像もできないような甘美な果肉が詰まっている。

……「くづ。

「……じ、じゃあ、ちょっとだけ。ちょっとだけ……」

「はー。どうぞ」

ポンと手に乗るふんわりとした重量感。

ヒカリが手を伸ばすと、まるで皮はまるでレースのようになつと静かに剥けた。

白く透き通つて、それでありながら淡い桃色を放つその果肉。

……意を決したヒカリは田を瞑りながら、その果肉に小さく唇をついた。

「……どう、ヒカリちゃん？ 美味しい？」

「……」

味を確かめるため、よく噛んで、舌で転がして、それから……

「……ううん。普通の桃の味なんだけ」

「ひ、ヒカリちゃん！？」

正直に感想を述べようとしたその時フランの声に遮られる。

フランの方を見ると、何故か田をしっかりと見開いてわなわなと体を震わせていた。

理由が分からず首を傾げるヒカリ。

隣の衣玖も、何かに驚いた様子でポカンと口を開けて呆然としていた。

「ちょっとちょっと。二人ともどうしたの？ 私の顔、何かついてる？」

「ち、違うよ！ 髪、髪の毛！」

「髪？ 私の髪がどうかし……！」

ちょいとつまんだ毛先を見た瞬間、ヒカリの目がカツとめいっぱいに開かれた。

それは、今見ている光景が信じられないといった風に困惑に満ちていた。

「あ……あれ？ な、何で私の髪が……！？」

お気に入りの白金色の髪。

その髪が、何故か桃を食べ始めたその時から何故か金色に光り輝きだしていた。

訳が分からず、ただ金に染まつた自分の髪を見つめながらヒカリは立ち尽くした。

「な、何これ……？ どうなっちゃってんの私……！？」

第三十四話 天の桃（後書き）

とにかく、終わつまで止まらず勢いだけで書き終えるッ！
次回作はもっと綿密な準備をしなくては……

色々とじり迷惑をかけて申し訳ないです；

第三十五話 意味のない変化……？

「え、エエエエエエエエエエー？ 私の髪が金色になっちゃったー！？」

鏡の前で何度も同じセリフを叫んだことか。

ヒカリは金色に染まってしまった自分の髪を引っ張つたり必死に洗つたりするが何の変化も見られなかつた。

鏡の中の自分が、まるで別人のようにヒカリの瞳に映つていた。

「どうこういとどしうか。あの桃にそんな効果ありましたっけ……？」

「もちろんないわよ。食べれば身体能力とかは強化されたりするけど、髪を染めるなんてへンテコな効果あるわけないじゃないの」

「うう……。どうしよ。絶対お母さんに怒られる……」

「でも、前にもヒカリちゃん金色の髪になつてたよ？」

フランが言つ。

それは前にもフランから聞いていたのだがヒカリにそんな記憶はなかった。

しかし、今日の前で輝く髪は紛れもなく本物。

「いいじゃん。その方が可愛いよ」

「か、可愛いとかそういう問題じゃなくて」

「他に変化はないのですか？ 例えば能力とか」

「能力は……ううん、ここじゃ狭くて確かめようがないから……」

「じゃあ、やつきの広場にでも行きましょうよ。その方が動きやすいですよ」

・

・
場所は変わつて現在ヒカリたちは街から離れた、ちょうど天子と戦つた空地へと来ていた。

「じゃあ、試してみるよ」

軽いストレッチをしてからグッと姿勢を低く構え、ヒカリは思い切り地面を蹴り上げる。

ドンッ！ と激しい砂ぼこりを巻き上げヒカリの姿が一瞬で遙か彼方へと飛ぶ。

フランは見慣れたものだつたが、天子と衣玖の二人は豆粒サイズにまで小さくなつたヒカリを見つめて呆けたように口を開けていた。

「……すう。一瞬であんなとこまで飛べるんだ」

「私を助けたのはあの能力だつたんですか。並の人間では追いつくことなんて考えるだけ無駄ですね」

「ヒカリちゃん！ どおー？」

遠くでヒカリが小さく首を傾げ唸る。

特に、これといった変化はない。

いつもと同じで、一瞬を爆発的な加速で駆け抜けるだけだ。

同じ要領でフランたちの元へと戻る。

今度は今度は、とフランが楽しそうに提案してきた。

「弾幕は？ 何か変わってるかも！」
「スペルカード
「術符か。オツケ。やってみる」

手の中で光を躍らせ力を集める。

やがてそれはスッと白く槍状に伸びて形を成す。

「……ブリューナクは、普通か」

依然と同じ白く輝く槍。

光の色が変わるとか、長さが変わるとか重さが変わるとか、そういう変化は何も見られない。

投げても手応えは一緒に威力も速さもほとんど同じ。

すると、天子が呆れたような聲音で口を挟んできた。

「……あのさ。そういうのって相手がいないと意味ないんじゃないの？」

「…………あ」

「馬鹿ねえ……。相手してあげてもいいけど、元の威力が分からなから私らじや参考にはならないわよ」

「じゃ、フランが相手するよ！」

トン、とヒカリの前に飛び出しレーヴァテインを握りしめる。

「いつでもいいよ。普通に弾幕『いつこする感じださ』

「う、うん。じゃあいくよ」

ブリューナクを消して光を別の形に作り直す。

それは光り輝く一本の巨大な矢となつた。

「瞬符『光陰矢の如し』」

三歩ほど助走をつけまっすぐフランに投げつける。

フランが防御に構えるよりも先に、光の矢はフランを手からレーヴ

アテインが弾く。

「……は、ははは。やっぱ速過ぎて追いつかないや」「でも、これもいつもと変わらなによつな……」

他の術符も試してみたが、威力も何も変化なし。

色々試した結果、結局変わっていたのは髪の色だけだった。
「天界の桃食べて髪の色が変わるだけなんてアンタが初めてよ。どうなってるんだか」

「私が知りたいです……」

私は本当に何なのだろうか。

せっかくなるべく気にしないでいようと思っていたのに、ここに来て疑問が再び心の底から浮かび上がってきたような気がした。

「……それで、これからどうするの？」

「ど、とりあえず戻ります。ここに長居していても仕方ありませんし」

「そ。じゃあ衣玖、出口まで送つてあげなさいよ」

「はい。承知いたしました」

空き地を弓き返し街を抜け、ヒカリたちが元来た場所へと戻る。

「あの、いろいろどご迷惑かけてすいません」

「いいえ。総領娘様も、何だかんだで楽しんでいたみたいですし」

「……あれで？」

とてもそんなそぶりを見せていないよつな気がするが。

「じゃあ衣玖さん、いろいろありがとうございました」
「ありがとー」ざいましたッ

ヒカリとフランが揃えて礼をする。

衣玖はにこやかに微笑みながら一人の後ろ姿を見送った。

・
・
・

それから、じぱらくして……

「やついえばヒカリちゃん、お姉さんの欲しがってた桃はどうするの？」

「実は、じつそり持つてきたんだけど……」

白玉楼に辿り着くなり、幽々子は眩いばかりの笑顔で一人を出迎えてくれた。

「おかえりなさい。どうだつた？ 天界の桃、手に入つたのかしら

?」「い、一応……」

ポショットから取り出した小さな桃。

見た目もほとんど普通の桃で、どこが違うのかまるきりわからない。幽々子は桃を受け取ると興味深そうにしげしげと見つめて、やがて、

「はむ」

「あー、幽々子さん、その桃は……」

幽々子の顔が、みるみるうちに泣くなつて、やがて瞳に大粒の涙があふれ始める。

「か、硬くて食べられないじゃないコレ……。ねえ、これって本物の天界の桃なの？」

「あの、実は……」

そこから涙田の幽々子を説得するのにも凄く時間がかかった。具体的に言ひと、ちよづき幻想郷に朝日が昇り始めるころまで。

結局残つた桃はヒカリ以外食べることが出来ないので仕様が無く食べた。

「……ただの甘い、普通の桃なんだけどなあ

そんなヒカリの姿を、恨めしげに幽々子が睨んでいたのは言つまでもなく……

第三十五話 意味のない変化……？（後書き）

バイトで遅れました；
すみません……

そして評価ポイント、ありがとうございます。
明日も遅れる……のかも？；

第三十六話 不穏で多忙な朝

「……ヒカリ。貴女大丈夫なの
「…………ふえ？」

朝食のトーストにジャムではなくソースをべったり付けるヒカリにレミリアは呆れたように言った。
まだほとんど夢心地なのか、ヒカリは右に左にぐらんぐらん揺れていた。

「ほ……ほとんど、寝て……なくて……え」
「……咲夜、コーヒーに塩でも入れてあげなさい」
「はあ……。かしこまりました」

レミリアのリクエスト通り、塩の入ったコーヒーがヒカリの元へと運ばれる。

開いているんだかかないんだかわからぬような皿つきで黒い液体の入ったカップを掴むと、くつと一気に喉に流し込んだ。

「 ッ！」

ヒカリの眼が、カツと見開き脳裏に想像もできない刺激と情報が流れ込む。
ざらりつくコーヒーの舌触り。

苦みの中に、全然噛み合わない塩からさと渋さ。
それでいてしつこく口の中で絡みつくより漂う風味。
……有体に言えば、想像以上に不味かった。

「……あの、ヒカリさん的眼から光がなくなっちゃいましたよ？」

「いい気味よ。それに、甘いコーヒーしか飲めないヒカリが悪いわ
「今お出したものは、もはやコーヒーとは言えないような気がしますが……」

「塩の入ったコーヒーを好んで飲む人を私は知ってるけどね

「……」

「あ、そういえば思い出した

自分のカップのコーヒーに口を付けながら、レミリアは何かを思い出したかのように指を立てた。

「ヒカリ、貴女今日時間はあるのかしら？」

机に突っ伏していたヒカリが虚ろな瞳でレミリアを見る。
それからぱつと視線を反らして思案にふけり、やがて首を振った。

「夜以外は……何もないから、ヒマですけど……」

「そう。実は少し前に靈夢がここに来てね。明日のことで話があるから神社に来てほしいって言つてたのよ」

「……？ 明日？」

明田つて、何の田だ。

別に誕生日でもないし、特にこれといった祭日でもなかつたような気がするが。

ヒカリが皆田見当がつかずボケッとしていると、レミリアは呆れたよみこため息をついた。

「七夕、よ。願いを集めてるつてのに、一大イベントを忘れるなんてどうかしてるわよ？」

「……ああ！ そうだそうだ！ 思い出した、七夕か！」

半分死んでいたような意識が一気に覚醒してガバッと勢いよく立ちあがる。

勢いで椅子が吹っ飛んだが気にはしない。
明日は幻想郷で願いが集まる絶好の日。
色々なことがあり過ぎてすっかり忘れていたのか。我ながら少し恥ずかしい。

「そういえば、七夕のお祭りがどうとか言っていたわ。それで貴女に何か用があるんでしょう。特に用事もないのなら直ぐに行つてあげなさい」

「も、もちろん！ 今すぐにだつて行きますよ！」

朝食を高速で流し込み飲みこむと、自室へ駆けあがつて支度して玄関を出る。

神社の場所は覚えている。
人里まで降りて行けばすぐ見えてくるのだから嫌でも覚えてしまうのだ。

「行つてきます！」

「うえ！？ あ、はい！ 行つていらっしゃいませ！？」

ヒカリの姿は爆音と共に一瞬にして消えてしまった。

……そして、それを見送るレミコアは微かに笑みを浮かべた。

「邪魔者は消えたし、当事者にちょっと訊いてみようかしら
「お嬢様……？」

食堂の戸が開き、フランが一番最後に現れた。

一応身だしなみは整つてはいたが、目元にはくまがあつたり半分寝

ぼけ眼だつたり、まだしつかりと起きていないのが一目で分かる。

「……おはようフラン。朝からそんな顔をして、昨日はなぜかし楽
しい夜更かしだったのかしら？」

「ふあ……う、うん。えと、本を読んだり遊んだり……」

「そう。ま、たしかにヒカリと一緒に何でも楽しそうね」

「うん。……えへへ。楽しこよ」

「楽しいのは絵本なのかしら？　トランプやタロット？　それとも

「……」

深紅の瞳がスッと細まりフランを見つめる。

「外の世界、……とか？」

「…………ッ！？」

・

「ひんにちわ～！」

神社の正面で意氣揚々と大きな声であいさつをしたのだが、返事は
なかつた。

朝の博麗神社は前より空気が凜と澄んでいて思いの外心地よかつた。
燐々と注ぐ陽光、朝を告げる鳥の歌。

境内の真ん中で大きく深呼吸すると、体の中が清められるような気
がした。

「……靈夢、遅いな」

一向に返事はなく、ヒカリが来てからすでに数十分経過していた。

ふと、背後から気配を感じ振り返ると、赤いリボンと緑色の何かが石段を上りながら揺れているのが見えた。

赤いリボンの正体は、もちろん靈夢だった。

「あら、おはよ。ずいぶんと早かつたわね」

「朝起きて、」と飯食べてすぐに来ましたから。……その葉竹は？」

靈夢のリボンと共に揺れていたのは、ちょうど葉竹の葉の部分だつ

た。やや小振りのその葉竹を転がすと、一度大きくウソと背筋を伸ばした。

「紫が飾れつてうるさいから持つてきたのよ。明日、七夕のお祭りをやるからってさ」

「それで私を？」

「そ。せっかくだから手伝つてやれってさ。それなら自分でもりやいいものを」

ぶつくさ文句を言しながら竹を境内の端にしづけ社の中へヒカリを招ぐ。

差し出された湯のみは真夏だといつのに湯気が立っていた。

「それあの、私に用つてのは？」

「まあ大したことじやないんだけどさ。お祭り用の竹を取りに行くから付き合つてほしいつてだけなのよ」

「え？ 今持つてきた竹を使うんじゃないんですか？」

「紫がお祭り用に特別なヤツを用意してるんですけど。ただ、境界いじつて何処へなりとも自由に行けるのに『自分の手で持つて行かないといじり利益ないじやない？』とか言って用意した竹を永遠亭に置

いてきたそうよ。全くホントに面倒なんだから

「永遠亭……？」

聞き覚えのない名前だ。

「そつか。アンタ知らないんだつけね。里から少し出た先の竹林の奥にある、まあ一種の病院よ」

「何でそんな場所に置いてきたんだろう?」

「大方、運ぶのがめんどくさいからでしょ。とはいって、特別な竹つて何なのかしらね」

「ううん……」

頭の中で想像してみる。

特別な竹……か。

「中にお姫様が入つてるとか」

「それ、七夕と全然関係ないじゃないの」

靈夢に鼻で笑われてしまつた。

割と一生懸命考えたのだが。

ヒカリが湯のみの中身を飲もうか悩んでいると、不意に靈夢が立ち上がつた。

「あれ? 何処か行くんですか?」

「だから、永遠亭に竹を取りに行くつて言つたでしょ」

「あ、そうだった。了解です」

「……あ。そうそう」

鳥居をくぐった辺りで、何故か靈夢がヒカリを振り返り言った。

「せりあいの、竹の中のお姫様つてヤツ」

「それがどうかしたんですか？」

「お祭りの竹とは関係ないけど、あながち間違つてはいないわよ

「え？ どういう意味ですか？」

靈夢は少しだけ、悪戯っぽく笑つてみせた。

……何故だか意地悪そうに見えたが黙つておく。

「今から会いに行くもの。『かぐや姫』に、ね

そつと靈夢は呆けるヒカリを余所にトン、と空くと飛びあがつた。

第三十六話 不穏で多忙な朝（後書き）

昨日はすみませんでした；

原因は、端的に言えば体調不良。

夕飯食べてる時に、急に視界がぼやけてよく見えなくなつたんですね。

パソコンもほとんど見えなくつらくなつて使いづらさ、結局昨日はおやすみ；

今はとりあえず何ともないで大丈夫です。

明日からまた一日一話でいきますよん。

では。

第三十七話 悪戯ウサギの案内人

里から少し離れた場所にある竹林。

その奥にヒカリと靈夢が田指す永遠亭と呼ばれる建物はあるらしい。靈夢の後ろを飛びながら、ヒカリはどんな場所なのだろうかと考えながら、同時に靈夢の言つていた言葉を思い出していた。

『今から会いに行くもの。“かぐや姫”に、ね』

かぐや姫とは、竹から生まれたあのかぐや姫なのだろうか。
だとしたら、月に帰らずこんなところで何をやつているのだろう。
幻想郷が気に入つて住みついたのか。

ふと、靈夢が高度を下げたので同じく下げる。

ちょうど一人は竹林の入口に着地した。

目の前には空へ向かつて雄々しく伸びる竹が、まるで壁のようになり人の前に立ちはだかっていた。

しかしその奥の様子を覗いてみると、同じような竹が延々と続いていて詳細をうかがいることは出来なかつた。

「……この奥に、ホントに病院なんてあるの？」

「あるわよ。ただちょっとした結界が張つてあるから、普通に入つたら確実に迷うわ」

「え、じゃあどうやって……」

「今日は先に言伝してあるから大丈夫よ。案内人がすぐ近くまで来ているわ」

「案内人……？」

その時、ガサガサと草の揺れる音がしてヒカリが振り向くと、白いたれ耳のようなものが草葉の陰に見え隠れしていた。

「何だアレ……へふツ！？　ぎに」や！？」

ヒカリが恐る恐る草陰に近づいてみると、突然陰から何かが飛びだしヒカリの顔面に激しく激突。

飛び出した何かは華麗に宙を舞つて、悶絶するヒカリの背中に着地して追撃。

「よつ。 瞳夢」

「兎？ てっきり私は妹紅が差し向けられるのかと思つてたわよ」「何を言つてるか。元々この竹林は私のものだぞ。私が案内しなくてどうする」

「……そんな性格してたかしら？」

「あの…… そろそろ退いてください」

「おおつと。すまんすまん。全然気づかなかつたよ。はつはつは」

「むざむざ！ うおー？ あうツー！」

てゐは二度三度足踏みしてから、にかにかと笑いながらヒカリの背中から降りた。

「いつたた……。あの、瞳夢さん、この人誰？」

「竹林の案内人よ。本当は別の奴が来るのだと思つてたんだけどね」

「因幡てゐさ。よろしくな」

「……あんまりよろしくしたくないです」

薄いピンク色のワンピースに黒のショートカット。

そして頭には小さな白いたれ耳がひょこひょこ揺れている。てゐと名乗った少女から微妙に距離を取りながら、ヒカリは怪訝そうな顔で答えた。

「お師匠様のどこに行くんだろ。ついておいでよ」

てゐの案内で一人は竹林の中へと足を踏み入れる。

「うわ……すごいな……」

竹林に入った途端むつと立ち込める緑の匂い。
そして目の前に果てしなく広がる青々と伸びる竹、竹、竹……
視界に映る色のそのほとんどが緑に染まっていて、ヒカリは少し気が滅入りそうになつた。

「こんなとこ通れるんですか？ 道だつて全然見えないし……」「だから案内人が必要なのよ。てゐはこの竹林を昔から管理している妖怪だから心配はないわ」

「そういうこと。ほらほら、ヒカリだつけか？ ちやつちやと進もうじやないか」

「うわわ、何も背中を押さないでも……」

てゐはヒカリの背中をどんどん押しながら竹林の道なき道を進んでいく。

ふと足にふわ、と何か柔らかいものでも踏んだような感触が伝わつた。

かと思うと、突然ヒカリの目の前世界ががくんと落ちた。

「く……、つてにゃああああーー？」

ものの見事にヒカリは竹林の影に作られた落とし穴に落ちた。
ぶつけた頭をさすりながら顔を上げると、靈夢とてゐが呆れたような顔をしてこちらを見ている。

「ちょっとアンタ、気をつけなさいよ」

「あたた……。『』『』めんなさい。落とし穴があるだなんて知らなくて……？」

視界の端に映るてゐが、何故か小さく笑みを浮かべていた。まるで落ちたヒカリをあざ笑うかのような狡猾な笑み。

「『』は侵入者対策のトラップがわんさかあるのさ。注意しなよ？」「や、そういうのは早く言って欲しい……」

どうにか穴から這い出しが出来、歩みを再開する。相変わらずヒカリはてゐに背を押されっぱなしで竹林を奥へ奥へと突き進んでいく。

そして再び足に伝わる柔らかい感触。

「……？　どうしたのさヒカリ。急に足を止めひやつて」

「あの、てゐさん先に行ってくれませんか？」

「私が？　別にいいけど？」

するどてゐは何事もなく地面を歩き先へと進む。

「なんだ……私の勘違いか」

てつくりまた落とし穴があるんじゃないかと警戒しててゐを先行させてしまった。

ちょっと恥ずかしい。

気持ちを切り替えて一步踏み出して、また世界が落ちた。

「……ヒカリ、アンタね」

「つぐく。間抜けな奴だなあヒカリって」

キッとしてゐを睨みつけると、我関せずといった感じで口笛なんぞ吹いていた。

……何だか妙に腹が立ってきた。

落とし穴から這い出て歩みを再開する。

奥へ進むたび差し込む光の量が少なくなつていぐ。

足元も覚束なくなつてきて、てゐの背中を追いかけるのも苦労してきた。

「ほらほら、足元気をつけなさいよ～？」

「もう一度と落ちるもんか……ッ？」

踏みしめた地面が緩くへこむ。

二度あることは三度あるわけで、これもやはり落とし穴だろひ。微かに視線をてゐに移すと、じつそりとうすく笑いを浮かべている。が、ヒカリと田が合ひつとサシと田を反らした。

「……」

「ちょっと。早く進みなさいよ。そんなに暇じゃないんだから」

「わ、わかつてますよ」

この地面は確実に落とし穴だ。

絶対、絶対落とし穴だ。

目の前のてゐの反応を見る限り、落とし穴の犯人は絶対に彼女だ。さつきからヒカリを陥れて楽しんでいるのは一目瞭然。今度は、引っ掛かるもんか。

「……とおツ！」

恐らく落とし穴であるひ地面を飛び越え、その先を踏みしめる。

グッと、反発する柔らかな土の感触に安堵した瞬間、田の前の世界が落ちた。

堪え切れなくなつたてゐがお腹を抱えてげらげら笑い出した。

「あーっはははは！　ヒカリってホント面白になあ。悪戯し甲斐があるつてもんだ」

「う、ううう……むひーー　てゐ！　待ちなさいよーー！」

ヒカリの堪忍袋の緒が切れる瞬間である。

落とし穴を飛び出し逃げるてゐを追いかけるヒカリ。

「……どつかの誰かさんと似てるわねえ」

そんなヒカリの後ろ姿を見ながら靈夢がしみじみ呟いた。

気がつけば、靈夢たちは田地の永遠亭のすぐ正面まで来ていた。

第三十七話 悪戯ウサギの案内人（後書き）

そろそろ『オープスパーティーブックオブシャドウ』の発売日！

そしてその次の週にはダークソウル！さらにその次の週には武装神姫に第二次スパロボOG！

新作ゲームラッシュ！

プレステ3もすぐに買いつき予定……あ。

そういえばCOD・MW3を買つかBFBC3のどちらを買うのかまだ決めてなかつたな……

おっと、いきなり脱線した。

読者の皆様方、ありがとうございます。

次回作は、もっとゆる~いお話にしよう、つん。

第三十八話 不機嫌なお姫様

永遠亭。

迷いの竹林の奥にひつそりとたたずむ日本家屋。白玉楼とまではいかないがそれなりに大きく、玄関の先に見える趣のある広々とした庭園が目を引く。

鹿威しの音が「ン」と静寂に響く。

「これ、病院なんだ……？」

「正しくは診療所さ。お師匠様は……と」

廊下を歩き奥へと進んでいくと、つん、と薬品の香りがしてきた。部屋を覗いてみると、銀髪の女性が何やら試験管を片手に難しそうな顔をしていた。

「あ、いたいた。お師匠様、靈夢たちが来たよ

てゐの声に反応して女性が顔を上げる。

その面は白磁の如く透き通っていて、女のヒカリが見てもハツとするほど美しかった。

ほんのり紅をのせた唇がそっと開く。

「あら、もう来たんですか。意外と早かつたですね」

「そんな挨拶はいいわ。紫に頼まれて特別な竹とやらを受け取りに来たのだけど、何処にあるのかしら?」

「外にありますので案内しますよ。てゐ、『苦勞様』

「ん。じゃ私はまたちょっと出かけてくるよ」

言つなりてゐは部屋を素早く出て行ってしまった。

「あの、特別な竹つて何なんですか？」

「やういえば、貴女はどちらさまかしら。見かけない顔ね」

銀の瞳に据えられ、ヒカリは背筋をピンと張りながら片言な言葉で返事した。

「あ、え、えと、ヒカリつて言います。緋薄ヒカリ……」

「」で診療所を営んでいます、ハ意永琳やいじゆりんという者です。お見知りおきを」

「」、こちひつ」

「なあに緊張してんだか」

永琳は立ち上がりと、部屋を出て一人を庭の方へと案内してくれた。竹林に囲まれているせいか、ひんやりとした風がこの永遠亭を吹き抜けてとても気持ちがいい。

廊下を抜けて庭先へ出ると、玄関で見た広々とした庭園が見えてきた。

「そういえば、特殊な竹つて何なの？」

「え？ 紫さんからうかがつてないんですか？」

「アイツがそういうこと言うわけないじゃないの。大事なところだけ笑つて誤魔化して楽しんでるんだから」

「だからたつたの二人でここまでいらしたんですね……。大丈夫でしょうか」

「はあ？ 大丈夫つてなに……が……」

「あれ、どうかしたの靈……夢つて！？」

靈夢がぼうと立ち尽くす視線の先を見てヒカリは思わずぽかんと口を開けて啞然としてしまった。

そこには竹があった。

いや、竹林のど真ん中なので竹があつても何うおかしくはないのだが、それは明らかに通常のもののサイズを樂々通り越したような巨大な竹だった。

地面から天へとまっすぐ伸びる竹の、先が雲に隠れて見えないほど。幹だけ見ても、ヒカリが両手を伸ばしても一周できそうない。普通の竹を数十本も束ねれば同じ大きさになるだろうか。というか、コレは竹なのだろうか？ と疑問に思えるような、もはや別の植物としか思えないほどに巨大だった。

外から見えたはずなのに見えなかつたのは、靈夢が言つていた結界のせいだらうか。

「……頼まれていた特別な竹といつのはこれですよ。たつた一人で運べますか？」

「ば、ばばばば馬鹿じやないの！？ これが竹ですか！？ でか過ぎよ！」

「世界樹って、こんな感じだよね多分」

「タケノ口生えるような世界樹なんて私は嫌よ」

「紫さんに頼まれて、竹林の竹を品種改良する薬を使つて作つたんですけど……」

「でか過ぎだつづつの。いつたい誰があそこまで短冊を吊るしにいくつてのよ」

指差した先に、微かに見える緑色の笹の葉。

雲に霞んでいるせいでよく見えないし、あの高さじや子供がジャンプしたつて絶対届かない。

「……流石に大き過ぎですか」

「当たり前でしょ。さつさと小さくする薬でも作つてちゅうだいよ。これじや神社にだつて置けやしないわ」

「はあ……。わかりました。では、少々お待ちください」

永琳はそう言って庭先から直接上がりつて部屋へと戻つていく。
靈夢はため息つきながら縁側に座り、ヒカリは……特にすることだが
無かつたので巨大過ぎる竹をぼんやり見上げていた。

「……？」

ふと、背後に視線と気配を感じヒカリは振り向く。

廊下はさらに続いていて、その奥にはまた別の部屋が。

ちょうど離れになるのだろうか。

そして部屋の襖の端に何か着物の裾のようなものがチラッと見え隠
れしていた。

「……だ、誰かいるの？」

庭の砂利道を進んでいくと、やがて十一單に身を包んだ少女が見えた。

色取り取りの单を纏い座している少女は、何処か神秘的な雰囲気に
包まれている。

「も、もしかして……」

かぐや姫？

靈夢が言つていた、かぐや姫に会つところのはじめのことだろうか。
優雅な出で立ち、艶やかな長い黒髪。

物語ではありとあらゆる男性が心惹かれ焦がれたといつ絶世の美女。
そんな少女が、ヒカリを見据えた瞬間口を開いた。

「誰かしら

「し、喋った！？」

「……いきなりずいぶんな挨拶ね。失礼にもほどがあるんじゃない」「「！」」「めんなさ」……」

黒い瞳が、舐めるようにしてヒカリを見つめる。

そして頬杖つきながらハアとヒカリに聞こえるような声でため息をついた。

「で、あんた誰よ。今日来客の予定は靈夢だけのはずでしょ」「緋翫、ヒカリって言つます。えと、その靈夢さんと一緒にこりま

で来たんですけど……」

「そうなの」

「…………」

ぶつきりせつといふとか、酷くつまらなそつこふ女が答える。

それから一人の間に沈黙が流れた。

妙に気まずい空氣に、ヒカリの背中に嫌な汗が背筋を這うのが分かる。

少女は欠伸しながら瞳を細め、手についていた扇子で口元を覆つた。
仕草は、姫君らしいといえばらしき。
だが……

「そんなところで突つ立つて楽しいのかしら？　といふか、何か用
なの？」

「い、いえ……その……」

口を開くと酷く冷めた言葉が飛んでくる。

ヒカリの抱いていたかぐや姫のイメージにパンチ、と小さなビビが入った。

「あの、えと……。靈夢の言つていたかぐや姫つて言つのは……」

「私のことね。それがどうかした?」

「うう……」

返つてくる言葉一つ一つに鋭いトゲが見えるようだつた。
ぐさぐさと、それは遠慮無しに庭に踏み込むことを戒める薔薇のト
ゲのよつな。

プライベートを害された氣分なのだろうか。
すっかり萎縮してしまつたヒカリは、突き刺さるよつな視線に気圧
されす「す」と後退りしてしまひ、
……ちよつと怖い。

「…………」

「…………？」

「うしょうもない辛い沈黙。

もう謝つて靈夢のどこに戻つた方がいいんじゃないのだろうか。

「……あの、すみません!」

「…………？」

突然頭を下げたヒカリに面食らつ少女。

「その、かぐや姫つて聞いたから、どんなに綺麗な人なんだろうな
つて、興味が湧いたからその……」

「…………」

「プライベートな時間、邪魔しちゃつてすみません! し、失礼し
ま」

「待ちなさい」

「…………え?」

脱兎の如く駆け出そうとしていたヒカリが振り向くと、少女はまじょ
いちょいと手招きしていた。

それはこっちに来い、といふ合図。

ヒカリが縁側まで近づくと、少女のか細い声が何かを呟く。

「…………悪かったわね」

「へ？」

上手く聞きとれずに聞き返すと、扇子を退けて少女が顔を出した。
近くで見るともっと綺麗な顔をしていた。

世の男性が恋をするというのも頷ける気がした。

そんな美しく端正な表情を微かに歪めながら、少女が言った。

「少し、虫の居所が悪くてね。そんな最中に貴女が来たものだから、
少し当たってしまったのよ」

「いえその……私の方こそ、すみません」

「…………蓬萊山、輝夜よ」

「名前まで、お姫様なんですね」

「どう答えていいのよ、ソレ」

沈黙の流れていた二人の間に微笑が漏れる。

「あの、虫の居所が悪いって、何かあつたんですか？」

「さつきケンカで珍しく引き分けちゃってね。いつもならコテンパンのフルボッコにしてやるのに出来なくて。それで不機嫌だつたの
よ」

「け、ケンカ？　お姫様がケンカするんですか！？」

「その姫って言つの止めてちょつだいよ。別に姫でも何でもないん
だから、輝夜でいいわ」

「じ、じゃあ輝夜……さん」

「何かしら?」

「ケンカって、誰とですか?」

すると、輝夜の眉が一瞬への字に曲がって、それからうーんと唸りながら空を見上げて言った。

「腐れ縁というか何といつか……ま、向こうにひとつては父親の仇なんじやないかしら?」

「親の仇って……、輝夜さんはその人の父親を殺したんですか?」

「殺しちゃいないわよ。ううん、初対面の人には説明し辛いわね。簡単に言えば逆恨みかしら? 因縁つけられてるのよ」

「因縁……逆恨み……」

物騒な言葉の羅列にヒカリの顔が引きつる。

「ま、大したことじやないわよ。いつもふらつとこに来ては、戦えだの何だの挑発して、結局私が勝つ。今日はたまたま、引き分けちゃつただけ」

「ふうん……?」

幻想郷のかぐや姫とはよくわからない。

因縁の相手と戦っているといふのに、その話をしている輝夜の顔は、

「輝夜さん、何だか楽しそうにお話ししますね」

笑っていたのだ。

ヒカリがそれを指摘すると、輝夜は一瞬言葉に詰まつて、それからそっぽ向きながら小さな声で言った。

「……まあ、そうね。永遠亭を動けない私にとっては、唯一の暇潰しなんだし……」

「お姫様は大変なんですね」

「だから、姫とかそういうのは……はあ。もういいわよ
「えへへ」

一人が他愛のない話に花を咲かせていると、庭の方から靈夢の声が聞こえてきた。

恐らく竹を小さくする薬が出来上がったのだろう。

「じゃあ、それから行きますね」

「ええ。ちょうどいい退屈しきになつたわ。ありがとうございます」

「あの、やつぱり七夕のお祭りは来れないんですねか？」

輝夜が首を振る。

「無理よ。私はここから動けないもの」

「じゃ、コレ渡しておきます」

ヒカリはポシェットを『んー』と漁り取り出したのはまだ何も書かれていない一枚の短冊だった。

「これにお願い事書いて、永琳さんに預けてください。永琳さんはお祭りの方に顔を出すつて言つてましたから、私が受け取ります。そしたら、私がお願い事を届けてあげますから」

「貴女が届ける……？ 可笑なこというわね」

「それが私のお仕事ですか。じゃッ！」

「あ、ちょっと……！」

短冊を輝夜に手渡したかと思うと、ヒカリはパパッと走り去つて行

つてしまつた。

「遅いわよ。これ運ぶの手伝いなさい」

「ぜ、全然小さくなつてない！？」

「なつてるわよ。ほら、端っこ持つんなさい」

「やつぱし重ッ！？」

「……変な子ねえ」

短冊をヒラヒラ揺らしながら輝夜が呟く。

部屋に戻つて文机に短冊を置くと、筆を取りぽんやりとそれを見つめた。

……願い事、何を書こうつか。

第三十八話 不機嫌なお姫様（後書き）

妹「こ、こんなの輝夜じゃねえッ！」

夜「久々にこの「コーナー出たと思つたらいきなりもこたんか」

妹「おい、アイツは誰だ！？ あのが輝夜だとでも言うのか！？」

夜「た、たまにはお淑やかなキャラ書きたいんだよ… といつか、一体何をして引き分けしたんだ」

妹「スマ ラDXだ」

夜「……引き分けするよつなゲームかそれ。つていうかGC版！？」「

そんな俺はピチュー（青カラ）大好きっ子。

DXで一番得意なのはロイだけど。

ちなみにXならアイクとゼルダ姫がメイン。

しかし永遠亭のキャラはいまいち安定しない……

一番触てる風神録はともかく、永夜抄ってほとんどやったことないしな……

基本、縦シュータイミングは苦手です：

第三十九話 姉妹喧嘩

「あー、終わった終わった……」

紅魔郷へと帰る道の途中、ヒカリは肩を何度も叩きながらのろのろと重い足取りで歩いていた。

ついさっきまで、ヒカリは永遠亭で受け取った特別製の竹を靈夢と二人だけで運び、どうにか神社の境内に置くことが出来た。仕事を終えて紅魔郷に戻ると、いつもなら門の前にいるはずの美鈴の姿が見当たらない。

何処かに隠れて昼寝でもしているのだろうか。

しかしヒカリの予想とは裏腹に、玄関の方から慌てた様子で美鈴が駆け出してきた。

「あ！ ひ、ヒカリさんダメです！ 今お屋敷には入れません！」

「え？ 屋敷には入れないって……？」

ヒカリが美鈴に事情を聞こうとした瞬間、ズウンと重く地面が震えるような音が響いた。

「な、何この音！？」

「中でお嬢様たちが戦つてるんです！ しかも遠慮無しの本氣モードで……！」

「本氣モード……ー？」

本氣を出してレミリアとフランが中で戦っているというのだろうか。しかし、フランが本氣を出したらありとあらゆるもののが破壊されるのでは……？

「咲夜さんが空間を操作して被害を食い止めてるんです。でも、いつまで保つのか……」

「空間を操作？ 咲夜さんってそんなことも出来るんだ」

「の、呑気な」と言つてる場合じゃないですー。わわわ、どうじよ
どじよー!?」

「お、落ち着いて美鈴さん！ えっと、深呼吸です深呼吸！」

「わ、わかりました！ ひつひつふーー ひつひつふーー！」

「……それは何か違う気がする」

それでも美鈴は一応落ち着きを取り戻したらしく。

騒がしい物音が反響する玄関を見つめながら、美鈴はグッと握り拳を作つて勇ましく構えを取つてみせた。

「！」 こつなつたら私が行きます！ 危険ですのでヒカリさんはここでお待ちください。なに、すぐに戻つてきますから

「ちよ、美鈴さんー!?」

ダダッと一気に駆けこむと、おりやあ！ といづ声の後派手な爆発音とぴちゅーん！ といづ不可解な音が聞こえてきた。

……音は聞こえたのに、美鈴は帰つてこなかつた。

「美鈴さん……」

とりあえず黙祷。

「 もう、私が行くしかない」

正直、自殺行為にしか思えないのだが戦つているのはフランク姉なのだ。

素直になれないでいる、常に背中合わせの吸血鬼。

「ただ、止められるかどうかすぐ心配なんだけど……」

意を決しヒカリは手に護身用にドブリューナクを形作ると、瞳を「ぐく」と飲んで一步踏み出した。

玄関へ踏み込んだ瞬間、ヒカリに襲いかかる違和感。

それはいつも見ていた玄関と全く同じ景観なのに、目の前に伸びている廊下が果てしなく伸びているのが原因だった。

いつもなら廊下があつて、東西に伸びる階段があつて、東にはレミリアの自室やテラス、反対側にはフランやヒカリの部屋があるので。

が。
まず、階段がなかつた。

いや、あるといえはあるのだがそれが妙に遠かつた。

普段なら数メートルもないはずの距離なのに、今に限つては果てしなく遠い。

距離で言えば数百メートル、いやもつとかもしれない。

この紅魔館のホールが、異様なまでに広がっている。

咲夜の能力なのだろうか。

ヒカリが思考を巡らせていると、正面奥から爆発音と何かが激しくぶつかり合つ音が聞こえてきた。

「……せ、のッ！」

床を思い切り蹴り飛ばしまつすぐ突き進む。

光速で動くヒカリの目に、深紅の姉妹が映つた。

「ヒカリさん！？　ストップ！」

「う、わあー！？」

ヒカリの往く手を阻んできたのは咲夜だつた。

神妙な面持ちでヒカリを見据えると、やがて静かに首を振つた。

「ダメです。貴女には関わりのないこと」

「でもフランが！」

「レミリアお嬢様も、そのために戦つてこるのである」

「それはどういふ……」

咲夜の瞳が微かに伏せられ、やがて静かに口を開く。

「レミリアお嬢様がフランお嬢様を閉じ込める理由、何だと思いますか？」

「フランを閉じ込める理由？　それは……」

「ありとあらゆるもの破壊してしまつフランを封じるためだらうか。

「それも、少なからずあります。しかし本当の理由はそうではあります」

「と言つと？」

「……レミリアお嬢様は、お屋敷に閉じ込める」とフランお嬢様を守つているんです」

「守る……？」

今日の前で全力で殺し合つてゐるところに？

それは、何か矛盾していやしないだらうか。

「レミリアお嬢様にとつて、フランお嬢様はたつた一人の肉親。それを失いたくないんです。何人にも触れさせず、あくまで自分の手の中だけで」

「…………」

咲夜は続ける。

「外の世界を知れば、いつか自分を離れ何処かへ行ってしまうかもしれない。そんな不安からフランお嬢様を地下室へ幽閉し、常に自分が見える範囲に置いておきたかったのです。ずっと、片時も離れずに」

「…………」

ヒカリは、歯噛みした。

自分の近くに置いておきながら、ずっと傍に居ながら、レミリアはフランの気持ちに気づいていないのか。

「咲夜さん、退いて」

「ヒカリさん、まさか……？」

「ちょっとあのケンカ止めてくる」

「ま、待ってください！ 弹幕『しつこどなく、本気の殺し合……ッ！？』

突如咲夜の視界を遮る眩い閃光。

目の前にいたヒカリの髪や全身が金色に輝くと、ヒカリはこくりと小さく頷いた。

「大丈夫。すぐ戻ります」「で、ですが……ッ！」

咲夜が声をかけようとした瞬間には既にヒカリの姿はなく、金色の光を纏つたヒカリは一瞬のうちにレミリアとフランの間に立つた。

「……何、貴女」

「ヒカリちゃん……邪魔、しないで」

殺氣立つ深紅の瞳がヒカリを睨み据える。

ヒカリは軽く一人を一警してから槍を構えた。矛先は、レミリアに向けて。

「……何の真似かしら。部外者が私とやうつっての」

「素直に……」

「何？ 聞こえないわ」

「家族なら、妹なら……素直に言えばいいのに」

キッヒレミリアを見据え、ヒカリはブリューナクを高く掲げながら叫んだ。

「このケンカ、私が買った！ レミリア・スカーレット！ 私と戦え！」

第三十九話 姉妹喧嘩（後書き）

突然ですが、このお話を削除しようかと考えております。

理由は色々あるんですが、東方キャラの口調がおかしかったり、お話の流れや展開等、作品としてあまりにも酷く、このまま続けても読者の方を不快にさせてしまうだらうと判断したからです。それと言つのも全てこちらの力量不足。

これまで読んでくださった方々には、本当に申し訳ないです。

このお話をきつかけにユーザー登録、あるいはお気に入り登録してくださった方々は本当にありがとうございます。

このお話は明日から更新を停止しようかと思つています。

……ですが、まだちょっと迷っています。

このお話を諦めて次を頑張るのか。それとも駄作でも最後まで書き続けるのか……

第四十話 その身貫く意地は固く

「うああああああああああッ！！」

裂帛の気合の元、ヒカリはブリューナクをレミリアに光速を越える速さで鋭く突き立てる。

閃光を纏う切つ先が風を引き裂きレミリアの喉元へと向かう。手加減も遠慮も無しの一撃。

しかしレミリアの姿が瞬時に震んだかと思うとヒカリの背後に回り込み、その手に禍々しく輝くグングニルを大きく横に薙いだ。

「 ッ！」

微かな痛みを感じ、ヒカリは体を反らしステップを踏んで距離を取る。

どうにか反応は出来たものの、ヒカリの脇腹の辺りには微かに血に滲んでいた。

「……遅い」

「吸血鬼の本気……か。すごいな」

「刹那をも超える速度つてわりには、欠伸が出るほど遅かったわよ。

それで、本気？」

「……言つてくれる」

なら、もつと速く動けばいい。

それは至極単純なこと。

グッと姿勢を低く構え、そして一度ブリューナクを左手で握り直す。瞬間、ヒカリの立っていた床がまるで大槌で叩かれたかのように沈み、同時にヒカリはレミリアの真正面に飛んだ。

「ツ……！？」

「お返し」

レミリアでも田で追い切れない速度を殺さないまま放たれた右拳。派手に後方へと吹き飛ばし、咲夜の能力限界まで広げた世界の端の壁に巨大なクレーターを生み出した。

破壊力は当然速度に比例する。

これを普通の人間が喰らえれば、恐らくヒートの原型など留めることは不可能だろう。

だが、今の相手は吸血鬼だ。

「自分の血なんて、久々に見たわ」

壁に叩きつけられ骨の一本でも折れていてもおかしくないはずなのに、平然と立ち上がり口の中の血をプツと吐き出す。瞳は深紅。

それは鮮血の色。

獵奇的な瞳をした吸血鬼は一いつと小さく微笑つと、グングールを構え直し宙に浮かび上がった。

背に、黒い蝙蝠の翼のようなものが羽ばたいている。

「いいわ。殺してあげる」

そして加速。

ヒカリのそれと酷似した、いや、それすらも易々と凌駕しているんじゃないかと思えるほどの速度のグングールがヒカリのブリューナクと打ち合い火花を散らす。

ブリューナクの光の軌跡と、グングールの紅い軌跡が幾度と交差しては離れ、またぶつかり合い交錯していく。

咲夜には、目の前で何が起りしているのかさっぱりわからなかつた。

「見えない……ツー？ 一人の動きが、速過ぎて……」

「…………」

フランにもわからなかつた。

いや、咲夜と違つて彼女は一人の動きを余裕で捉えることは出来ている。

わからないのは、ヒカリが戦う理由。

何故、ヒカリは戦うのか。

喧嘩を止めるために、私たちではなくレミリアだけに矛先を向けたのは何故か。

思考を巡らせていると、ヒカリの体が反対方向の壁に激しく叩きつけられた。

「く……はツ」

息が、肺から直接漏れる。

脳が強い衝撃で揺さぶられ視界がぼやける。

ただ、視界の先のレミリアが蔑んだような目でこちらを見ているだけは、何となくわかつた。

「部外者のくせに姉妹の喧嘩に割り込むのがいけないの。それに、私と貴女じや次元が違うわ」

体の感覚が霞んでいく。
腕に、脚に力が入らない。

私はここで、こんなにも呆氣なく死んでしまうのか。
まだ誰の願いも運び終えていないのに。
まだ誰の願いも叶えていないのに。

「嫌……だ」

絞り出すようなヒカリの声。

槍を支えに、ふらつく体に鞭を打ちながら氣力だけで立ち上がる。

「……呆れた根性ね。死ねば楽になれたでしょ」「う」

「私にはまだ、死ねない理由があるんだ。こんなくだらない喧嘩のために、死んで、たまるか……ッ」

「くだらないですって……？」

レミリアの瞳に灯る紅い殺氣が全身を包み、魔槍の輝きを一層禍々しく照らす。

「貴女には関係のないことなのに、それなのにくだらないですって？ 何も知らない部外者が何を」

「私が部外者でも、他所者でも、私は、知ってるんだ！」

ヒカリの輝きが増す。

黄金の輝きはヒカリの全てを照らし、やがて直視できないほど眩い輝きに包まれていく。

レミリアが細めた瞳に、まるで後光に照らし出されたようにヒカリが雄々しく槍を構えて威風堂々と立つ。

「私は、フランの気持ちを知ってる。そして本当は、レミリアだって知ってるはず！」

「何を言つてゐのか、理解できないわ」

「絶対倒れるもんか……！ 私はこの願いを、必ず“叶える”んだ！ だから私は、この意地を貫く！」

「一人で熱血してなさい。どうせもうここに貴女の運命は終結。おわり好

きなだけほざくがいいわ」

グングニルを両手で斜め下方に構え目標を見据える。ヒカリの、胸元に狙いを澄ます。

「終わりよ。^{ヒカリ} 働い光。神槍『スピア・ザ・グングニル』

深紅の気を纏つた槍が一直線にヒカリへと突き進む。ヒカリはまっすぐ見据え、同じくブリューナクを投げるべく構える。

「私の、揺るぎない勝利を願え！ 聖槍『ブリューナク・ツヴァイ』」

閃光と共に、まるで流星のように軌跡を描いてグングニルと激しく衝突。力と力がぶつかり、周囲一帯を軋ませ、紅魔館全体がそのエネルギーに震え窓や壁に激しい亀裂が走る。

「お、お嬢様！？」
「ヒカリちゃん……！」

やがて收まりきれない力が暴走し、槍と槍同士が爆ぜ二人を凄まじい爆風が襲いかかる。

黒煙と瓦礫に包まれ、紅魔館のロビーはもはや跡形もなく崩壊していく。

「も、もうこれ以上は限界です……ッ！」

咲夜の力が切れると同時に、突然爆音が止み世界に静寂が訪れる。世界は戻り、目の前に広がる見慣れた紅魔館のロビー。

咲夜は戦慄に身を凍らせた。

「……！ も、お嬢様！？」

ロビー中央、大きく抉れた床の中心で、ヒカリといコトアは力尽き眠るようにして倒れていた。

第四十話 その身貫く意地は固く（後書き）

まず一言、申し訳ないです。

昨日は削除するつもりでいましたが、やつぱり中途半端に放り投げるのはよくないと思い、『scarlet stardust』の更新はお話を終わるその口まで続けることにします。コメントしてくださった方、そして今読んでくれてる読者の方、ありがとうございます。

本編については、今回は俺の大好きな要素がチラホラします。

こんな俺にも、力を貸してくれ、クルースニイイイクツ！

……知ってる人がいないって、寂しいなあ（涙

そんなにマイナーだらうか……？

描写はいまいちです。

……しかし、これじゃまるで俺がかまつてちゃんみたいで恥ずかしいなあ；

P・S

コーフスパーティ book of shadowが面白過ぎて
作業が進まな（ゝy

第四十一話 姉の真意

「…………あ、れ？」

目を覚ますとヒカリは自室のベッドで仰向けに寝かされていた。腕や足に違和感を感じ体を見ると白い包帯がぐるぐると巻かれている、動かそうとすると鈍い痛みが返ってきた。全身の痛みを感じ思い出す。

「そっか……。私、レミコアと本気で戦つて……それで……」

負けた……のだろうか。

どうも戦いの最後の部分の記憶が飛んでいて思い出せない。どうにか体を起こそうと上半身に力を入れようとすると、部屋のドアが少しだけ音を立てて開く。

「…………あら。目が覚めたのね」

「レミリア……」

現れたのはレミコアだった。

普段着ている淡い桃色のドレスではなく、今は白いワンピース姿となっていた。

「ドレスは今咲夜が直してゐる。貴女のおかげでボロボロよ」
「は、ははは……」

ちゅん、ヒカリの寝ているベッドにレミコアが腰掛ける。

そういうえば、こんなに近くで彼女を見るのは初めてだ。

微かに曇る横顔は、やはり姉妹と言つたところのかフランの横顔

とよく似ている。

ちょうど背も同じぐらいだ。

少し、沈黙。

先に口を開いたのはレミコアだった。

「……貴女がフランと出かけているのは最初から知っていたの」

「う……」

「ここに最近のフランの様子はおかしいし、咲夜もこっそり傍観してたみたいだけね。ずいぶんとフランと一緒に夜更かししてたのね」「……ごめんなさい。一人で行くつもりだったんだけど、最初の夜にフランに見つかっちゃって……」

「いいわよ。それを止めなかつた私にも責任はあるし。……それと」

「……？」

「一つ、訊いていいかしら

「どうぞ？」

レミコアの深紅の瞳がヒカリを見つめる。
少し、困惑しているように見える。

「貴女の言つていた、願いつて言つのはフランのこと?」

「……うん。私がここに来て最初に訊いた願い事は、フランの願い事だったから」

「フランの、願い事つて?」

消え入りそうな小さな声。

それを聞くのを躊躇つような……いや、レミコアの瞳は震えている。
彼女はフランの願い事を聞くのを、恐れていた。

「私を消してほしい、とか」

「ま、まさか！ そんなんじゃないですよ」

「じゃあ、私以外の家族や友人が欲しい、とか」「な……！ なんでさつきからそんな否定的なことを怖いからよ」

「……」

レミコアの即答に言葉を詰まらせた。

ヒカリは驚いた。

普段の彼女はもっと自信に溢れていって、常に相手に余裕を見せつけよう的な性格をしている。

それなのに、田の前のレミコアはひどく小さく見えた。震える声でレミコアが言つた。

「私の身勝手な理由でフランを長い間幽閉していた。だから、もしかしたら……フランは私のこと、恨んでるんじゃないかつて、怖くて不安で堪らないのよ」

「レミリア……」

「幽閉していたのは、私の我儘。別に能力なんて関係ない。誰かが壊れようが知ったこいつじゃない。私が恐れたのは、外の世界を知つた彼女が、いつか自分の元から離れるんじゃないかつて勝手に怯えた」

「……」

いつしかレミリアの声は震え、嗚咽が聞こえていた。

「……馬鹿みたい。これじゃまるで拗ねた子供。大好きな妹を独り占めしたいだけの、ただの」「いい姉妹だね。ちょっと羨ましいな」

レミコアの言葉を遮りヒカリが正直に言つた。

きょとんと顔を上げたレミリアに向き直ると、ヒカリはポシェット

の輝望石をやつと取り出した。

「『「いつかお姉様と、一緒にお出かけ出来ますよ!』』
「……！」

輝望石の光に照らされたレミコアの顔がハッとなる。ヒカリは続けた。

「最初の願い事は、フランの声だった。フランはレミコアのことが大好きで、いつも閉じ込める不満には思つてたみたいだけど、悪口とか、そういうことは一切言わなかつた。それつてきっとお姉様のレミコアのことが大好きつてことだよね」

「……」「フランって、すげー純粹だよね。一緒にいてそういう想つた。まつすぐつていうか、不器用つていうか」

「……」「やつこつといひは、姉妹だからなのかな。レミコアも似てるよね。へへ」

「……」

ヒカリが微笑むと、レミコアは小さく瞳を開じゆつべつと立ち上がつた。

そのまま部屋を出ようとアノブに手をかけ、一瞬だけヒカリを警した。

「……おやすみ」「あ……うん。おやすみ」

それだけ言い残してレミコアは部屋を出ていった。

「ごろんと仰向けに倒れ、見慣れた天井を見つめフツと息をつく。

「……私のお仕事、いつの間にか変わってるけど氣のせいかな。ふふッ。でもまあ、いつか」

誰かを笑顔に出来る素敵な仕事。

それはとても誇らしいことだ。

胸の奥がホッとするこの気持ちは、何だかとても嬉しくてくすぐつたい。

去り際のあの笑顔を見て、ヒカリは思った。

……そして同時に、寂しくもなった。

「明日で、ここともお別れなんだよね……」

窓に首を動かし空を見つめる。

金銀に煌めく星の大河が、存外近くに思えた。

第四十一話 姉の真意（後書き）

プロット不足過ぎて、ユリシアに圧倒的コレヅヤナイ感ががが；
んでもって明日からは最終章かな……

どうでもいいハナシ

紅魔郷クリア出来ねえ…………。orz

風神録は嫁まで行ければ満足なのでどうでもいいんですが。

第四十一話 別れの時はゆづりつと、確実に

次の日の朝、七の月の七日。
つまり七夕の日。

いつものようにヒカリは口の出と共に田を覚まし、まだ痛みの残る体を半分だけ起こすと軽く背伸びした。

「……痛いけど、歩けないほどじゃないや」

鏡台の前に座つて髪を梳かす。
すっかり見慣れてしまつた自分の金の髪を丁寧に梳かしていると、
コンコン、とノックする音が聞こえてきた。
びつた、と促すと出てきたのは咲夜だった。

「おはようございます。お体の具合はどうですか?」

「えと……はい。大丈夫です」

「それは何よりです。朝食のご用意が出来ておりますので、準備が出来たら食堂にいらしてくださいね」

「はーい」

ちよつと髪を梳かしていたので、ヒカリは軽く身なりを整えてから部屋を出て食堂へ向かう。

広々とした食堂に並ぶ丸型テーブル。

レミコアやパチュリー、妖精メイドの姿もほとんど揃つていて、どうやらヒカリは最後だつたらしい。

少し慌てながら席につくとすぐに朝食が並べられる。
今日の朝食はパンケーキ。

皿に載せられた大きな丸いパンケーキを眺めていると、ヒカリの傍にシロップの入った瓶が一つ差し出された。

「あれ、私だけ？」

見れば他の人には小さな小皿が用意されているだけで、丸々瓶一個というのはヒカリだけだった。

「咲夜さんから指示されたもので」

「そ、そななんだ。ありがとついぞります」

妖精メイドはぺこっと小さく頭を下げるとしゃべりとキッキンの方へと戻つていった。

「ヒカリちゃん、おはよー！」

ヒカリがパンケーキと格闘しているとフランの声が聞こえてきて振り向く。

フランが朝食を抱えながらヒカリの隣に腰掛けてきた。

「おはよ、フラン」

「今日、神社でお祭りやるんだよね？」

「うん。……あれ？ 私フランにその話したっけ？」

「さつきお姉様から聞いたよ？」

「レミリアが？ ふうん……」

するとフランが目をキラキラ輝かせながら血饅するかのようにヒカリに言った。

「それでね！ 私も行けることになつたのー！」

「行けるようこうして、お祭りに？」

「うんー！」

満面の笑みを浮かべるフラン。

ヒカリはレニアの方を横目でチラと見てからそっと微笑む。

「私、お姉様と出かけるの初めてなんだ！ すりいじく楽しみ！」

「ふふ、そつか」

「ね！ ヒカリちゃんももちろん一緒に行くんだよね？」

「もちろん。私のお仕事はまだ残ってるんだからね」

「お仕事終わったら、どうするの？」

その言葉に耳にし、ヒカリは手にしたナイフを止めた。

フランにとつてはただ何気なく聞いたつもりだったのかもしねい。

ヒカリは何となく返事しづらくて、笑って誤魔化した。

「え、えっと。じゃあ私は神社の方に行つてこようかな。お祭りのこと気になるし」

「……ヒカリちゃん？」

自分の食器を片づけ部屋に戻るとベッドの上に倒れこむ。
神社に行くとは言ったが、別にそんな予定は決まっていない。
それは咄嗟に口から出たただの出まかせだった。

「……フランに、何て言おうかな」

すぐそこまで迫る別れの時。

あの天真爛漫な笑顔を見るとやはり言いづらい。

フランは、何と思つだらうか。

「…………」

ポショットの輝望石を取り出し掲げてみる。

色々な願いを聞いたせいか、ミルク色の輝きは前見た時より強みを増していた。

もう少しで願いが溜まる。

そういえば、願いが溜まつた輝望石はどうなるのだろう。願いを吸収するという話はよく聞いたが、集まつた願いをどのようにして叶えるのかは全く聞いたことが無かつた。

「……やっぱり神社が気になるし、覗いてこようか」

このままここにいてもすることが無い気がした。

ヒカリは簡単に身支度を済ませると博麗神社に向かって飛んで行った。

・

境内に踏み込むと博麗神社には屈強な男の人たちが集まって作業をしていた。

石畳の道に沿つて屋台を並べたり提灯を用意したり……いつまでもなくお祭りの準備だ。

「あら、来てたの」

「靈夢さん」

石畳の道の真ん中で靈夢と出くわす。

彼女は男の人たちになにやら指示を出していたらしく、傍に立つていた彼らは靈夢の指差す方向に木材を抱えながら去つていった。

「お祭りとなると色々と準備が大変で困るわ。屋台とかで賑わうのは好きなんだけど」

「やういえ、あの竹は……」

「ああ、それなら

靈夢が顎で示す先に、青々と伸びる竹が見えた。

以前永遠亭で巨大過ぎたものを永琳の作った薬によつて縮小された竹は、それでも社本殿より少し小さめの大きさだった。

「あれぐらいでいいでしょ」

「でも、子供じゅうせつても届かないんじゃ

「なら、貴女がやれば？」

「え？」

すると、靈夢は竹の葉を指差しながら言った

「貴女があそこまで短冊を運んであげればいいじゃない。願いを運ぶ仕事の貴女なら適任じゃないの」

「あ、そっか」

「……ま、これは紫の提案なんだけどね」

お祭りに来た子供たちの短冊願いを直接受け取る。

まるでお詫え向きなほどにヒカリにぴったりの仕事だった。

「やういえ、貴女、願いを集めるのはいいけど、集めたらどうするの？ 自分で帰るの？ それとも、誰かが迎えに来るの？」

「えつと……」

多分、自分がここに来た時の流れ星を使えば帰れるはず……だが、果たして使えるだらうか。

墜落して、妖精の秘密基地にされかけ、願いのセンサーを引っこ抜いて……

今あの流れ星は使い物になるのだろうか。

何だか急に不安になつてきた。

もしもここまでやつて帰れないとなつたら、今までの仕事がすべて水の泡となつてしまつ。

「…………えと、急用を思い出したので帰ります!」

「あ、ちょっと…………!」

能力を使って飛び紅魔館の庭へそのまま着地。

流れ星は庭に放置したままで、よくよく考えればあの日以来一度も触つていなかつた。

恐る恐る内部のコンソールに手を伸ばしパネルを調べていく。

電源は点く。電源は……

「…………う、嘘でしょ

流れ星は、動かなかつた。

内部電源だけ点くが、それ以外の機能はこれっぽっちも動かない。ヒカリの顔がみるみるうちに青ざめていく。

ここまで来てたのに、ここまで来て…………?

「…………? 何だる、コレ」

正面モニターの左端に映る、小さな便箋のマーク。

メールが一通届いていた。

それはまさしく最後の希望。

パネルを操作し、便箋のマークにカーソルを合わせる。

白い文面に黒い字で文章が表示され、そこに書かれている文章を読

んでヒカリは一瞬ドキッとして、それからホッと胸をなで下ろした。

「……わかった。じゃ、最後までお仕事頑張るよ」

山ほど聞きたいことはある。

でも、それは仕事を全て終えて帰つてからゆっくり聞けばいい。

ヒカリは電源を切つて流れ星から出ると、畳下がりの空を見上げた。

……雲一つない青空が、少し眩しかった。

第四十一話 別れの時はゆうべつと、確実に（後書き）

今日は特に無し……かな。

第四十二話 星降る夜

その日の夜。

丘の上の博麗神社は幻想的な明かりに包まれ、行き交う人の喧騒で賑わっていた。

「これが、幻想郷の七夕祭り……」

境内正面の道を挟みこむように立ち並ぶ様々な屋台。金魚すくいや射的に夢中になる子供たち。

一見すると普通のお祭りなのだが、その背景にそびえる竹を見ると少しだけ気分が違つた。

よく見れば、子供たちの手には色とつどりの短冊が握りしめられている。

「なんだ。七夕のお祭りって言つても、ほとんど普通のお祭りじゃないの」

「まあまあお嬢様。フランお嬢様も喜んでいるのですからいいじゃないですか」

ヒカリの後ろから、ぶつくと文句を言つながらヒーリアと咲夜が石段を上ってくる。二人とも今日に合わせて浴衣姿である。

紅い金魚の泳ぐヒーリアの浴衣と、紺色に鮮やかな緑色の帯が目を引く咲夜の浴衣。

ちなみにヒカリは、紅魔館でヒーリアの別の浴衣を着ないかと勧められたが遠慮した。

「借りたまま返せなくなつたら困るしね……」

「お姉様～！ ヒカリちゃん！」

その後ろからすっかり馴染みの声が聞こえてきて振り返ると、レミリアとお揃いの浴衣のフランが飛び込んできた。

「つあつと。フラン、どうしたの？」

「えっへへ。何か樂しくってねー」

「はしゃぎ過ぎよフラン。もう少し落ち着きなさい」

「えー、せつかくのお祭りなのに？ ほらほら、お姉様もあつちで

リンゴ飴食べよしょー！」

「い、こらー。引っ張るんじゃないの……！ すぐに行くから待ちなさい。というか、貴女お金は

レミリアの手を強引に引っ張って人だかりに突っ込むフランを見て、ヒカリと咲夜は微笑む。

「今のレミリアの顔、すっごく照れてたね

「いい笑顔でしたよ」

「あつはは……」

それとは対照的に、ヒカリの顔にはうつすらと陰がかっていた。

「……あつと、いう間に、七日経ちましたね」

「ホント、あつと、いう間だった。あつと、いう間……。光陰矢の如しを体で表しちゃつたわけだ」

「フランお嬢様には、何と？」

「……まだ、何も言つてないよ

「よろしいのですか？ もう短冊のイベントは始まつてしまひますよ？」

「こつそ、何にも言わないで出て行こうかな……」

「本気、ですか？」

「…………」

正直、それも真剣に考えていた。

だが首を乱暴に振つてその考えを振りほどく。

「ははは。困ったね。ギリギリまで考えても、結局何も浮かんでこないんだもん」

「ヒカリさん……」

「あ、いたいた。ちょっとヒカリ、何をボケッとしてるのよ

「靈夢さん」

人混みをかき分け姿を現した靈夢は、少し息を荒げながらヒカリの手をがつしと掴んだ。

「え？　え？」

「短冊を持った子供たちが押し寄せてるのよ。アンタじゃないと意味ないでしょ」

「わ！　ちょちょひよ、そんな引っ張らなくて済むつてばー。わあーっ！？」

靈夢に引きずられながら境内の奥へと進むと、里中の子供たちがヒカリの姿を見るなり目を輝かせながら押し寄せていった。

「おねーさん！　お願ひします！」

「私が先だつてば！」

「するいぞ！　僕のが先だつて！」

「はいはい。押さない、慌てない、威張らない。順番に、あのおねーさんに短冊を渡しなさい」

「 「はーい！」

「……意外と面倒見いいんだな」

妙なことに感心している間にも、短冊を握りしめた子供たちは続々とヒカリに押し寄せていく。

まるでアイドルのサイン会のような気分だ。

残念ながら、既に短冊にはサイン願い事してあるけど。

「はい、おねーさん！」

「うん、確かに受け取ったよ」

「えへへ」

短冊を渡した女の子が笑顔を浮かべて小走りに戻っていく。
今度は男の子だ。次は女の子、また女の子、それから……
何十人と短冊を受け取り、そろそろ両手で抱えるには苦しくなった
ころ、いつか見た甘味処の男の子がやってきた。

「あれれ、君は」

「短冊、持ってきたよ」

「キミで最後かな。うん、確かに受け取りました」

「ありがと、おねーさん！」

また丁寧に頭を下げて戻つていく男の子で最後か、そう思つて振り返ろうとしたら肩を叩かれた。

振り返ると、そこには女の子、と呼ぶにはそろそろきつねつの背の高い女性が立っていた。

といふか、少なくとも子供ではないわけで。

「あれ？ 永琳さん？」

「姫にこれを預けたの貴女でしょう？ …… はい」

そつと差し出された短冊には見覚えがあった。

以前、永遠亭で出会った輝夜に手渡したあの短冊だ。

「よりしく、と。あれから貴女の」と、ずいぶん気にかけていらしてようですよ」

「へえ……輝夜さんがか。ちょっと嬉しいかも。どれどれ、お願ひ事は……」

「ちょっとヒカリ！ 時間も押してるんだから早くしてちょうどいいよ」

「も、もう少しぐらぐら読ませてくれても」

ずいづい背中を押され、仕方なく短冊をしまつ。

そのまま靈夢に押し出されてたどり着いたのは、あの堂々とそびえる竹の真下だった。

下から覗きこむとその迫力はいつそう増す。

靈夢が、葉の先端の方を指差した。

「あそこに吊るしてちょうだい」

「うん、了解」

「あ、そういう。私たちの短冊を渡し忘れるところだつたわ。……はい」

手渡されたのは、大量の短冊。

まるで札束のようなそれを、ヒカリは半眼で眺めた。

「……一人、一枚だよ？」

「誰がそんなルール決めた」

「せつこなあ……。どれ届けるかわからないから靈夢のはノーカン」

「そつちこそケチじゃないの。気前よく全部叶えなさい」

「無茶苦茶な巫女さんだな……」

無理やり短冊を押しつけてくる靈夢にたじたじだが、とりあえずヒカリは短冊を吊るすために竹へと飛んで枝の前で停止する。

「あ！ 流れ星だ！」

預かつた子供たちの短冊を一つずつ丁寧に結んではいるが、下の方から女の子の声が聞こえてきた。

とはいって、声が上がった瞬間に空を見上げても流れ星はもうとっくに消えているだろう。

だからすぐに声も止むはず。

そう思つて作業を再開したが、どうも様子がおかしい。

ヒカリが見降ろしてみると、お祭りを楽しんでいる人のほとんどの視線がヒカリに、いや、その奥へと注がれていた。

「…………？」

中にはポカンと口を開けて呆けている者もいれば、何故か両手を合わせて何かを拝んでいるようなヒトの姿もあった。
空で、何か起こっているのだろうか。

彼らと同じように空を見上げると、田の前の光景にヒカリは思わず手についていた短冊を落としかけた。

「な…………！」

夜空を切り裂く、白銀の流星。

一筋の光が軌跡を描きながら空を過ぎる、と、また別の流星が夜空を裂くようにして流れ落ちる。

ヒカリの今見上げている夜空に、通常では考えられないほど大量の流星が空を瞬いていた。

幾つも。何度も。

それはまるでこのお祭りを盛り上げようと、空が気を利かせてくれたように見える。

だが、ヒカリはわかつていた。

この行為が、誰の手によって行われているのかを。

「…………卑いよ。お母さん、お父さん」

残った短冊を全て吊るし終えると、ヒカリは神社へ下りずそのまま竹のてっぺんまで一気に飛んだ。

なおも幻想郷の上空を過ぎる流星。

そのうち、一際大きな流れ星二つがこちらへと向かって飛んでくる。下でどよめきが起こっていたがヒカリは気にせず、向かってくる流星を静かに見据えていた。

流星はやがて巨大な光の玉となつて落ちてくる。

ヒカリが合図をしようとした瞬間、背後、それから左右に気配を感じ振り向いた。

「え……、レミリアに、フラン。それに靈夢まで」

「何をボケツとしてるのー? 下に大勢人がいるつてのに何もしないつもり! ?」

「ち、違ツ! あれは私の

「今度は二つよ。靈夢は両方に攻撃して、私とフランで止めを指すわ

「浴衣、破れないかなあ?」

「破れないよう、注意なさいフラン」

「はーい！」

「ま、ままま待つて！？ だから、あの流れ星には私の」

グングニル、レーザ・テイン、そして靈夢の周囲には白と黒の妙な紋様の玉が浮遊する。

三人とも視線は真上から降り注がんとする流星に絞られていた。

「靈符『夢想封印』」

「れ、靈夢待つて！？ 私の話を」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「禁忌『レーザ・テイン』」

次々と戦闘態勢に入る三人。

もはやヒカリの言葉は届いておらず……

「あ、あわわわ……！？」

臨界点寸前の三人の術符はもう、止まらない。

「お母さん、お父さん、逃げてええええええええーーー！」

張り裂けんばかりの声で叫ぶヒカリ。

その声を遮るようにして進る三人の攻撃は、あつといつ間に流星に直撃し、神社の上空で粉微塵に碎いてしまった。

目の前の光景に、ヒカリは言葉が出なかつた。

黒煙の向こうで、流れ星はヒカリの時と同じように軌道を反らし神社の崖下へと落ちていいく。

「ふう……危機一髪つてヤツね」

「最近は隕石が多くて困るわ」

「よかつたねヒカリちゃん！……？ ヒカリちゃん？」

震えるヒカリの姿を見て、フランが心配そうに声をかける。

「あ、あの……」

「何？ 御礼ならいいのよ。そのかわり短冊の願い事を」

「今、私の……」

「ヒカリ、言いたいことがあるならハッキリと言こなさい。そんな

小さな声じゃ聞こえないわ」

「あれ……ヒカリちゃん、泣いてる？」

「あれはあ！ 私の、お母さんと… お父さんの流れ星だよお…！」

『…………え』

三人の表情が凍りつき、一瞬世界が音を失くしてしまったかのよう
な静寂が訪れた。

第四十二話 星降る夜に（後書き）

美「…………」

夜「…………」

美「あの、いいんですか？」

夜「いいんだよ。グリーンだよ……（泣）」

美「ところで、私の浴衣は？」

夜「…………」

美「…………何か言つてくださいよーーー？」

次回作は頑張る。

そろそろ終わるな……」のお話も。

第四十四話 親子水入らず

七夕祭りを一段落終えた博麗神社。

社の一室で床に平伏す二人の少女と明後日の方角を向く少女とがいた。

その先には、意外と質素な格好をした一人組の男女が苦笑いを浮かべていた。

「…………申し訳ございません」

「…………せん」

「なるほど。ヒカリも同じ歓迎を受けていたのか。ずいぶん見ないうちに幻想郷は過激になつっていたわけだ」

ハツハとあつけらかんと笑う男性に対し、女性の方はかなりキツイ表情を浮かべながら軽薄な笑みを浮かべる男性に唇を尖らせる。

「もう、笑い事じゃありません！ もしもヒカリに何かあつたら……」

「いやいや失敬。でも、ヒカリは『』覧の通り無事なんだから良しそうじゃないか」

「お母さん、お父さん、『』めんなさい。私ももう少し早く気づければ……」

二人が幻想郷に来ることは、流れ星で見たメールでヒカリは事前に知っていた。

『七夕の夜に迎えに来る』

ヒカリが紅魔館に墜落してから、すぐにメールは來ていたのだが仕事のせいで結局最後の夜になるまで気づかなかつたのだ。

だから誰にも知らせる余裕が無かつた。

……いや、お祭りで忘れていたといつもあるのだが。

「いいんだよヒカリ。……とにかくで、いつまで頭を下げているんだい？ ヒカリがお世話になつた人たちに、私たちからもちやんと御礼が言いたいんだがね」

「そつそつ。いつも……かん、でしたっけ？ ジジは神社のようだけど、ここがそうなの？」

「あ、いえ……。ジジは博麗神社で紅魔館じや……」

「あら、そつなの。じゃあ、御礼にうかがわないと」

「そ、その必要はないわ」

そっぽ向いていたレミコアが、やや上ずつたよつた声でヒカリの母に答えた。

珍しく緊張しているのだろうか。

おずおずといった様子でヒカリの母の前にきちんと手をついて座した。

もの凄い違和感。

「わ、私が紅魔館の主のレミコア・スカーレットよ……です。えと、このた、このたびは」

「お姉様、カクカクしてる」

「ふ、フランも頭を下げなさい。私たちは一度もこの親子を墜落させていいのよ」

「う……、『、『めんなさ』』」

一人でしおりしへ頭を下げるヒカリの両親は少し困惑したような顔になつた。

「ううん……、そんなに頭を下げられてしまつといひも困つてし

まうね」

「ヒカリに何かあれば人工衛星でも落とそうかと思っていたのだけれど……」

「そ、そういうことを『冗談でも言つたらいけないよキミ』

「でも、ヒカリはこの通り元気みたいだし、その件は水に流しましょう」

「…………すみません」

カエルみたいな低姿勢でもう一度姉妹が謝る。

……このままじゃ一向に話が続かない。

どうしようかとヒカリが考えていると、父親の方から口を開いた。

「えつと、キミたちに頼みたいことがあるんだけどいいかな

「頼み…………ですか？」

ヒカリの父親が頷く。

「まず一つ。ヒカリが一番お世話になつた紅魔館の人による挨拶をしたいから、一度紅魔館につかがつてもいいかな」

「そ、それぐらいなら、喜んで」

相変わらずカクカクしながらレミリアが答える。

父親はそれともう一つ、と指を立てた。

「ヒカリと、二人っきりでお話したいから席を外してくれると助かるな」

「あ……」

久々の親子の対面だといつのに、今ここにレミリアたちがいては邪魔になるだけだ。

そんな配慮も出来ないのかと自分を戒めながら、ユミリアはほんと咳払いをして立ち上がった。

「で、では私たちは失礼します
「ありがとう。それから、博麗の巫女さん、少し部屋を借りるよ
「ど、どうぞ」

そそくさと部屋を出ていく三人を見送ると、部屋の空気が少しだけ和んだような気がした。

お母さんと、お父さんと二人きりだなんて、いつ以来だろうか。

「お母さん！ お父さん！」

思わず一人の胸に飛び込むと、懐かしい匂いと感触がヒカリの全身を包みこむ。
優しくて、温かい感触。

「ふふ。元気そうで何よりだ」
「ずいぶん派手に暴れたりしてたみたいだけど、無事でよかつたわ
「え……？ 派手に暴れたとかって、何で知ってるの？
「ん。ポシェットを開いてじらん」

言われた通りポシェットを開く。

ここには自分の術符と、一人から預かった輝望石が入っている。
……まさかこの中に発信器でもあったのだろうか。

「輝望石には私たちの方に定期的にヒカリの声を届けてくれる、ちよつとしたオマケみたいな機能がついているのさ」

「えー？ そんなの知らなかつたよー？」

「輝望石は、人の意思や心の声を集めやすい特性があるの。別名チ

ヤネリングストーンとも呼ばれてたりするわ

「知らなかつた……」

と言つことは、今までの出来事のほとんどは簡抜けだつたといつことで、そつ考えるともの凄く恥ずかしかつた。

「……じゃあ、あの事も当然？」

二人は無言で頷く。

それは、目の前の両親が元幻想郷の住人で天人であつたらしいということ。

「別に隠すつもりはなかつたんだけどね。何となく言いそびれてただけさ」

「私たちは、あなたの想像通り、元天人よ」

「元天人……じゃあ、今は？」

「それはヒカリだつて知つているだろう？」

「……星の子、つてこと？」

「ああ、そうさ」

ヒカリの頭を撫ぜながら父親は微笑む。ゆつくりと、語り聞かせるように言つた。

「私たちは、元は幻想郷の天界で平凡に暮らしていたのさ。けれどね、天界は死も苦もない退屈な世界。私たちは天人でありながら、そのことに疑問を抱いたんだ。せつかく辛く苦しい修行を乗り越えたのに、その力を何者にも使わないことにね」

「だから私たちは、何か出来ることはないと考えた。そして、地上の人が空に祈る姿を見てパツと思いついたの」

「それが……流れ星？」

「そう。地上の人の願いを聞き届け、それを叶えられたらどれだけ素晴らしいか。自分が幸せの運び手になれるんだよ？ とても口マソニックじゃないか」

そう語る父の横顔はひどく無邪気で、まるで夢を語る子供のように純粋で眩しかつた。

「そこで私たちは、天界より上の世界、ソラを目指したわ。その当時の天界では大騒ぎになつてしまつたのだけれどね」

「天人なのに、変なことを始めたから？」

「おかげで私たちは追放されてしまつたんだけど、行き先は皮肉なことに目指していたソラの世界だつた。闇と虚空の世界を彷徨うつち、私たちはふとあるものを発見した。それが」

「輝望石……？」

満足げに頷く父親の顔を見ていると、こいつらまで何だか照れ臭い。

「調べた結果、人の祈りや想いに呼応して光るという変わった性質を持つていることが分かつた。どうにか研究を続けて願いを叶えることは出来ないだろうかと色々と試した。そして、特性を利用して願いをひたすら集めている時に変化が起こつた」

「突然、輝望石が金色に光つたかと思えば、輝く粒子を巻き散らしながら一気にソラを駆け抜けてどこかへと飛んで行つてしまつた。そして次の瞬間、下界である少女の願い事が叶つたのよ」

「え、えっと……お母さんとお父さんの、願いが集まつて、金色で

……？」

「ははは。いつぺんに覚える必要はないわ。これからゆづくり慣れればいい」

「じゃあ、私の髪が金色になつたのはどうして？ 天界の桃を食べたらこうなつたんだよ？」

「ううん……」

すると、意外なことに父親の顔が曇つた。
ヒカリの髪を触れながら真剣に観察している。

「……キミは、どう思つ?」

「……わからない。けど、ずいぶん綺麗に染まっちゃったわね」「まるで輝望石の輝きと同じ色だな。何か関係があるのかも」

「ええ? 二人にもわからないの?」

「」めんね。研究はまだ未知の部分が多くて……」

母親の残念そうな顔を見てヒカリもそれ以上追及できず、数歩後ずさつてはあと重いため息をつく。

「滅茶苦茶だよ。ねえ、これからどうするの? 流れ星墜落しちゃつたんだよ?」

「うむ。それなら心配いらないよ」

父親のポケットから小さな機械が顔を覗かせる。
何だろう、リモコンのよつな……

「こんなこともあらうかと、大気圏に予備の流れ星を待機させてい
るのぞ」

「ヒカリの経験が生きたわね」

「それじゃ、私実験体なの!?」

「はつはは。失敗からはちゃんと学ばないとな

「むう……」

「あそудだ。ヒカリの持つてる輝望石、見せてくれる?」

ポシェットの中の、ミルク色の輝望石を取り出すと一人の眉根が微

かに揺れた。

「あーり……？　これが輝望石？」

「そりだよ。……え、もしかして、私失敗しちゃったの……？」

恐る恐る訊ねると一人は縦にも横にも首を振らずただ呆然と輝望石を眺めていた。

二人とも、ミルク色の輝望石に目を奪われている。

「…………？」

「不思議だね。私たちの見ていた輝望石の反応と違っている」

「さつきも言つたけど、輝望石に願いが集まると金色の光が現れるのだけれど…………」

「金色なのは私だけ?」

「ははは。これじゃまるで、ヒカリが願いを吸収しちゃったみたいだな」

「わ、笑い事じやないって！」

一大事だ。

このままでは、せっかく集めた願いを叶えることが出来ないかもしれないではないか。

ここまで頑張ったのに、そんなのは困る。

「じゃあ、私が調べてみるよ。それが終わるまで少し時間がかかるかもしねないから……うん。じゃあ、お母さんと紅魔館に行つておいで。その間に終わらせておくから」

「う……うん。わかつたよ。じゃあ、ちゃんと調べてよ？　いい？」「もちろん。心配しなくて大丈夫だよ」

ヒカリから輝望石を受け取ると、父親は室内灯の明かりにかざして

みたり、ちょっと呴いてみたりと実験を始めた。

ここにいてもしょうがないし、お母さんと一緒に紅魔館に挨拶に行ひや。

……あ、そういえば。

「お母さんとお父さんの名前、教えてよ」

「ん？ 言つてなかつたか？」

「ずっとお母さんとか、キミとか、名前で呼び合つなんて忘れていたから仕方ないわよ」

ヒカリの目の前で、一人は何だか新婚さんみたいに初々しく見つめ合いながら小さく呼び合つた。

「ねえ、彦星さん？」

「改まつて呼ばれると照れるね。織姫さん」

第四十四話 親子水入らず（後書き）

ベタベタ……；

このお話も、あと2・3話で終わりかな。

P.S

ツイッターを見た人はお気づきかとは思いますが、現在うたプリに
めちゃくちゃハマっておりますww

翔君＆音也が非常にカッコイイですッ！

大好きです！ マジLOVE1000%でっすッ！

言つまでもありませんが、俺は男ですからね（迫真

第四十五話 ほんの小さな歓迎会

輝望石を調べるといつ彦星を博麗神社に残し、ヒカリと織姫は紅魔館へと続く道をゆっくりと、仲良く手を繋ぎながら歩いていた。能力を使つてしまえばあつといつ間なのだが何となくこうして静かに歩いていたかった。

ホームシックのせいも、あるのかもしない。
夜風の吹き抜ける森を抜けると、やがて紅いレンガ造りの大きな館が見えてきた。

「あれが紅魔館なのね？　へえ、見た目も紅いんだ」
「私が墜落したとき、助けてくれたのがあそこの人たちなの。みんなとつてもいい人だよ」
「ええ。ヒカリのその顔を見ればわかるわよ」

門を越えて玄関を開けると、早速紅魔館の妖精メイドとメイド長である咲夜が丁重に出迎えてくれた。

「ようこそ、紅魔館へ。ヒカリさんの母君さま」
「咲夜さん……！」
「あら、素敵な歓迎ね」

メイドに囮まれながらロビーを往くと、その奥でレミリアやパチュリー、小悪魔とフランが綺麗に整列していた。
皆、手には小さな花束何か握りしめている。

「有り合わせで申し訳ないですが、小さな歓迎会を催してみました」「まあ……それはそれは。どうせならあの人も連れてくればよかつたわね」

「……ヒカリさんの父君は？」

「神社でちょっと、ね。研究の邪魔しちゃ悪いし、私たちだけで楽しみましょううか」

「でも、お父さんに悪いよ」

「いいのよ。こんな女の子だけの中にもさう男が一人いても無粋でしょ？」

「……普通自分の旦那をそこまで酷く言わないと思つんだけビ」

花束を受け取り、一人一人に謝辞の言葉を述べる織姫。

自分のこととこうこともあって凄く照れ臭い。

あまりに恥ずかし過ぎて、思わずこっちも笑つてしまつ。

「ありがとう。ヒカリを助けてくれた人たちが、こんなにも素敵な人で嬉しいわ」

「ヒカリさんも、毎晩両親のためにと張り切つてお仕事を全うしてましたよ」

「ふふふ。親孝行な娘をもつと鼻が高いわ」

「も、もうー。恥ずかしいなあ……」

ふと、織姫が花束を抱えたままレミリアとフランの元へと歩みよる。フランは「パツ」と笑つて花束を手渡し、レミリアも少しだけこちない動作で手渡す。

「はい、おかーさま！」

「ありがとうございます、フランちゃん。それにレミリアちゃんも」

「えつへへ」

「急いでしらえの歓迎会だけど、楽しんでくれたかしら」

「ええ、もちろん。ヒカリのこと、二人とも本当にありがとう」

「ボン！」という効果音が鳴つたかどうかはわからないが、織姫の言

葉にレミコアの顔が一瞬で真っ赤になった。

「い、いちいち改めて言わなくても結構。ヒカリを助けたのも、ただの気まぐれだし……」「

「お姉様、恥ずかしがってる?」

「ば、バカ! んなわけないでしょ!」

「本当、素敵な姉妹ね。そつくりだし、とても仲が良くて」

「うわわッ! ?」

「きやッ!」

織姫の両腕が一人を包む。

それは一人にとって初めての温もり。

……いや、もしかしたら遠い昔に包まれていたであろう懐かしく、照れ臭くもある不思議な温もり。

「ヒカリと友達になつてくれて、ありがとう。あなたたちが助けてくれなかつたら、ヒカリはどうなつていたか……」

「…………」

「…………へへ」

レミコアは目を点にして、フランは照れ臭そうに笑った。
呆けるレミコアを見て、織姫は心底不思議そうな表情になつた。

「…………あら? どうした?」

「な、何でもないわ。その、くつつかると暑いのだけれど……」

「ええ? もうちよつとギュッしてもらおうよ~?」

「もしかして、恥ずかしいのかしら? ふふッ、レミコアちゃんは可愛いわね」

「だ、誰が……む」

よりいつも強く抱きよせられ、言葉が詰まる。

結局、レミリアは終始しかめつ面だつたけれど、織姫は満足したのかそつと手を離した。

「……」、「ホン。じゃあ、乾杯でもしましょうか。せつかく出合えた記念ですもの。貴女、お酒は平気？」

「ううん、こめんなさいね。流れ星に乗る時は飲酒厳禁なのよ。もの凄く揺れるから戻しちゃうかもしないし、それに法律で厳しく取り締まれてるのよ」

「そう……。じゃあ、ジュースならいいわよね

「ええ。もちろん

用意していたワインとは別に、オレンジジュースを織姫のグラスに注ぐ。

全員分のグラスに注ぎ、レミリアの命図で宙に掲げる。

「乾杯

オレンジジュースを一気に飲み干すと、ヒカリと織姫はううんと唸りながらグラスをしげしげと見つめていた。

「あら、どうかしたの？」

レミリアが訊ねると、二人は同じタイミングで振り向いて、これまた同じ言葉を言った。

「これ、ちょっと砂糖が足りない

「これ、お砂糖が少ないわね」

「……それは母親譲りだったのね

せつかく乾杯して締めたと思ったのに、二人の言葉でひとつと笑いが起きて乾杯が仕切り直しなった。

笑いあう親子。

笑いあう姉妹。

しかし、一時訪れた楽しい時間はそう長く続くわけもなく……

「じゃあ、ヒカリ。そろそろ帰りましょうか」

「あ……」

帰る。

その言葉を聞いてヒカリと、それからもう一人が表情を凍りつかせた。

「……え？ ヒカリちゃん、帰っちゃうの……？」

「ふ、フラン……」

メイドを押し退けフランがヒカリに詰め寄る。

今今まで言い出せなかつた別れ。

フランの手が、きゅっとヒカリのロープを強く握りしめた。

「ヒカリちゃんはまだ帰らないもん！ 私と遊ぶんだよ！ もつともつといっぱい遊ぶんだよ？」

「ふ、フラン私……」

ロープを握る手が、痛い。

フランの力が強く、強くヒカリを掴んで離さない。

ヒカリが、フランの手を握るのとした瞬間、別の手がフランの手をヒカリから引き剥がした。

「あ……ン」

「フラン、止めなさい」

レミコアが強く、寝めるような口調で言つた。

首だけ動かしヒカリと織姫を一瞥すると、軽く頭を下げた。

「…………」めんなさい。妹が迷惑を」

「レミコア…………いや、でも」

「離してお姉ちゃん……」

「ン…………フラン……」

レミコアの手を振りほどき、フランはメイドやヒカリの間を風のようにに突きぬけて紅魔館の外へと飛びだして行つてしまつた。

「あ、待ちなれ」

レミコアの言葉を、織姫の手が遮る。

そして優しい瞳でヒカリを見据えると、フランが飛び出して行つた夜の闇の向こうを指差す。

「ヒカリ、行つてきなさい」

「お母さん……」

「あなたの友達でしょ？　自分でちやんとお別れの挨拶しなきゃ」

「…………ン」

でも、何を言つていいのかわからない。

何でフランに声をかけたらいいのかわからない。

フランに、何で言われるのか怖い。

もしかしたら、もう一度とフランに口を聞いてもらひえな

「うん！」

「うわー？」

思い切り背中を叩かれ、前のめりにつんのめるヒカリ。振り返ると、背中を叩いたのは織姫だった。

「フランの願い事、聞けるよ」ならなきや立派な星の子にはなれないわよ？」

「でもれ……」

「ほら、行くのー！」

「は、はいー！」

これ以上にこじでーの足踏んでいたり胸に怒られてしまつ。脱兎の如く駆け出したヒカリの姿は、やがて夜の闇の中へと溶け込んで消えていった。

「ふむ。あの子の優柔不斷な性格は誰に似たのかしら」

「すみません。私の方からフランお嬢様に何か一言言つておけば…

…

「そんなことしたらあなたの頭に隕石を落としますよ」

「は……？」

「ふふ。『可愛い子には旅をさせよ』って言つでしょ？　自分の苦難ぐらい、自分の力で乗り越えなきや、誰かの願いを叶えることなんて出来ないわ」

「し、しかし……」

心配する咲夜を見て、織姫はクスッと小さく笑みを漏らした。

「過保護過ぎるのもよくないわよ？ たまにはメイドの『いつ』と無視して思いっきり遊びたいっていう子もいるのよ？」

「え？ それはどういっ……」

「じゃあ、そろそろお暇しましょうか。素敵な歓迎会、ありがとうございます」

では

織姫は小さく会釈すると、そそくかとお闇を抜けて歩き出した。

「あ、お待ちください！ 神社までお送りしますから」

「いいえ、結構よ。自分が歩いた道ぐらい覚えてますもの。ふふ」

そう言つてヒラヒラと手を振りながら、織姫は元来た道をゆっくりとした足取りで戻つていった。

「はあ……。すゞぐ、マイペースな方なのでしょうか。ペースが全く掴めませんでした」

「……母親、か」

とことこ歩く織姫の姿を見つめながら、そんな言葉がレミコニアの口から零れる。

私の両親は、どんなだったのだろうか。

「…………」

考えて、止める。

居もしなければ、覚えてもない両親のことを考えて何になるのだろうか。

……けれど、一つだけわかることがある。

「……あの温もつけ、嫌いじゃない」

第四十五話 ほんの少的な歓迎会（後書き）

やつぱりクラスマッチクスを書くのは少し辛いな……。

お気に入り登録、ありがとうございます。

も少しだけ、お付き合っていただけると嬉しいです。

第四十六話 私はいつでも、ソラにいるから

紅魔館を飛び出したフランを追つて、ヒカリは自分の流れ星が墜落したあの湖に辿り着いた。

虫の音と風の音以外全く聞こえない湖は空に浮かぶ月を照らしている。

ヒカリは走つて、何度もフランの名前を呼んだ。

「フランー、どこのおー。」

声が虚しく湖面に響く。

辺りを見回して、もう一度走り出す。

獣道を走る中、ヒカリは後悔していた。

どうしてもっと早くに言わなかつたのだろう。

どうして言えなかつたのだろう。

もつと早くに別れのことを言つておけば、フランも理解してくれたかも知れないのに。

私は何を恐れていたのだろうか。

「……フラン」

幻想郷に来て出来た最初の友達。

無邪気で底抜けに明るくて、ちょっと危ない能力を持つていて、けど、素敵な友達。

そんな友達に、何も言わず、何も言えずに別れるのは……嫌だ。森の中へと入り走り続けていると、やがて開けた場所に出た。

「あ」

ぽつかりと空いたその場所の真ん中に、フランの姿はあった。

何故かフランは呆然と立ち尽くしながら、時々体を揺らしながら夜空を見上げていた。

まるで空に何か探してこむみづ。

「フラン、何をしてるの？」

「……流れ星、探してるの」

「え……？」

予想もしなかつた言葉にヒカリが聞き返す。

フランは空を見上げたまま答えた。

「咲夜が言つてた。流れ星が消える前に願い事を言えば、その願い事が叶うって」

「それは……」

「ヒカリちゃん離れ離れになりませんよううつて、願うの」

「……」

何か、答えなくては。

ヒカリが頭の中で言葉を考えていると、それより先にフランが振り向いた。

懇願するような上田づかに、涙をいっぱいに溜めて。

「ヒカリちゃん、私とずっと一緒にいよつよ。お姉様も咲夜も説得して一緒に紅魔館で遊ぼつよ。きっと、きっと楽しいよ？」

「……うん。そうだねフラン。ずっと一緒にいられればたぶん、楽しこと思う。……けど、ダメだよ」

「どうして……！？」

張り裂けんばかりの声が胸に突き刺さる。

でも、こればかりはビリしようもない。

私は……星の子なんだ。

人から願いを集めて、その願いを叶えなきやいけない。

「星の子は集めた願いを叶えるんだよ。私は今日、幻想郷の人の願いをいっぱい受け取つた。だから、この願いを叶えなくちゃ」

「そんなの、ヒカリちゃんじゃなくともいいじゃん！　お母さんとか、お父さんでも……！」

「これは私のお仕事だもの。私がやらなきゃ、ダメなんだよ」

「そんなの……！　そんなの……ッ」

フランの声が震え、やがて消え入るよつに少しづつ小さくなつていく。

その小さな体が、いつにも増して小さく見えた。

ヒカリが一步踏み込んで、フランの傍に立つ。

「あ……」

無意識に、ヒカリがフランを抱き寄せる。

紅魔館で織姫が見せたそれと同じよつに、両手でフランの体を抱きしめた。

「……」めんね。もう少し早く言えればよかつたんだけど

「ヒカリちゃん……？」

腕の中、フランはヒカリが微かに震えて「る」とに氣がつく。
顔を上げると、両目に零れんばかりの涙が揺れていた。

「私もね、フランと離れるのは嫌だよ？　だけど、私が帰らなきや、せつかく集めた願い事が叶わなくなっちゃうよ。そうなつたら、願

い事をした人が悲しんじゃうよ」

「だ、だけど……私、寂しいよー。せつかく出来た、友達なのに……」

…

「大丈夫だよ、フラン」

「……え」

涙をいっぱいに溜めた顔のまま、ヒカリは無理に微笑んだ。
涙がこぼれたかもしれない。

けれど、笑った。

「私はいつでも、フランを見守ってる。ずっとずっと空の上だけ、
ずっと見守つてあげるよ」

「ヒカリちゃん……」

「それにほら、会いたくなつたら流れ星にお願い事すればいいんだ
よ。そうすれば、もしかしたら叶うかもよ?」

ヒカリがそつと手を離し、一歩二歩と後ずさると、その背後に一つの
人影がこつそりと姿を見せる。

「ヒカリ、迎えに来たわ」

「そろそろ戻らないといけない時間だからね」

彦星と織姫だった。

二人の姿を一瞥すると、ヒカリはそのままゆっくりと歩き出した。

「ひ、ヒカリちゃん！」

背中に手を伸ばしかけて、そして止める。
ヒカリが振り返つて笑つたから。

「フラン、本当に今までありがとうございました！　フランのおかげで幻想郷で楽しく過ごせたよ」

「私たちからもお礼を言つわ。ヒカリと仲良くしてくれて本当に、ありがとうございました」

「何、そんなに寂しがることはないさ。私たちは」

彦星がそっと夜空を指を指す。

宝石を散りばめたように満天の星が広がる、ソラを。

「私はいつでも、ソラにいるからー！」

「ヒカリちゃん……ヒカリちゃんー！」

フランがもう一度名前を叫ぼうとした瞬間、突如ヒカリたちの姿が七色に輝き包まれフランは思わず目を瞑ってしまった。

「…………」

フランが目を開けたその時、既にヒカリの姿はなかった。
何も残らない、呆氣ないお別れだった。

……お別れ、だつたのだろうか。

「…………私まだ、さよならって、言つてないよ…………？」

ヒカリも、フランも、さよならとは言わなかつた。

ヒカリが忘れていた？

それとも、フランが忘れていた？

あまりに唐突過ぎて、そんな言葉をかける余裕すらなかつたのだろうか。

「…………また、会えるんだよね？　ヒカリちゃん」

空を見上げる。

一筋の光が、幻想郷の空を綺麗な曲線を描きながら彼方へと消えていく。

フランはそんな星をしばらく見つめて、やがて紅魔館の方へゆっくりと歩き出した。

・

「これで、よかつたのかい？」

「うん。これでいい」

ヒカリはだんだんと小さくなつていいく紅い屋根を見送りながら言った。

「さ、これから忙しいんだから早く帰らないとね！　お願ひ事、全部叶えなくっちゃ！」

ヒカリは努めて明るく言った。

震える体を、こぼれ落ちそうになる涙を、二人に見せまいと、必死で。

「……ありがと、フラン」

やがて雲や大気の層を抜け、見慣れたあの漆黒の世界が目の前に広がっていく。

これからまた忙しくなる。

頬をバシバシ叩いて気合いを入れ直すと、くしゃくしゃになつてい

た顔に少し喝が入ったような気がした。

「お母さんー、お父さんー、早く願い事、叶えよー。」

早くみんなの願いを、叶えなきや。

ヒカリたちを乗せた流れ星は、遙か銀河の彼方へ吸い込まれるようにして消えていった。

第四十六話 私はいつでも、ソラにいるから（後書き）

明日最終回＆あとがきです。

…… そういえば、今日の早朝の5時だけ妙にアクセス数が伸びたのは何だったんだろうか？；

最終話 scarlet stardust

あれから一ヶ月が過ぎ、幻想郷に秋が訪れた。吹き抜ける風は意外と肌寒く、それはそう遠くない冬の始まりを告げるようだつた。

そんな中、フランにはある習慣が出来ていた。それは皆が寝静まつた真夜中に、二つそりと屋根に飛び乗つて星空を見上げることだ。

「…………」

ただぼんやりと星の散らばる空を見上げるだけだが、フランはある日からほぼ毎日続けていた。

毎晩眺め続けた結果、星座の名前やその星の位置まで分かるほどに。フランは、流れ星を探していた。それも、普通の流れ星ではない。

大切な友達が、この幻想郷に訪れるために用いる特別な流れ星。

「早く、来ないかな。来たら、真っ先に私が撃ち落としてあげるのに」

聞き様によつては相当物騒な言葉だが、フランの顔はとても嬉しそうだつた。

そう。

フランは待つっていた。

いつか、また会えると信じてずっと夜空を眺めていた。

あの日のように、空から友達が落ちてくるような素敵な夜を願いながら。

「…………」

流れ星に願いを祈れば、その願いが叶う。

あの時メイド長に言われた言葉は本当だつた。

深紅の流星に願つた、フランの願い事は見事に叶つた。

それは彼女のおかげというのもあるのだけれど、願いが叶つたことに変わりはない。

流れ星は、願いを叶えてくれる。

フランはそう信じて、今も流れ星を探している。

……ただ、フランが探している流れ星は少し違うのだけれど。

「紅い流れ星は見つかったかしら？」

不意に声と、それから甘い香りが漂つてきて振り返ると、そこには姉であるレミリアが小さなカップを持って立っていた。

「お姉様」

「はい、「ココア。まだ秋とはいえ、こんなところにいては体が冷めてしまつわよ?」

「へへ。ありがとうございます」

両手でココアを受け取り、そつと口をつける。

ほどよい甘さだけど、もし彼女が飲んだら、やっぱり砂糖が足りないとか不満を言うのだろうか。

……きっと言つんだろうな。

「お姉様、お砂糖足りないよ?」

「もう。貴方まで甘党になつてどうするのよ」

「……元気に、してるのかな」

「……どうかしらね」

レミリアがフランの真横に腰掛けた。

「ううん、どうなかしら。少なくともフランの願い事は叶つたん
でしょ？」

「うん！……あれ？ お姉様、私の願い事知つてたの？」
「え？ そ、それは……その、咲夜が言つてたわよ？」

「……？ 咲夜に、話したつけかなあ？」

首を傾げるフランを見て、レミリアがホッと胸をなで下ろす。

本人の知らぬところで得た情報だし、たぶん機嫌を悪くするだろう。
せつかく前よりは仲良くなれたのだから、この距離を壊してしまつ
のはもつたいない。

「あ！ 流れ星だ！」

フランが指差す先で、小さな光が煌めいて夜空を滑る。
流れ星は一瞬で消えてしまったのだが、フランは両手を組んで一生
懸命何かお祈りをしていた。

内容は、わかっているのだけれど、

「けど、流れ星に流れ星を願つていいのかしら？」

「大丈夫だよ。きっと願った瞬間にここに来てくれるもん。そうした
ら、また落とせばいいの！」

「……怒られても知らないわよ」

そして二人並んで、星空を見上げる。

寒さも増して空気が住んでいるせいが、いつもより星がハツキリと見える。

これならあの流れ星もすぐに見つかりそうだ。

「……あー、また流れ星！」

フランが再び指を指す。

今度はすぐには消えず、柔らかな曲線を描いてゆっくりと滑っていた。

両手を組んでお祈りをしようとしたフランの横で、レミリアはそつと微笑み魔槍を握りしめた。

「あれ？ お姉様？」

「落とすんでしょう？ 付き合つわよ

「だつて、あの流れ星は……あー」

フランが顔を上げ満面の笑みを浮かべた。

紅く軌跡を描く流星が、夜空に軌跡を描いていた。

立ち上がる姉妹。

その手に、剣と槍とを携えて。

「えっへへ。やっと来たよ！ 待ちくたびれちゃった！」

「いらっしゃい再会ってどうなのかしらね。……ふふ

不敵に微笑み、二人は同時に屋根を蹴つ飛ばして飛んだ。
深紅に輝く流星を見据え、手にした得物を振りかざす。

息の合つた姉妹の力が激しくぶつかり合い、流星は呆氣なく地面へと叩き落とされる。

墜ちた流星はそのまま紅魔館横の森に墜落し、地面を大きく抉つて黒煙を纏いながらやがて動きが止まる。

「せり、フラン」

「うんー。」

体を一気に加速させ、流星の墜落した場所に飛び込む。
見覚えのある巨大な黒い隕石。

ぶすぶすと黒煙を吐きだしながら、やがて内側から「じんじんとくぐ
もつた音が響くと、ドン！ と隕石にぽつかりと穴が開いた。
そして中から、夜闇の中でもハッキリと見える金の髪が姿を見せた。

「ふつはあ！ ま、また落とされた……つて、うおわッ！？」
「ヒカリちゃん……」

フランに首に抱きつかれ、そのまま勢いで地面に落ちる金の髪の少
女。
月明かりに照らされ少女の姿が「つづら」と明らかになつていぐ。
白いローブ、小さなポショット。
金の髪と同じ金色の瞳には、小さく涙が溜まつていた。

「声が聞こえたから来たのに……。あ、荒っぽい再会だね……はは
「ヒカリちゃん！ やつぱり、私の声聞こえてたのー？」
「もちろん。私は願い事を聞くため、叶えるためにここに来たんだ
から」

「シヒ、フランの笑みに負けないよう微笑みながらヒカリは言った。

「『私とまた遊べますよつか。』『いいよフラン。今日せとじとと
一緒に遊ぼつか！』

「うんー。」

二人は立ち上がる、並んで紅魔館を目指して走り出す。
今まで会えなかつた分、何を話そうか。何をしようか。
フランの頭の中は、そのことでいっぱいだつた。

「ヒカリちゃん！」

「何？ フラン」

「ありがとう！ 私の願い事、聞いてくれて！」

ヒカリが見たフランの笑顔は、流星に負けないくらいとても素敵で
綺麗な笑顔だつた。

（Fin）

あとがき、30分後です。

・あとがき・scarlet stardust

このたびは、『scarlet stardust』を読んでいた
だき、ありがとうございます。

今作は約14万文字という、今まで書いたお話の中でも一番の長さ
のお話でしたけど、いかがでしたか？

ここまで書き続けられたのも、読者の皆様方のおかげです。
ありがとうございました。

二次創作長編もこれで第5作目。

……とはいって、前作よりも酷いお話となってしましました；
いろいろと申し訳ないです。

プロットが足りずお話の展開やキャラの心情等があやふやであつた
り、原作キャラとの相違だつたりと、正直言えば今作は駄作です；
書きたい！ って思うと書いてしまう性格ゆえ、ある程度プロット
が出来上ると書きたくないっちゃうんですよね。
もつと細かくプロット作つて、お話の道筋とか、キャラの細かな設
定など、次回作への課題です。

それでも最後まで読んでくれた読者の皆様には感謝します。

……だいたい、日に120人前後だけど；

個人的には、今まで書いたお話の中で一番酷いんじゃないかな；

次回作は一応数種類ほどお話のアイディアがあります。

けど、もう少し時間をかけて準備するので、公開は早くて来月の頭
ぐらい……かな？

もしかしたらそれまでの間に短編を書くかもしません。

それと、次回作今度からちょっと更新頻度を下げよつかと思つてます。

1話1話の出来をもう少しあげたいので、そりんといじり承ください。

……まあ、気まぐれですのでまた毎日更新できるかも……しれませんけど。

ええ、では今作のあとがきを終了します。

……の、前にヒカリたちの設定だけメモして終わりましょうか。

『緋彗ヒカリ』

数秒の思い付きで出来たキャラです。

緋彗、というのは緋色の彗星から。

わかりやすく中途半端な能力になってしまい、もの凄く残念な性能に……

術符は主に光、速さに関する用語で出来ています。

・瞬符『光陰矢の如し』

ことわざ、田中が経つのは早い、という意味です。

・刹符『プラチナラピッドファイア』

白金はヒカリの元の髪の色。

ラピッドファイアというのはニアガンの機構の一つで、引き金を引きっぱなしにして撃ち続けることが出来る機構のことです。

・迅符『マッシュ・ストレイト』

マッシュは音速、ストレイトは単純にグーパンです。

・瞬光『せつなさみだれうち』

元ネタは、女神異聞録ペルソナの弓を用いる特殊攻撃。

本来は漢字で『刹那五月雨撃ち』ですが、ゲーム内ではひらがな表記なので『せつなさみだれうち』となっています。

『ランス・オブ・ブリューナク』

聖槍『ブリューナク・ツヴァイ』

ブリューナクってのは、ケルト神話に登場する武器です。

貫くもの、という意味の太陽神ルーの所有物。

穂先が5つに分かれていて、それぞれの切っ先から放たれた光は5人まとめて貫けるんだとか……

俺は、ブリューナクと聞くと特務局が出てくるんですけどね。ツヴァイをつけたのも、そのシリーズのモノと関係しています。

それと、ヒカリの両親は七夕と言えばのあの一人でした。

このお話を思いついたのはちょうど七夕でしたから必ず出そうと思つていました。

二人のお話は有名ですので割愛。

天界に帝というのは何となくつけたオリジナルです。

ううん、そんなところかな？

中途半端になっちゃいましたが、あとがきを終わります。

次回作をお楽しみに。

それでは。

・あとがき・ scarlet stardust (後書き)

こんな駄作でしたが、最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

次回作まで、しばしの別れ。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1759v/>

Scarlet Stardust

2011年9月11日16時26分発行